

小沢原遺跡・高崎遺跡

—史跡連絡線関連遺跡発掘調査報告書—



平成11年3月

多賀城市教育委員会
多賀城市建設部道路課

多賀城市文化財調査報告書第54集

小沢原遺跡・高崎遺跡

—史跡連絡線関連遺跡発掘調査報告書—

平成11年3月

多賀城市教育委員会
多賀城市建設部道路課

序 文

現在、多賀城跡のある浮島地区と寺跡のある高崎地区とを結ぶ都市計画道路一史跡連絡線一の建設工事が進められております。昭和62年に都市計画決定され、事業認可を受けて以来すでに10年以上の歳月が経過致しました。

この道路建設と埋蔵文化財との関わりが生じ、発掘調査に着手したのは平成5年のことであります。それ以来、断続的に調査を進めてまいりましたが、数多くの成果を挙げ、ようやくその調査報告書をまとめることができました。調査中、小沢原遺跡の範囲の拡大などいくつかの問題がありましたが、関係当局の理解を得、つつがなく調査を実施できたことに対し、埋蔵文化財保護行政に関わる者の一人として大きな喜びを感じております。

今回調査を行った高崎遺跡と小沢原遺跡はいずれも多賀城跡や寺跡に近接する遺跡であります。高崎遺跡につきましては、これまでたびたび調査が実施され、そのつど成果の報告を行っておりますが、小沢原遺跡は、今回の事業によって初めて学術的な調査が行われた遺跡であります。その結果、掘立柱建物跡や竪穴住居跡などが発見され、多賀城をとりまく古代の遺跡の広がりやまた一つ明らかになりました。近年、多賀城南面の平野部において古代都市の存在が注目されておりますが、さらに周辺の丘陵部まで視野に入れた広い多賀城像が求められるべきであります。本書が、古代史研究に僅かなりとも寄与するところありとすれば望外の喜びであります。

最後になりましたが、発掘調査および資料の整理、そして本書の刊行に至るまでご支援・ご指導いただきました関係各位に対し、衷心より御礼申し上げます。

平成11年3月

多賀城市教育委員会

教育長 櫻井茂男

例 言

1. 本書は、平成5年度から9年度にかけて実施した都市計画道路一史跡連絡線一建設に係る小沢原遺跡第1・2・4次調査と高崎遺跡第12・21次調査の成果をまとめたものである。
3. 発掘調査から調査報告書作成に至る一連の作業は、本件の開発行為に係わる都市計画課（現在の道路課）の依頼を受け、埋蔵文化財調査センターが行った。
4. 平面図における座標値は国土座標「平面直角座標系X」を使用して設定した。
5. 挿図中の高さは標高値である。
6. 土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1973）を使用した。
7. 出土遺物のうち、土器と瓦については宮城県多賀城跡調査研究所の分類に基本的に依拠した。ただし、同研究所で使用している「須恵系土器」については、当市が昭和54年度以降使用している「赤焼き土器」の用語を使用した。
8. 本書第2図は建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の1/25,000地形図「仙台東北部」「塩竈」を複製したものである（承認番号 平11東複第208号）。
9. 本書の作成にあたり、下記の方々および機関から多大なるご教示を得た。

進藤秋輝（宮城県教育庁文化財保護課）
古川雅清（創宇舎）
高橋 哲（青年海外協力隊候補生）
10. 本書は、V-5を武田健市、その他を千葉孝弥が執筆し、編集は千葉が行った。資料整理および図版作成に際し、臨時職員柏倉霏代、黒田啓子（平成9年3月退職）、熊谷純子、陶山喜美栄（平成10年3月退職）、浦風志恵子、高橋千賀子、伊藤美恵子、村上和恵、中村千恵子、鹿野智子、小野寺雪子、渡邊奈緒、坂本英美の協力を得た。
11. 調査に関する諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目 次

序 文

例 言

目 次

図版目次

写真図版目次

調査要項

I	遺跡の位置と地理的・歴史的環境	1
	1. 遺跡の位置と地理的環境	1
	2. 歴史的環境	1
II	調査に至る経緯	5
III	調査方法と経過	9
IV	小沢原遺跡	16
	1. 調査区の地形	16
	2. 層序	16
	3. 発見した遺構と遺物	16
	4. 遺構の年代と性格	41
	5. まとめ	42
V	高崎遺跡	43
	1. 調査区の地形	43
	2. 層序	43
	3. 発見した遺構と遺物1—平成5年度確認調査	43
	4. 発見した遺構と遺物2—第12次調査	49
	5. 発見した遺構と遺物3—第21次調査	90
	6. 遺構の年代と性格	100
	7. まとめ	105

図 版 目 次

第1図 多賀城市の位置	1
第2図 遺跡分布図	2
第3図 史跡連絡線の位置	6
第4図 調査区全体図	7・8
第5図 小沢原遺跡・高崎遺跡調査区位置図	12
第6図 小沢原遺跡・高崎遺跡航空写真	15
—小沢原遺跡—	
第7図 調査区配置図	17
第8図 第Ⅰ・Ⅱ調査区層序、調査区エレベーション	18
第9図 遺構全体図	19・20
第10図 SB01模式図	21
第11図 SB01柱穴平面図・断面図(1)	22
第12図 SB01平面図・断面図	23・24
第13図 SB01柱穴平面図・断面図(2)	25
第14図 SB02平面図・断面図	26
第15図 SB03平面図・断面図	27
第16図 SB04平面図	28
第17図 SB21平面図	29
第18図 SB20平面図・断面図	30
第19図 SA13、SD33平面図	31
第20図 SA32、SX15、SD16平面図	32
第21図 SA32断面図	33
第22図 SI05平面図・断面図	33
第23図 SI05出土遺物	34
第24図 SI11平面図・断面図	35
第25図 SI12平面図・断面図	36
第26図 SK06、S07平面図・断面図	38
第27図 SK06出土遺物	39
第28図 遺構外出土遺物	40
—高崎遺跡—	
第29図 調査区配置図	44
第30図 北地区遺構全体図	45
第31図 南地区北半部遺構全体図	46
第32図 南地区南半部遺構全体図	47・48

第33図	S B1110出土遺物	49
第34図	S B1119出土遺物	50
第35図	S B1108・1119模式図	50
第36図	S B1110平面図・断面図	51・52
第37図	S B1109・1121・1122・1124・1125模式図	53
第38図	S B1112・1117・1118模式図	54
第39図	S B1108・1109・1119・1121平面図	55・56
第40図	S B1122・1124・1125平面図	57
第41図	S B1116、S D1133平面図	58
第42図	S B1111・1126・1127模式図	59
第43図	S I1113A・B平面図	60
第44図	S I1113C平面図	61
第45図	S I1113D ₁ 平面図	62
第46図	S I1113 ₂ 平面図	63
第47図	S I1113断面図	64
第48図	S I1113出土遺物(1)	65
第49図	S I1113出土遺物(2)	66
第50図	S I1113出土遺物(3)	67
第51図	S I1113出土遺物(4)	68
第52図	S I1113出土遺物(5)	69
第53図	S I1113出土遺物(6)	53
第54図	S I1113出土遺物(7)	71
第55図	S I1123断面図	73
第56図	S I1114出土遺物(1)	74
第57図	S I1114平面図・断面図	75・76
第58図	S I1114出土遺物(2)	77
第59図	S I1114出土遺物(3)	78
第60図	S I1114出土遺物(4)	79
第61図	S I1114出土遺物(5)	80
第62図	S I1135断面図	80
第63図	S E1115平面図・断面図	81
第64図	S E1115遺物出土状況	81
第65図	S E1115出土遺物	82
第66図	S D1130平面図・エレベーション	83
第67図	S D1130断面図	84
第68図	S D1130出土遺物	85
第69図	S D1146出土遺物	87

第70図	S ■1149出土遺物	87
第71図	S X1140平面図・断面図	88
第72図	S X1140出土遺物	89
第73図	その他の出土遺物	89
第74図	第21次調査区北半部遺構全体図	90
第75図	S I1365A平面図・断面図	91
第76図	S I1365A出土遺物	92
第77図	S I1365B平面図・断面図	93
第78図	S I1365B出土遺物(1)	94
第79図	S I1365B出土遺物(2)	95
第80図	S I1365B出土遺物(3)	96
第81図	S I1366・1368平面図・断面図	97
第82図	S I1368出土遺物	98
第83図	S K1373出土遺物	99
第84図	掘立柱建物跡の重複関係	100
第85図	竪穴住居跡の重複関係	102

写真図版目次

図版 1	小沢原 遺跡	上：調査前の状況、中：第1次調査区全景、下：同上	107
図版 2	同上	上：S B01（西より）、下：S D07・08（西より）	108
図版 3	同上	左上：S B01西側柱列北より4間目柱穴、右上：同左 B期底面 左中：S B01西側柱列北より3間目柱穴、右中：同左 B期底面 左下：S B01西側柱列北より2間目柱穴、右下：S B01北西隅柱穴	109
図版 4	同上	上：S I12（西より）、中：同 検出状況、下：同 カマド、右下：同 カマド 側壁細部	110
図版 5	同上	上：S I11（北より）中：S I05（西より）中：同 カマド 下：S K06（東より）	111
図版 6	同上	上：第III調査区（北より）、中左：第IV調査区No2・3トレンチ（北より）、中 右：第IV調査区No4・5トレンチ（西より）、下左：第IV調査区No3トレンチ （東より）、下右：第IV調査区No4トレンチ（東より）	112
図版 7	高崎 遺跡	左上：北地区・南地区北半部の調査前の状況（南より）、上右：S D1142（北よ り）、中：南地区北半部全景（南より）、下左：S X1141、下右：同左	113
図版 8	同上	左上：北地区全景（南より）、上右：S D1138・1139（南東より）、中左：S X1137、 中右：北地区No1トレンチ（南東より）、下：同左 No1トレンチ（西より）	114
図版 9	同上	上：第12次調査区全景（南より）、中：同左 近景（南より）下：S B1119柱穴 遺物出土状況	115
図版10	同上	上：S B1110（南より）、中：同左 南東隅柱穴礎盤検出状況、下：S D1150遺 物出土状況、左：S D1130（北より）	116
図版11	同上	S I1114（南より）中：同左 カマド（西より）、下左：同左（南より）、下右 ：同左 細部	117
図版12	同上	上：S I1113D（南より）中左：同左 暗渠（西より）、中右：同左 蓋除去後 の状況（西より）、下左：同左 暗渠蓋細部、下右：同左	118
図版13	同上	上：S I1113C（南より）中：同左（西より）、下：S I1135（北より）	119
図版14	同上	上：S I1365B（南より）、中：S X1140、中：S E1115（南より） 下左：同左 カブ出土状況、下右：同左	120
図版15	同上	出土遺物 1	121
図版16	同上	出土遺物 2	122

調査要項

1. 小沢原遺跡（宮城県遺跡登録番号 18043）

所在地 多賀城市浮島二丁目
調査面積 1,210㎡（対象面積4,520㎡）
調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井茂男

【第1次調査】

調査期間 平成5年6月1日～7月16日
調査面積 460㎡
調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 斎藤一司（～7月）、杉田裕孝（7月～）
調査員 千葉孝弥

【第2次調査】

調査期間 平成6年8月17日～10月28日
調査面積 470㎡
調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 鳥山文夫
調査員 千葉孝弥 武田健市

【第4次調査】

調査期間 平成9年11月18日～11月25日
調査面積 280㎡
調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 木村忠雄
調査員 千葉孝弥

2. 高崎遺跡（宮城県遺跡登録番号 18018）

所在地 多賀城市高崎
調査面積 1,630㎡（対象面積10,300㎡）
調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井茂男

【確認調査】

調査期間 平成5年7月19日～8月6日
調査面積 770㎡
調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 斎藤一司（～7月）、杉田裕孝（7月～）
調査員 千葉孝弥

【第12次調査】

調査期間 平成6年6月13日～10月14日
調査面積 990㎡
調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 鳥山文夫
調査員 千葉孝弥 菊池 豊

【第21次調査】

調査期間 平成8年12月10日～18日、平成9年1月16日～31日

調査面積 110㎡

調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 木村忠雄

調査員 (前半) 千葉孝弥 菊池 豊、(後半) 滝口 卓 石本 敬 武田健市 山川純一

調査参加者 (平成5年～9年)

阿部トシ子 赤井ひろ子 浅沼 良 伊藤正直 内海義雄 太田恂一郎 奥田陸男

小野玉乃 小野寺恵子 菅野文夫 加藤昭一 加藤正士 鎌田 傳 後藤しのぶ

小松まり 小松吉男 木村定巳 今野和子 今野孝男 齋藤ゆき子 塩 幸子

佐々木欣也 鈴木太仲 鈴木寿二 田中裕子 手嶋興美 南城美枝子 星 光治

星 忠次郎 星 秀雄 松本喜一 橋本 務 水越朝治 宮川ハルミ 宮野幸子

渡辺正一 渡辺ゆき子

I 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

多賀城市は、宮城県ほぼ中央部に位置する仙台市の市街地から北東約10kmの地点に位置しており、西部で仙台市、北西部で利府町、北東部で塩竈市、南東部で七ヶ浜町とそれぞれ接している。

利府町の丘陵地帯に源を発する砂押川は、多賀城市を北西から南東にかけて貫流し、同市の地形を大きく二分している。北部は台地状の緩やかな丘陵であり、南部は広大な沖積平野である。北部の丘陵は、地理学的には松島丘陵と呼ばれるものであり、塩釜方面から本市北部に至り、沖積地に向かって枝状に発達している。それらによって大小の谷が形成され、緩やかながら起伏に富んだ地形となっている。小沢原遺跡および高崎遺跡はそのような丘陵上に立地しており、その周辺には数多くの遺跡が隣接している。両遺跡は、東北本線の北側と南側とに分かれているが、地形的には連続するものであり、同様な地理的環境にあるといえよう。

2. 歴史的環境

小沢原遺跡および高崎遺跡の周辺では旧石器時代から江戸時代に至る各時代の遺跡が確認されている。以下、年代順に概要を述べる。

旧石器時代：高崎遺跡の南側に志引遺跡があり、1万年から10万年前の石器が層位的に出土している。また、特別史跡多賀城跡の政庁地区や市川橋遺跡大臣宮地区からも石器が出土している。これらは、いずれも古代の遺跡の調査中に発見されたものであるが、後者は沖積地の中の小丘陵であり、周辺の低湿地の調査で下層からその時代の遺構が発見される可能性がある。

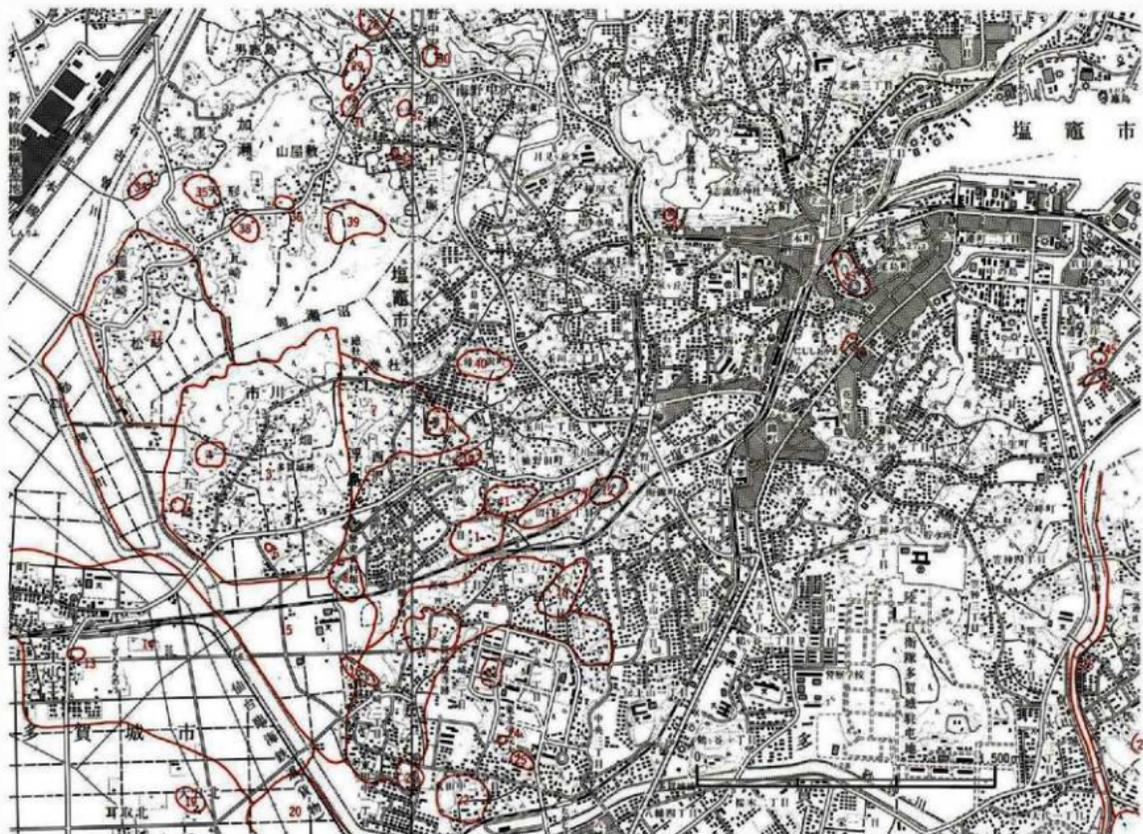
縄文時代：多賀城跡の中に金堀貝塚がある。前期の小規模な貝塚であるが、当時、西側の低湿地にまで海水が入り込んでいたことを示すものであり、地理学的にも貴重である。同貝塚のある多賀城跡金堀地区では中期の土器・石器も出土しており、同じく多賀城跡の中にある五万崎遺跡でも前期初頭および中期の土器・石器が発見されている。

弥生時代：五万崎遺跡からこの時代に特有な石包丁が2点出土している。本遺跡西側の自然堤防上に広がる山王遺跡では現地表下約3m（海拔約0.5m）の深さから中期の包含層が発見されており、それより古い水田も発見されている。

古墳時代：五万崎遺跡から前期の方形周溝墓、多賀城廃寺から竪穴住居跡が発見されている。古墳は、高崎古墳群が未調査ながら中期のものと考えられている。稲荷殿古墳は竪穴式石室をもつ小



第1図 多賀城市の位置



第2図 遺跡分布図

表1 遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	立地	番号	遺跡名	時代	立地
多賀城市				25	板井館跡	中世	丘陵
1	小沢原遺跡		丘陵	26	貞山堀	近世	
2	高崎遺跡	奈良・平安・中世	丘陵	27	柏木遺跡	旧石器・古代	丘陵斜面
3	特別史跡多賀城跡	奈良・平安	丘陵・沖積平野	利府町			
4	金堀貝塚	縄文(前～後)	丘陵斜面	28	舞楽遺跡	縄文～中世	丘陵
5	五万崎遺跡	縄文～古墳(前)	丘陵	29	天神台遺跡	平安	丘陵
6	田屋場横穴古墳群	古墳(後)	丘陵斜面	30	後栗B遺跡	旧石器	丘陵
7	西沢遺跡	古代・中世	丘陵	31	洞女哥遺跡	縄文(中・後)	丘陵中腹
8	館前遺跡	古代・中世	分離丘陵	32	十三塚遺跡	古代	丘陵中腹
9	法性院遺跡	古代	丘陵中腹	33	十三本塚遺跡		丘陵
10	高原遺跡	古代・中世	丘陵	34	北窪遺跡	古代	丘陵崖
11	野田遺跡	古代・中世	丘陵中腹	35	天形遺跡	古代	丘陵
12	矢作ヶ館跡	古代・中世	丘陵	36	山屋敷遺跡	旧石器	丘陵頂部
13	山王山地田館跡	古代・中世	沖積平野	37	加瀬遺跡群	縄文・古代	丘陵・自然堤防
14	山王遺跡	古墳・奈良・平安	自然堤防	38	窪遺跡	古代	丘陵中腹
15	市川堀遺跡	旧石器～平安	沖積平野	39	加瀬貝塚	縄文(中)・古代	丘陵斜面
16	高崎古墳群	古墳(中・後)	丘陵端	塩電市			
17	多賀城廃寺	奈良・平安	丘陵	40	母子沢遺跡	平安	丘陵
18	留ヶ谷遺跡	古代・中世	丘陵	41	袖野田遺跡	奈良・平安	丘陵斜面
19	大日北遺跡	古代	自然堤防	42	塩電神社境内遺跡	縄文(晩)	丘陵斜面
20	六貫田遺跡	古代	自然堤防	43	塩電古館跡	中世	分離丘陵
21	東田中窪前遺跡	古代・中世	丘陵崖	44	旭町横穴古墳群	奈良?	丘陵斜面
22	志引遺跡	旧石器・古代・中世	丘陵	45	一本松貝塚	縄文(晩)・平安	海岸
23	御屋敷館跡	中世	丘陵	46	一本松横穴古墳群		丘陵斜面
24	稲荷殿古墳	古墳(後)	丘陵				

型の円墳である。調査が行われ、年代は7世紀とされている。田屋場横穴古墳群は多賀城南門に近い築地の下から発見されたもので、7世紀後葉から8世紀前葉の年代が与えられている。

奈良・平安時代：特別史跡多賀城跡・鹿寺を中心として多数分布している。多賀城跡は奈良・平安時代を通して陸奥国府が置かれた所で、奈良時代には鎮守府も併せ置かれるなど陸奥国の中心地であり、多賀城鹿寺はそれと同時期に創建された付属寺院である。多賀城跡の東側にある西沢遺跡では竪穴住居跡や鍛冶炉が多数発見されている。竪穴住居跡の中には、工房と見られるものや、馬具が出土したものもあるなど、一般庶民の住居とは考え難いものがある。その東側にある法性院遺跡や高原遺跡については、詳細が不明であるが、古代の土器の散布地として知られている。

鎌倉・室町時代：この時代の遺構としては館跡が多く、野田館跡、矢作ヶ館跡、留ヶ谷遺跡などがある。野田館跡では櫓列、留ヶ谷遺跡では土壘・空堀などが発見されている。高崎遺跡の中でも留ヶ谷遺跡に近い地区からは中世の掘立柱建物跡がしばしば発見され、丘陵斜面を造成した平場も確認されている。遺物も、確実に12世紀から16世紀に至る各時代の陶磁器が出土している。なお、これらの遺跡では古代の遺物も散布しており、長期間にわたる遺跡であることを示している。また、小沢原遺跡では、今回の調査区から約250m南西の地点において古銭が多数採集されている。詳細は不明であるが中世における備蓄銭の可能性などが考えられている。

江戸時代：留ヶ谷遺跡で中世の館跡を改修した屋敷跡が発見されており、17世紀から現代へと連続と続いた屋敷の一端が明らかにされている。高崎遺跡弥勒地区でも屋敷跡が調査されており、多数の掘立柱建物跡と地鎮遺構が発見されている。

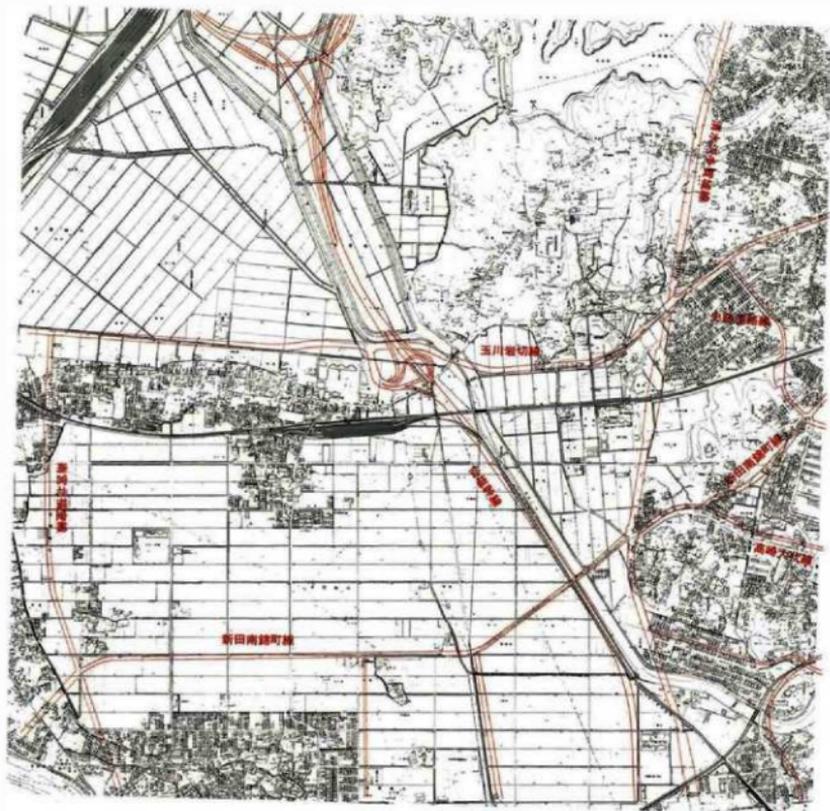
明治・大正・昭和時代：高崎遺跡では昭和時代の巨大な井戸が発見されている。太平洋戦争時、高崎周辺には軍需工場が置かれており、それに関連する遺構の可能性がある。戦時下における貴重な調査例といえよう。

II 調査に至る経緯

仙塩広域都市計画区域における道路網の骨格をなす仙塩道路から本市へのアクセス道路として岩切玉川線が現在建設中である(第3図)。都市計画道路史跡連絡線はその岩切玉川線と本市中心部を縦に結ぶ路線として計画されたものである。JR東北本線によって分断されている本市中心部と近年人口が増加している北部住宅地を結び、沿線地域の交通混雑を緩和するとともに交通安全の確保及び居住環境の向上を図ることを目的としている。なお、史跡連絡線なる名称は、文字通り東北本線を越えて特別史跡多賀城跡内寺跡の城跡と寺跡を結ぶ道路であることに因んだものである。本道路は、昭和62年4月28日付け多賀城市告示第21号で都市計画決定され、同年9月22日付け宮城県告示第1,220号により都市計画法第59条第1項の規定により事業認可を受けている。

平成4年、道路建設と埋蔵文化財との係わりについて都市計画課と文化財課とで協議が行われた。その中で、浮島地区については、埋蔵文化財包蔵地の範囲外であるが、小沢原遺跡の約150m西側に近接するという理由で試掘調査を実施し、まず遺構の有無を確認することが必要とされた。高崎地区については、大部分が埋蔵文化財包蔵地(高崎遺跡)であることから当然事前調査の対象となるが、東北本線に近い地点は急勾配の地形であり、遺構の存在する可能性が低いことが予想された。調査は用地買収との兼ね合いから平成7年まで3年間で実施するという計画であることから、初年度は浮島地区の試掘調査と高崎地区の確認調査を実施し、対象地区全体の遺構の分布状況を把握する調査を実施することとした。

平成5年5月19日付けで教育委員会管理課長より埋蔵文化財調査センター所長に発掘調査の依頼があり、5月26日付けで同所長より管理課長に発掘調査の期日、予算等について回答した。その後、調査区の境界確認や調査の具体的な進め方について都市計画課と現地にて協議を行い、6月1日、小沢原遺跡西方地区の試掘調査に着手した。



第3図 史跡運輸線の位置





第4回 調査区全体図

III 調査方法と経過

1. 調査方法

平面図作成における基準点線の設定にあたっては、小沢原遺跡・高崎遺跡ともに国土座標「平面直角座標系X」を使用して原点を設定し、原点を通る南北方向の直線を南北基準線、それと直交する東西方向の直線を東西基準線とした。この原点を0として、南北方向は北をN、南をSとし、原点から1mごとにN1、N2、N3……、S1、S2、S3……、と表した。東西方向は西をW、東をEとし、同様に表した。両遺跡の原点の国土座標は次の通りである。

小沢原遺跡 X = -188,610.000 Y = 14,790.000

高崎遺跡 X = -189,000.000 Y = 14,890.000

2. 調査経過

今回の事業に関する発掘調査は、平成5年度から平成9年度まで断続的に行った。以下、各年度ごとの概要について記す。

初年度である平成5年度には、小沢原地区と高崎遺跡について、対象地区全体における遺構の有無および分布状況を明らかにすることを第一の目的とし、調査を行った。5月30日小沢原地区に器材を搬入し、試掘調査に着手した。厚い盛り土の下には希薄ながら遺構の存在が確認され、6月11日までにおおよその分布状況まで把握されるに至った。6月12日からは遺構の残存状態を把握することと、次年度以降の作業効率を考慮し、事前調査に切り替えた。7月16日までに遺構の実測まですべての作業を終了させた。7月19日小沢原地区から高崎遺跡の調査区にプレハブ・器材を移動し、高崎遺跡の確認調査を開始した。はじめに予定地南側から調査に着手し、住宅地であったため攪乱が著しかったが、竪穴住居跡や溝跡など確実に古代の遺構の存在が確認された（～7月22日）。7月22日北地区の草刈および伐採作業など準備を行い、翌23日から北側の斜面から調査を開始した。斜面部分では予想通り遺構は発見されなかったが、その南側のやや平坦な部分では小規模な谷頭があり、その落ち込みに通じる溝跡などを検出した。北地区における発見遺構は、これらの溝跡以外では壁が焼けている土壌を1基検出したのみであり、8月2日から事前調査に切り替え、



上：調査風景（小沢原遺跡第1次調査）
下：S 001 検出状況(同上)

8月5日までに実測まですべての作業を終了させ、平成5年度の作業を終了させた。

平成6年度は、昨年度の試掘および確認調査により、調査対象範囲がおおよそ限定されたことをうけて、本格的な事前調査を実施した。6月13日、高崎遺跡第12次調査を開始した。調査区中央部には南北方向の宅地内道路があるため、今年度はその部分を対象地区から除外した。また、排土処理の都合上、対象地区北端部はその南側の埋め戻し後に調査することとした。はじめに宅地内道路の西側部分から調査に着手し、住宅地造成に関わる擾乱や、近年まで芹田として利用していたという南北11m、東西10mの方形の落ち込みを除去し、遺構検出作業を進めた。北半部では小規模な柱穴を多数発見し、多くの掘立柱建物跡の存在が予想された。7月28日から宅地内道路の東側部分の表土除去を開始し、同地区の遺構検出作業を開始した。昨年度の確認調査で検出した竪穴住居跡が全容を現した。8月31日、宅地内道路の両側で発見した竪穴住居跡2棟を残し、ほかの遺構はおおよそ調査が終了したため、北端部を埋め戻し、さらにその北側に調査区を拡張した。この拡張区では昨年度の確認調査で発見した東西溝1条あらためて検出し、精査を行った。10月7日、最後に残った竪穴住居跡の平面図を作成し、調査を終了した。10月14日、現場より器材等を一切撤収した。



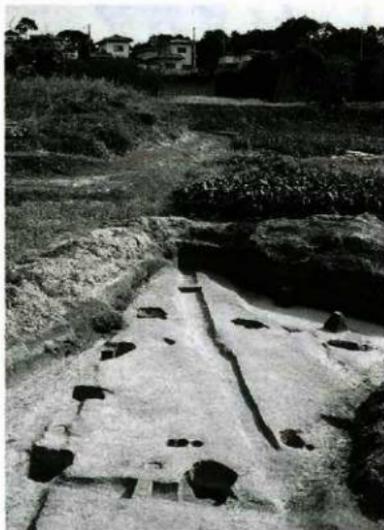
上：芹田の除去（高崎遺跡第12次調査）
中：SE1115調査風景（同上）
下：SB1110調査風景（同上）
左：S1113D噴染（同上）

小沢原遺跡第2次調査は、高崎遺跡第12次調査と一部平行して進めた。実際の調査に先立ち、8月4・5日に周辺の環境整備を含めて準備作業を行った。8月17日、第1次調査の第Ⅰ・Ⅱ調査区の残りの部分に調査区を設定し、重機により表土の除去を開始し、8月22日から遺構検出作業を開始した。10月11日から24日まで、調査員の都合により一時調査を休止し、10月25日から再開した。昨年度の調査においてその一部を発見した掘立柱建物跡は南北5間以上になることが判明し、その建て替え等の検討に多くの時間を要したが、基本的に4時期の変遷と理解し(註)、10月31日調査を終了した。

平成8年度は、高崎遺跡第12次調査の際、調査から除外した生活道路部分を対象として高崎遺跡第21次調査を実施した。対象面積は少ないものの、現住民の便宜上前後2回に分けて調査を行った。前半は、対象地区の南半部について12月10日から18日まで調査を実施した。この地点においては、大型の竪穴住居跡が発見された場所であり、未検出であったその東辺部の発見が予想された。結果的には、現代の様々な埋設管工事による攪乱のため確認できず、住居跡のおおよその規模を推定するにとどまった。後半は、北半部を対象とし、翌年の1月16日より1月31日まで実施した。この地区も攪乱が著しく、遺構の残存状態は不良であったが、竪穴住居跡4軒を発見した。

平成9年度は、道路建設予定地の内、最後まで残っていた小沢原遺跡南端部の雑木林を対象として小沢原遺跡第4次調査を実施した。11月18日に調査区を設定し、重機により表土を除去して遺構確認を開始した。しかし、対象地区内においては遺構が発見されず、11月25日、仮基準点を設定し平面図作成し、11月27日、トラバース測量を行って調査を終了した。

(註) 調査終了後の整理・検討の結果、4時期としたものの内最も古いものは、創建時における施工誤差のため、掘削後直ちに埋め戻した掘方であり、2番目に新しいと見たものは古い柱穴の埋土の違いと理解できたことから、全体で2時期の変遷という結論に落ち着いた。



上：S B01 (小沢原遺跡第2次調査)
 中：竪穴住居跡検出状況 (高崎遺跡第21次調査)
 下：作業風景 (小沢原遺跡第4次調査)

第5図 小沢原遺跡・高崎遺跡調査区位置図

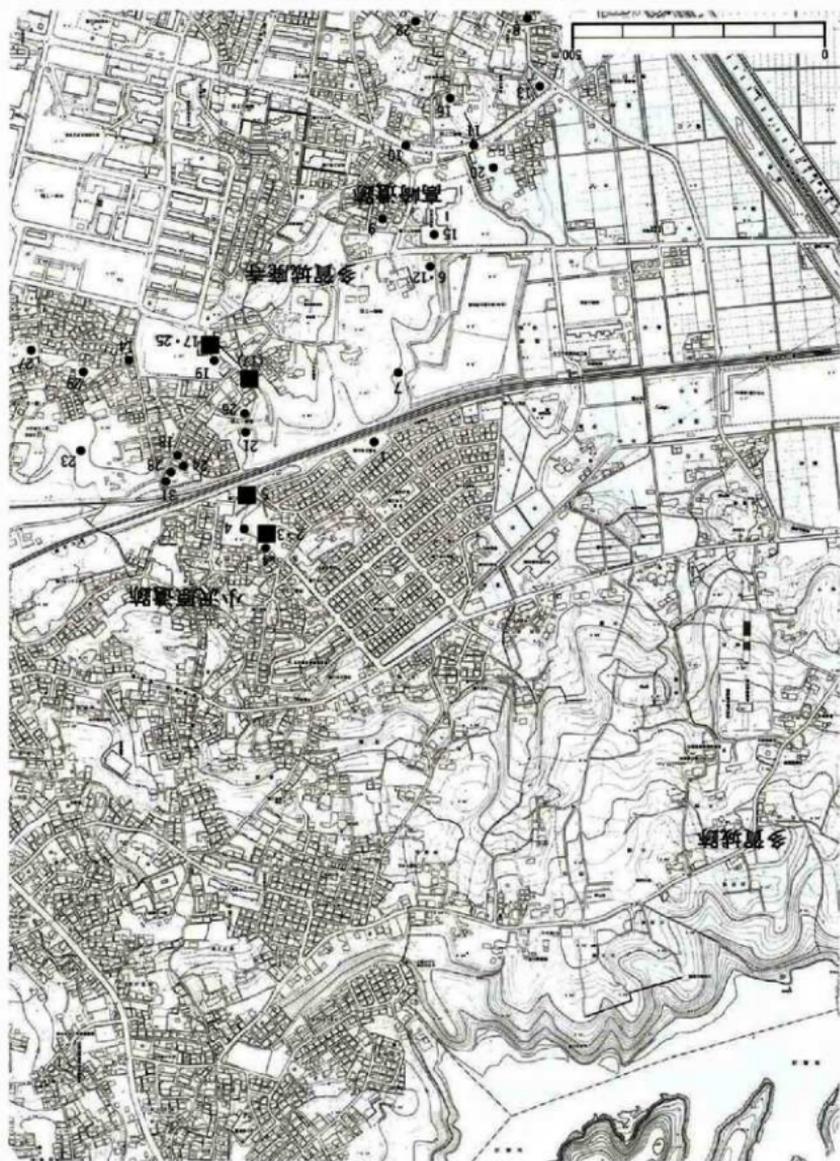
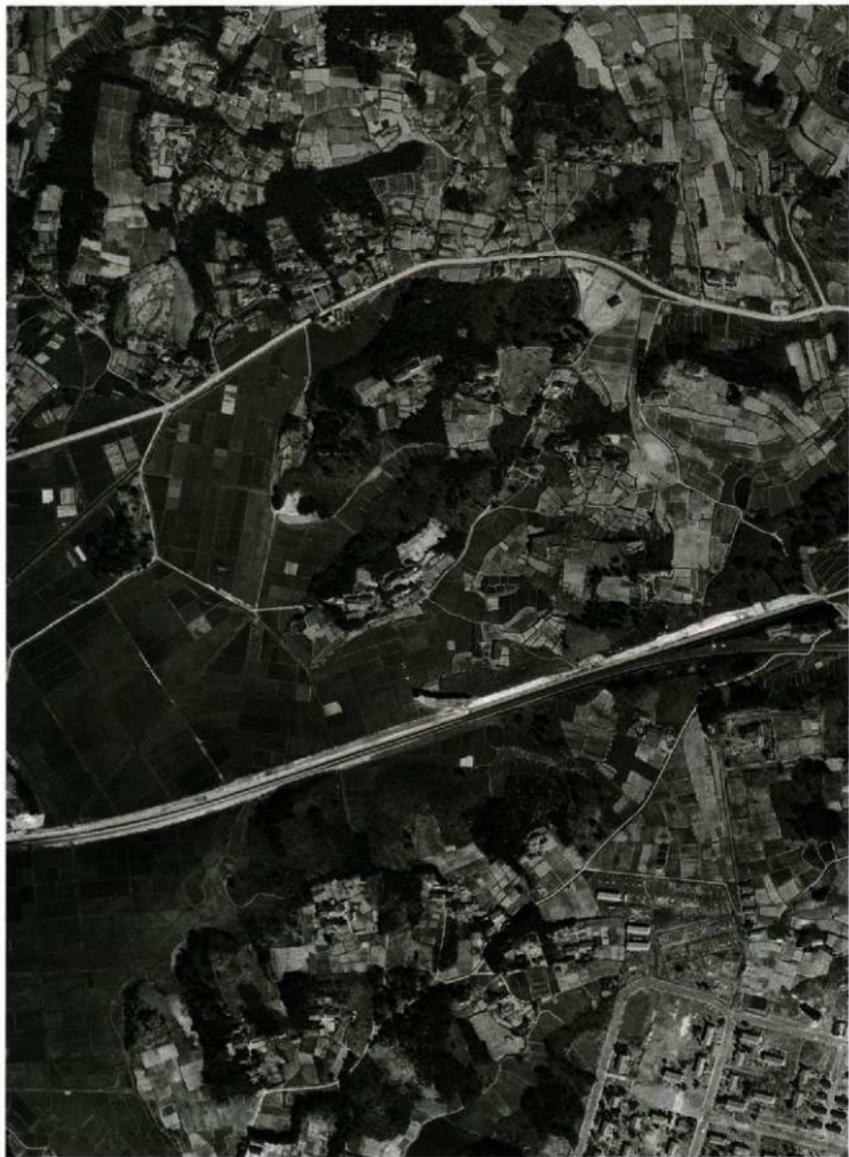


表2 小沢原遺跡・高崎遺跡調査概要一覧

番号	調査回数	主な発見遺構	主な出土遺物
小沢原遺跡			
1	耕作中に発見(昭和27年)	中世：鬘蓄銭か？	多量の古銭
2	第1次(平成5年度)	古代：堀立柱建物、竪穴住居	
3	第2次(平成6年度)	古代：堀立柱建物、竪穴住居	
4	第3次(平成8年度)	古代：堀立柱建物跡	柱列、井戸
5	第4次(平成9年度)	なし	
高崎遺跡			
6	第1次(昭和55年度)	古代：合口壘構	
7	第2次(昭和56年度)	なし	
8	第3次(昭和57年度)	古代：埋壘	
9	第4次(昭和60年度)	古代：柱列	黒字硯
10	第5次(昭和60年度)	古代：堀立柱建物、竪穴住居	灰釉陶器碗、円面硯
		中世：土壇	無釉陶器播鉢
11	第6次(昭和61年度)	古代：堀立柱建物、竪穴住居、柱列、井戸、合口壘構	墨書土器
		中世：溝	青磁碗
12	第7次(昭和63年度)	古代：堀立柱建物	
		近世：屋敷、地鍋遺構	輪宝墨書土器、古銭
13	第8次(平成3年度)	古代：堀立柱建物、井戸、道路	墨書土器
		中世：堀立柱建物跡	
		近世：道路	
14	第9次(平成3年度)	古代：竪穴住居	
15	第10次(平成5年度)	古代：竪穴住居、堀立柱建物、工房	灰釉陶器蓋、鉄製匙、漆紙文書、羽口、送風管、鍛造銅片
16	第11次(平成6年度)	古代：竪穴住居、石組暗渠、埴明皿捨て場	埴明皿・青磁碗
		中世：大溝	瓦質土器播鉢
17	第12次(平成6年度)		
18	第13次(平成6年度)		

番号	調査回数	主な発見遺構	主な出土遺物
19	第14次(平成6年度)	古代：溝	
20	第15次(平成6年度)	古代：竪穴住居	
21	第16次(平成7年度)	古代：竪立柱建物、竪穴住居	円面碓、燈明皿
		近代：大井戸	
22	第17次(平成7年度)	古墳：竪穴住居	石製模造品
		古代：竪穴住居	漆紙
		中世：竪立柱建物	青磁、施釉陶器花瓶
23	第18次(平成7年度) 第19次(平成8年度)	縄文：包含層	石鏃
		古代：竪立柱建物、竪穴住居	
		中世：竪立柱建物	白磁、青磁
24	第20次(平成8年度)	古代：竪立柱建物	
25	第21次(平成8年度)	古代：竪穴住居	
26	第22次(平成9年度)	古代：竪穴住居	赤焼き土器
27	第23次(平成9年度)	中世：平場、柱穴	施釉陶器花盆・水筒
28	第24次(平成9年度)	土壘	
29	第25次(平成9年度) 第26次(平成10年度)	古代：竪立柱建物、竪穴住居	須恵器鐮鉢
		近世：墓	漆器椀、施釉陶器碗
30	第27次(平成10年度)	古代：柱穴	
31	第28次(平成10年度)	柱列・溝	



第6図 小沢原遺跡・高崎遺跡航空写真(昭和36年撮影)



第6図 小沢原遺跡・高崎遺跡航空写真(昭和36年撮影)

IV 小沢原遺跡

1. 調査区の地形

調査区の現況は、東北本線に面した部分に雑木林があり、標高約16mと最も高い。この雑木林に接する部分では南段かの平坦面があるが、それ以外はおおよそ平坦な地形となっている。これは昭和40年代から行われた大規模な宅地造成によるもので、それ以前の旧地形はその下に完全に埋没している。昭和22年撮影の航空写真によると、調査区のほぼ中央には東西方向に大きな埋没谷があり、谷地田として利用されている。また、全体に西側に傾斜した地形であったことが窺われる。これらのことは試掘調査において確認することができた。

なお、以下の記述にあたり、埋没谷の北側で遺構が発見された調査区を第Ⅰ調査区、その南側を第Ⅱ調査区、埋没谷を含むその南側の調査区を第Ⅲ調査区、南端部の雑木林部分を第Ⅳ調査区とする。

2. 層序

第Ⅰ調査区の南半部から第Ⅲ調査区にかけて、すなわち埋没している谷と重複する部分では、現表土の下に厚い盛り土があり、それらによって調査区の大部分が覆われている。この盛り土は昭和40年代の宅地造成によるものである。この盛り土と造成以前の表土を除去すると、多くの部分では直ちに地山が現れた。わずかに、第Ⅰ調査区の西半部において堆積層が検出され、第Ⅲ調査区の北斜面部分で旧表土の存在が確認されている。第Ⅳ調査区では、表土を除去するとすべての部分で直ちに地山が現れた。以下、第Ⅰ・Ⅲ調査区の状況について説明する。

(1) 第Ⅰ調査区

西側に向かう斜面において灰黄褐色の堆積層があり、古代の遺構はその上面から掘りこまれたものと、それに覆われるものが見られる。前者はおおよそ9世紀頃の遺構であり、第Ⅱ層はそれ以前の堆積層と見られる。

(2) 第Ⅲ調査区

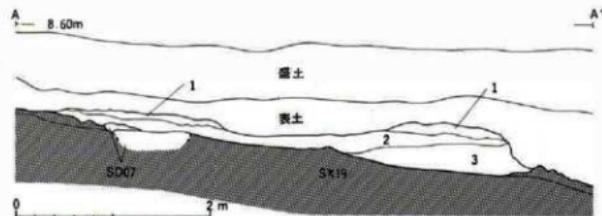
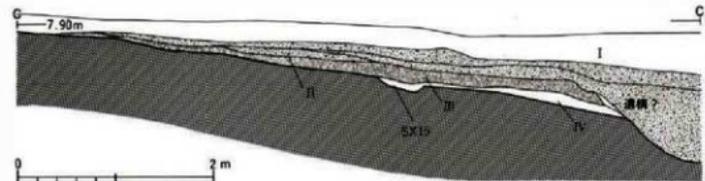
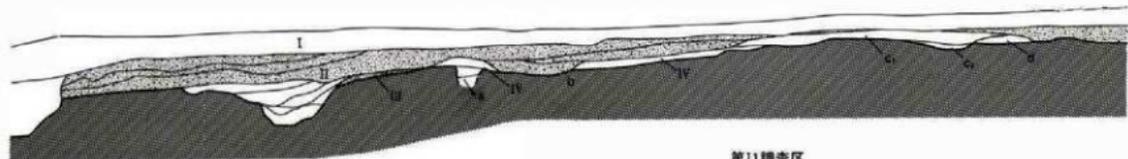
北斜面において堆積層を2層確認した。第Ⅳ層は地山面に直接堆積しており、SX15などを覆っている。その上に第Ⅲ層が堆積しており、近世の溝跡（SD16）はその上面から掘りこまれている。遺物は出土していないが、おおよそ古代以降の堆積層と見られる。

3. 発見した遺構と遺物

第1・2次調査で発見した遺構は掘立柱建物跡5棟、柱列跡2条、竪穴住居跡3軒、溝跡5条、土壇1基のほかいくつもの小柱穴や小溝跡群などを発見した。これらの中には年代不明のものや、明らかに近世以降と見られるものもあるが、ほとんどのものは概ね古代の遺構と考えられる。また、検出面はほとんどのものが地山面であり、第Ⅱ・Ⅲ層との関係が明らかでないものがほとんどである。したがって、以下の遺構の記載にあたっては便宜的に遺構の種類ごとに行うこととする。



第7図 小沢原遺跡調査区配置図

B
I 8.50m

17.00m



第II調査区

第III調査区

第IV調査区



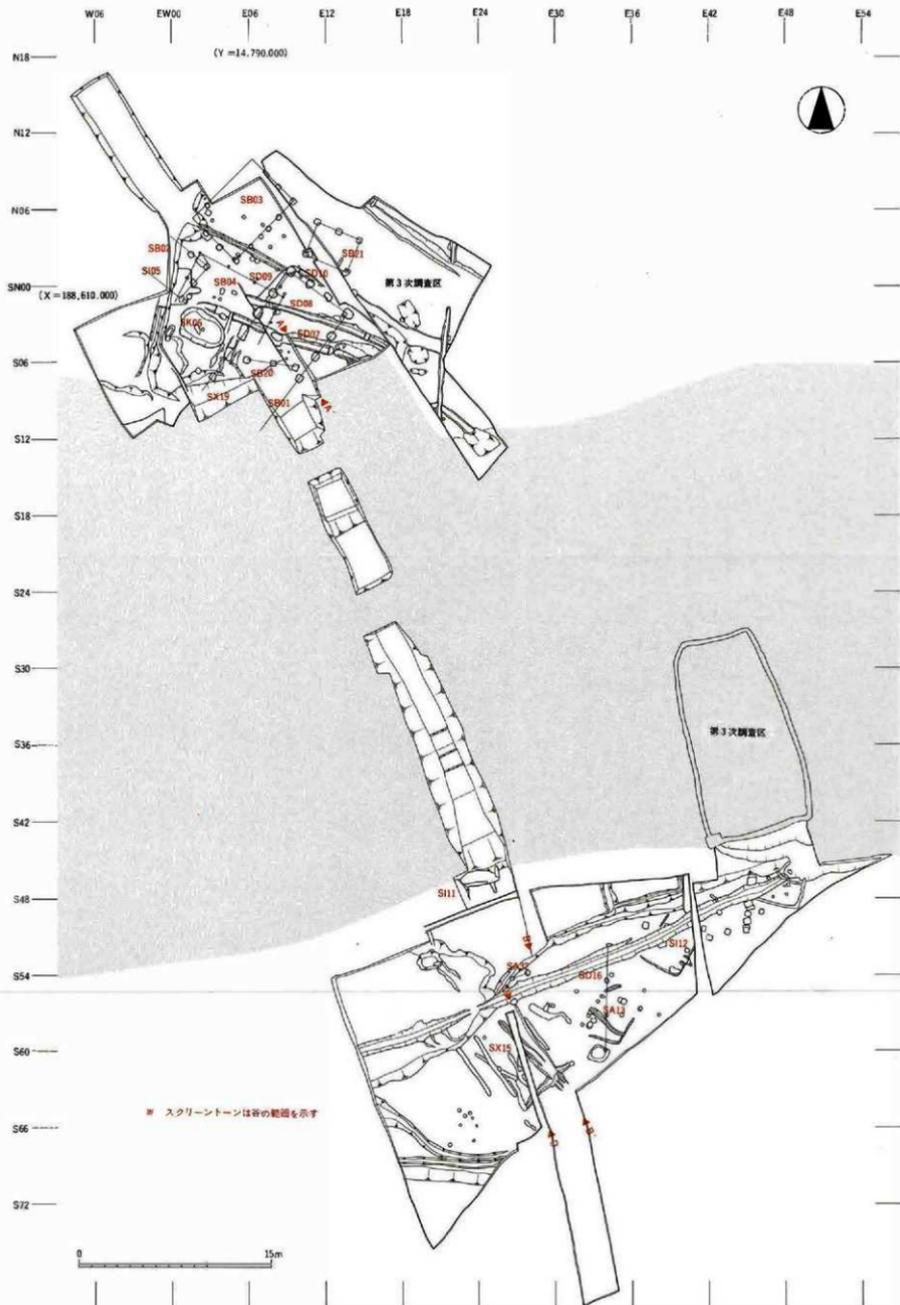
第I調査区

番号	土色・土性など	備考
1	灰黄褐色 (10YR4/2)・砂質土。表土の腐乱層等。	SX19埋積土
2	灰黄褐色 (10YR4/2)・砂質土	同上
3	灰黄褐色 (10YR4/2)・砂質土。マンガン粒多く含む。	同上

第II調査区

番号	土色・土性など	備考
I		戦後の表土
II		昭和40年代の腐土
III	褐色 (10YR3/4)・砂質土	旧表土
IV	褐色 (10YR4/4)・砂質土	古代の地盤型
a	にぶ・黄褐色 (10YR6/4)・砂質土	ピット埋土
b	褐色 (10YR4/4)・砂質土	土壌埋土
c1	褐色 (10YR4/4)・砂質土	落ち込み?
c2	褐色 (10YR4/4)・砂質土	同上
d	にぶ・黄褐色 (10YR5/4)・砂質土。炭化物粒含む。	土壌?

第8図 第I・II調査区層序および調査区エレベーション



第9図 遺構全体図

(1) 掘立柱建物跡

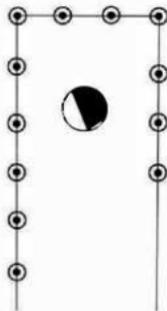
掘立柱建物跡はすべてI区で発見した。検出面はいずれも地山面である。

【S B01】桁行5間以上、梁行3間の南北横掘立柱建物跡である。本建物跡の南東部は東側に向かって落ち込む地形のため、南妻については明確に把握できず、西側柱列については北から5間目の柱穴まで、東側柱列については3間目の柱穴まで検出した。S B04、S D07・08・09・10と重複しており、S D09・10より新しい。また、東側柱列の北から2間目と3間目の柱穴はS X19の堆積土によって完全に覆われている。柱穴はほぼ同位置で基本的に2時期の重複が認められた(A・B期)。A期より古い掘り方が2基の柱穴で発見されているが、建設時の施工誤差によるものと見られる。全体の変遷には含めず、A'期としておく。以下、古い順に説明する。

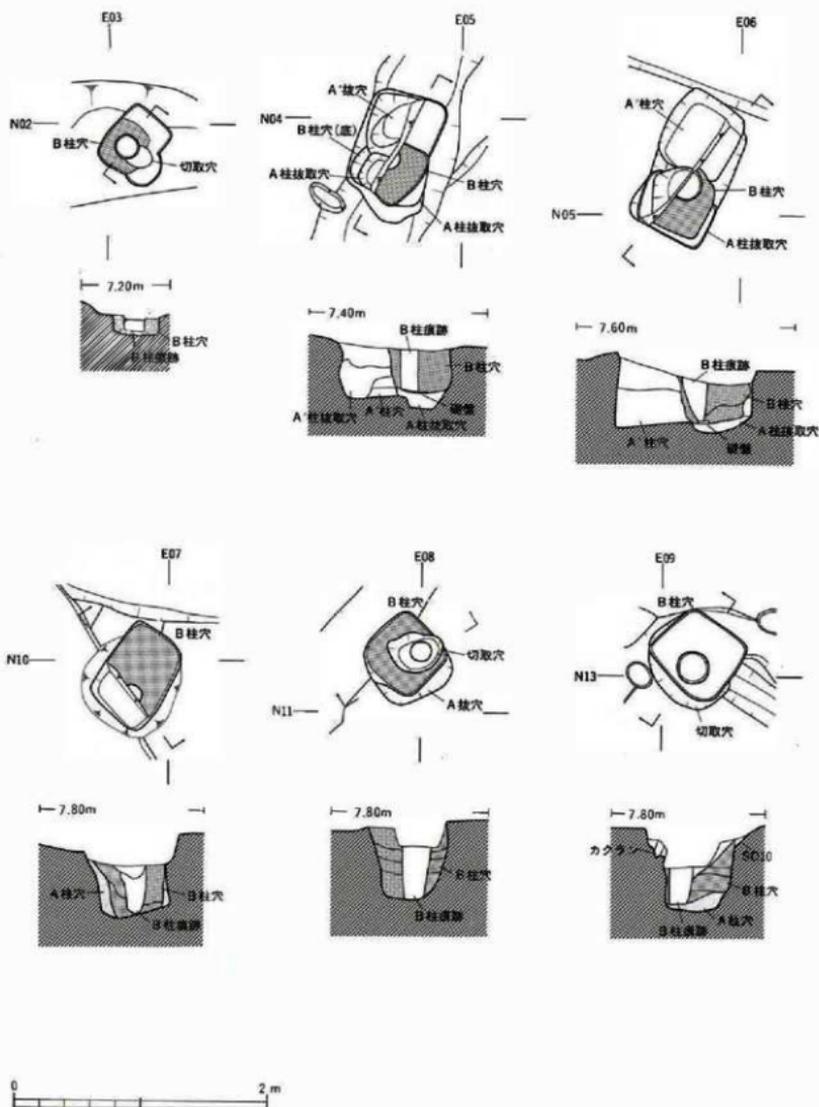
S B01A' 西側柱列において南から1間目と2間目の柱穴で検出した。いずれもA・B期の掘り方より著しく北側にずれている。南から1間目の柱穴では柱抜取穴と見られる掘り込みを確認した。柱間は掘り方の中心で計測すると約2.1mである。柱穴の平面形は長方形で、規模は、長辺65cm、短辺60cmである。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、深さは60cmである。埋土は浅黄色やにぶい黄橙色の砂質土で、混入物は極めて少ないのが特徴である。

S B01A 西側柱列と北妻の大部分および東側柱列の一部で柱穴を検出した。柱位置を掘り方の中心に想定して柱間を推定すると、西側柱列については北より約2.2m、約2.0m、約2.2m、約1.8mであり、東側柱列については北より約2.2m、約2.0mである。北妻は総長約5.7m、柱間は西より約2.0m、約3.8m(2間分)である。方向は、B期のものとほぼ一致している。柱穴の平面形はおおよそ方形であり、規模は、一辺50~60cmである。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、深さは最も深いもので65cmである。埋土は灰黄褐色や浅黄色で混入物は少ない。

S B01B 発見したすべての柱穴で柱痕跡を検出した。西側柱列は総長8.25m以上、柱間は北より2.03m、2.19m、1.85m、1.94m、2.27m、東側柱列は北より2.12m、2.03m、2.00mである。北妻は総長5.65m、柱間は西より1.86m、1.92m、1.87mである。方向は、西側柱列で見ると北で36度34分東に偏しており、北妻で見ると東で37度1分南に偏している。柱穴の平面形は、方形のもの、楕円形のもの、不整形のものなどがある。方形のものについてみると、規模は、大規模なもので75×55cm、小規模なもので50cm四方である。柱痕跡は径14~26cmである。壁はほぼ垂直に掘り込まれているものもあるが、やや斜めに掘り込まれているものもある。

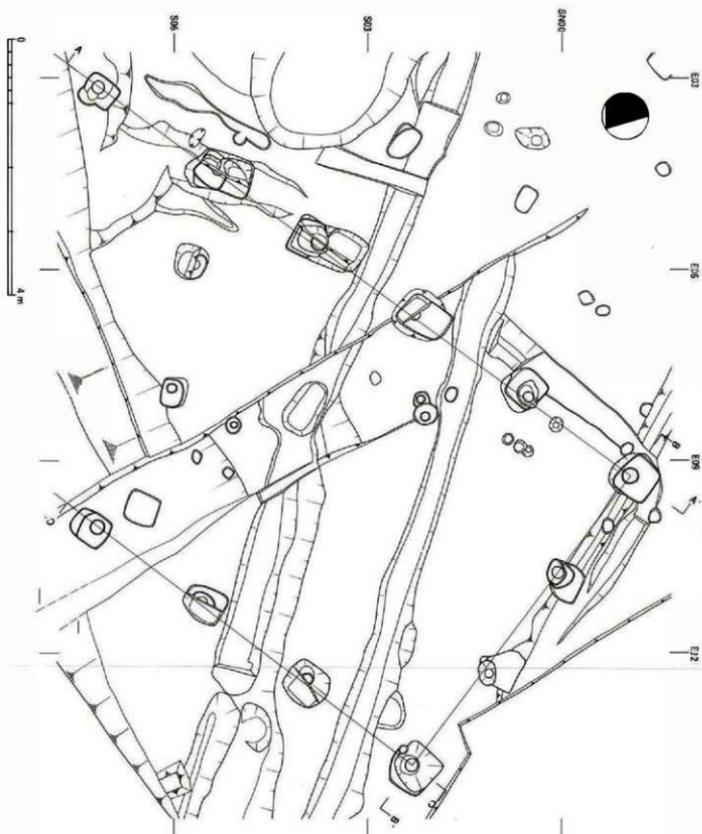


第10図 S B01模式図



第11図 S B01柱穴平面図・断面図(1)

A 8.00m

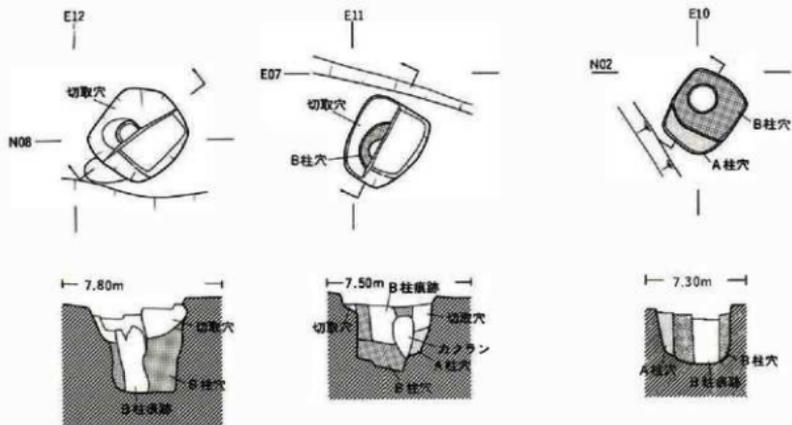
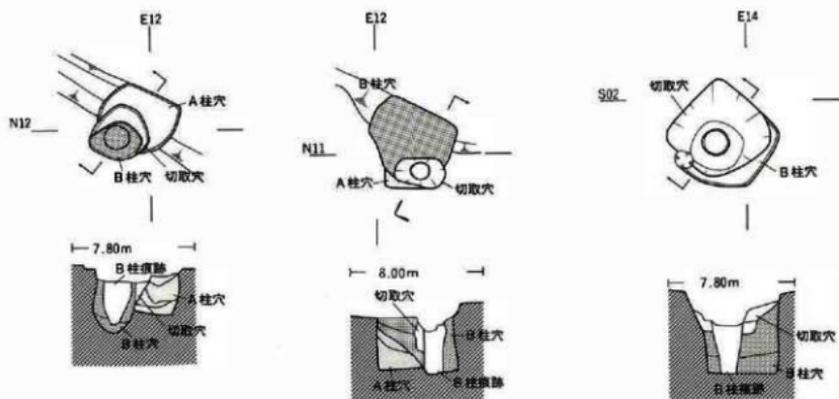


B 8.00m



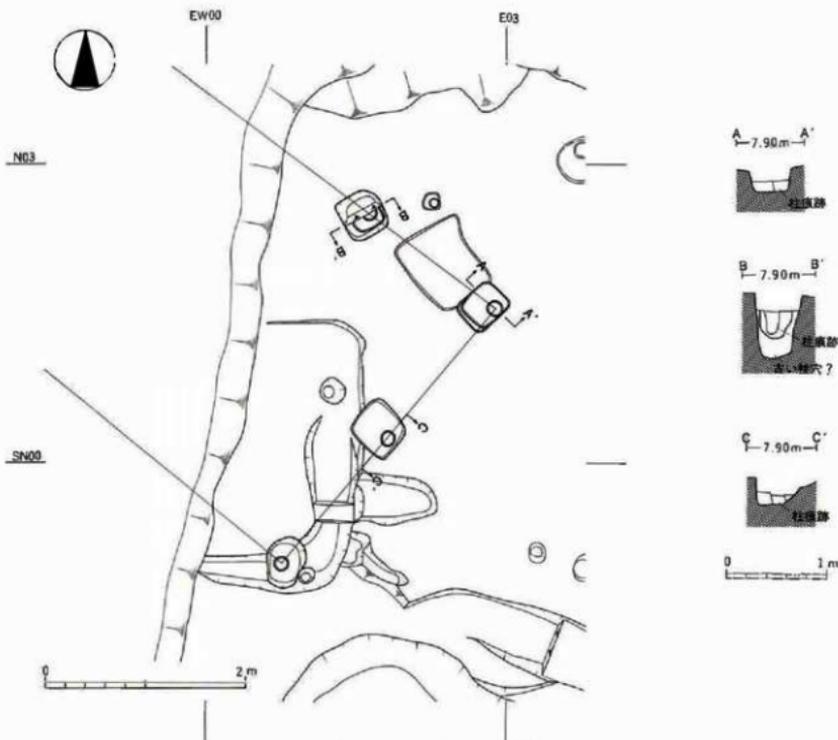
C 8.00m

图120 S 901平面图·新编图



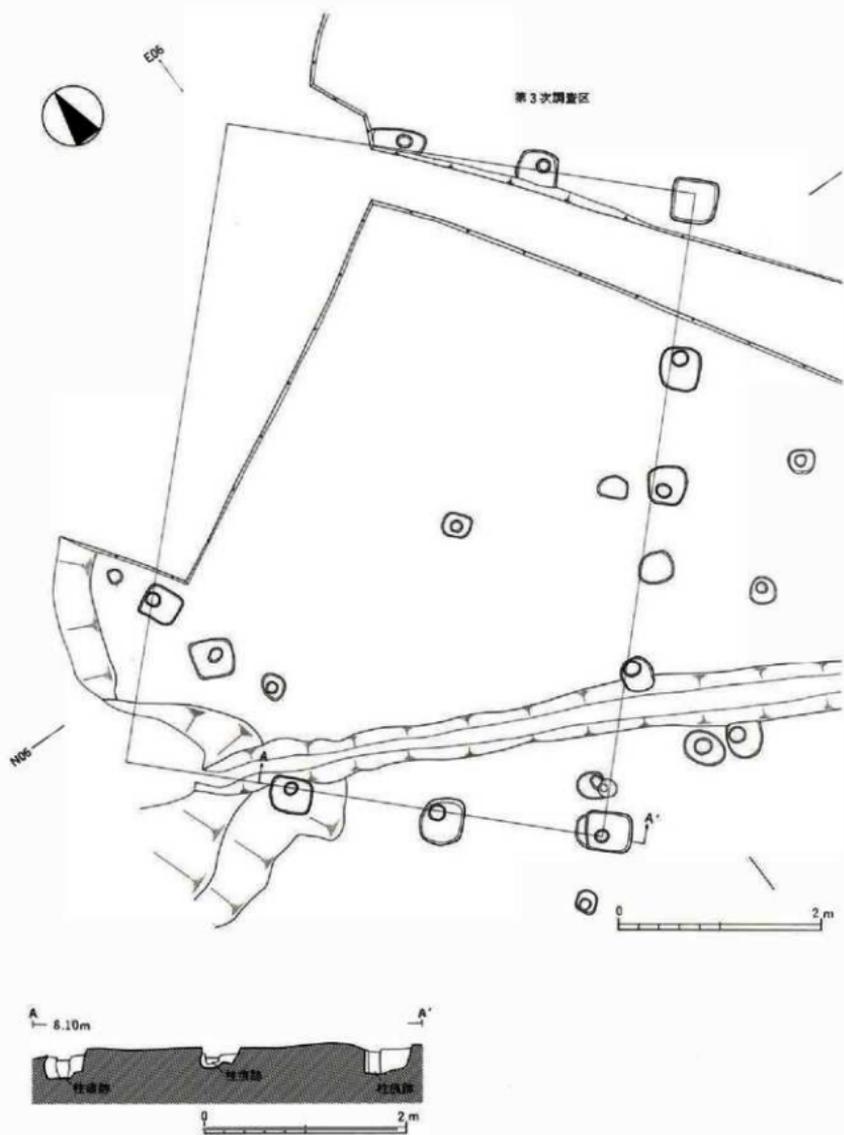
第13図 SB01柱穴平面図・断面図(2)

【S B02】西側に落ち込む斜面の際で発見した掘立柱建物跡である。4つの柱穴を発見したのみであるが南側に展開する可能性の方が少ないと考え、桁行2間以上、梁行2間の東西棟と考えておきたい。S B04、S I05と重複しており、S B04より古いS I05よりもさらに古い。桁行については、北側柱列の東から1間分の柱間が1.59mである。梁行については、東妻が総長3.34mであり、柱間は南より1.63m、1.70mである。方向は、東妻でみると北で39度54分東に偏している。柱穴の平面形は概ね方形であり、規模は一辺40～50cmである。柱痕跡は径14～16cmである。

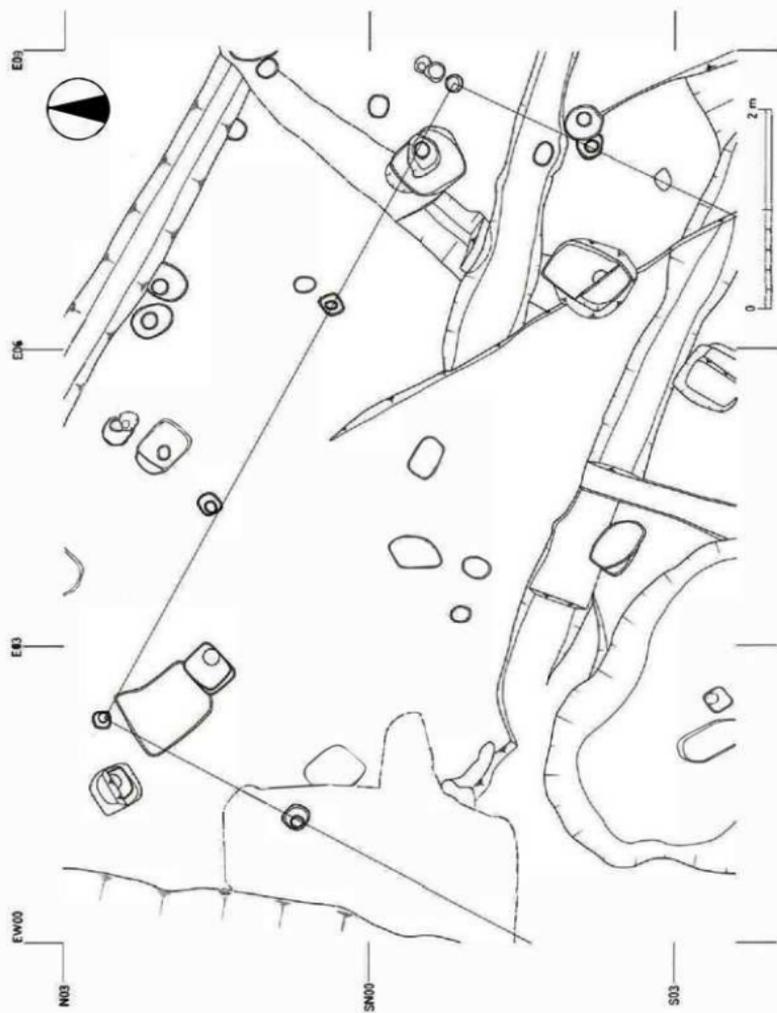


第14図 S B02平面図・断面図

【S B03】桁行4間、梁行3間の南北棟掘立柱建物跡である。第3次調査において北妻を発見しており、おおよそ建物全体の規模を把握することが可能である。桁行については、東側柱列で総長6.51m、柱間は南より1.70m、1.82m、1.33m、1.66mである。梁行については、北西隅および南西隅の柱穴を発見していないため、両側柱列の南から1間目の柱穴によって推定すると総長4.12mである。柱間は、南妻で東から1.63m、1.46m、以下不明である。方向は、東側柱列でみると北で44度38分東に偏している。柱穴の平面形は概ね方形であり、規模は一辺40～50cmである。柱痕跡は径15～17cmである。



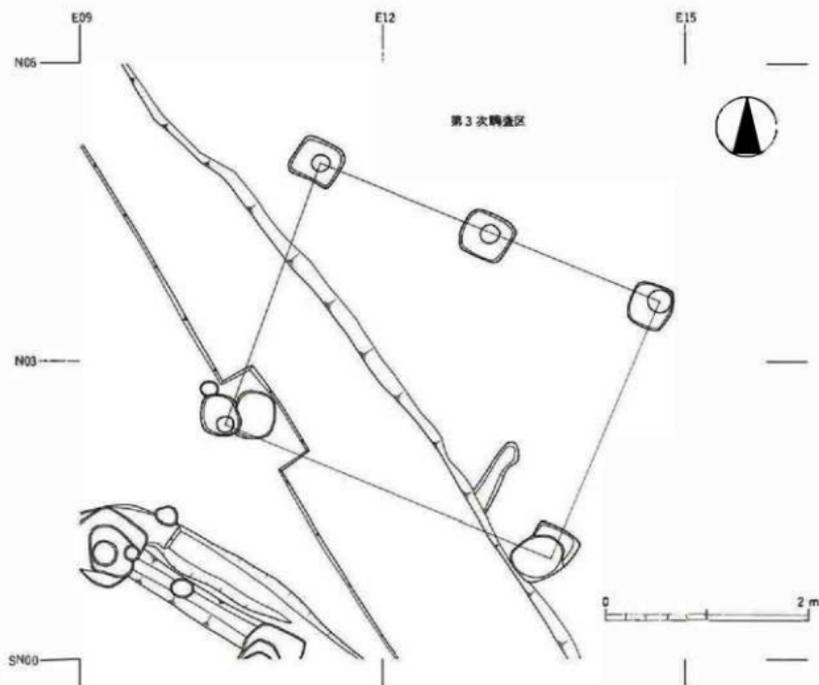
第15図 SB03平面図・断面図



第16圖 SB 04平面圖

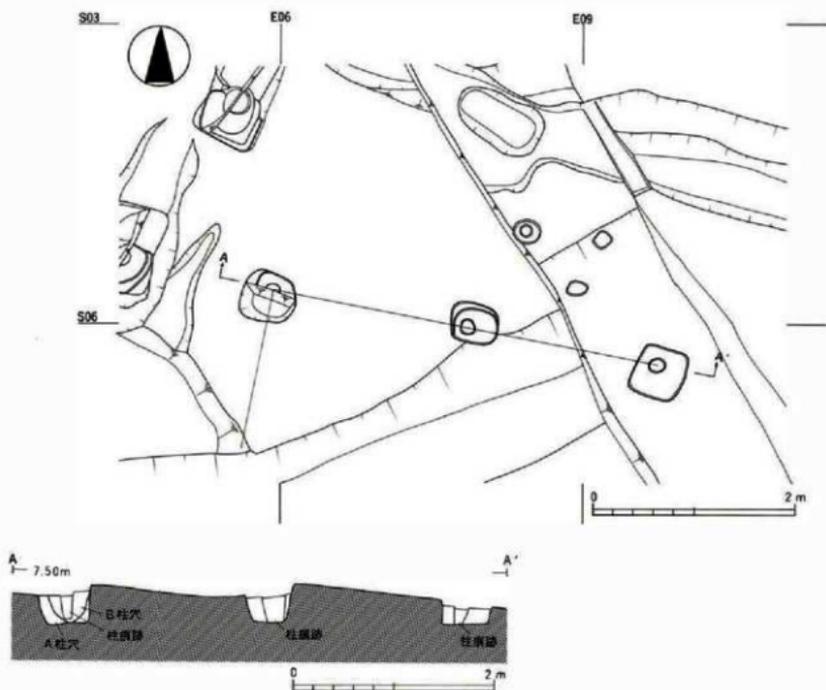
【S B04】コの字形に並ぶ6つの柱穴を発見したのみであるが、それらを北側柱列および西妻と東妻の一部とみて、桁行3間、梁行2間以上の東西棟と推定した。S B01・02、S I 05、S D07・08・09と重複しており、S I 05より新しい。したがってそれより古いS B02よりも新しい。それ以外のものとの関係は不明である。東妻をのぞく柱穴では柱痕跡を確認している。桁行については、北側柱列で総長約7.3m、柱間は、西より2.37m 2.36m、約2.5mである。梁行柱間は、いずれも北側柱列から1間分のみ把握しており、西妻が2.17m、東妻が約2.3mである。方向は、北側柱列で見ると、東で約28度南に偏している。柱穴の平面形は概ね円形であり、規模は一辺40～50cmである。柱痕跡は、南西隅の柱穴で見ると径17cmである。

【S B21】調査区北端部に発見した桁行2間、梁行1間の東西棟掘立柱建物跡である。大部分は第3次調査区にあり、本調査では南西隅の柱穴1つを検出したのみである。南側柱列の中央の柱穴は発見していない。北側柱列と南西隅の柱穴で柱痕跡を検出している。桁行については、北側柱列で総長3.62m、柱間は西より1.84m、1.79m、南側柱列で総長約3.4mである。梁行については、西妻が2.80m、東妻が約2.8mである。方向は、北側柱列で見ると、東で22度23分南に偏している。柱穴の平面形は概ね方形であり、規模は一辺40～50cmである。柱痕跡は径10～12cmである。



第17図 S B21平面図

【SA20】第1調査区の地山面で発見した東西に並ぶ3基の柱穴である。西側に展開しないことから東西棟の北側柱、あるいは南北棟の北妻の一部と考えられる。SB01と重複しているが新旧関係は不明である。いずれの柱穴でも柱痕跡を確認しており、西側と中央の柱穴には2時期の重複が認められた。柱間は、西より1.97m、1.89mであり2間分で3.87mである。方向は東で11度1分南に偏している。柱穴の平面形は方形であり、規模は一辺約50cmである。柱痕跡は径15cmの円形である。柱間が異なっていることを重視すれば、東西棟の北側柱列の一部である可能性が高いであろう。

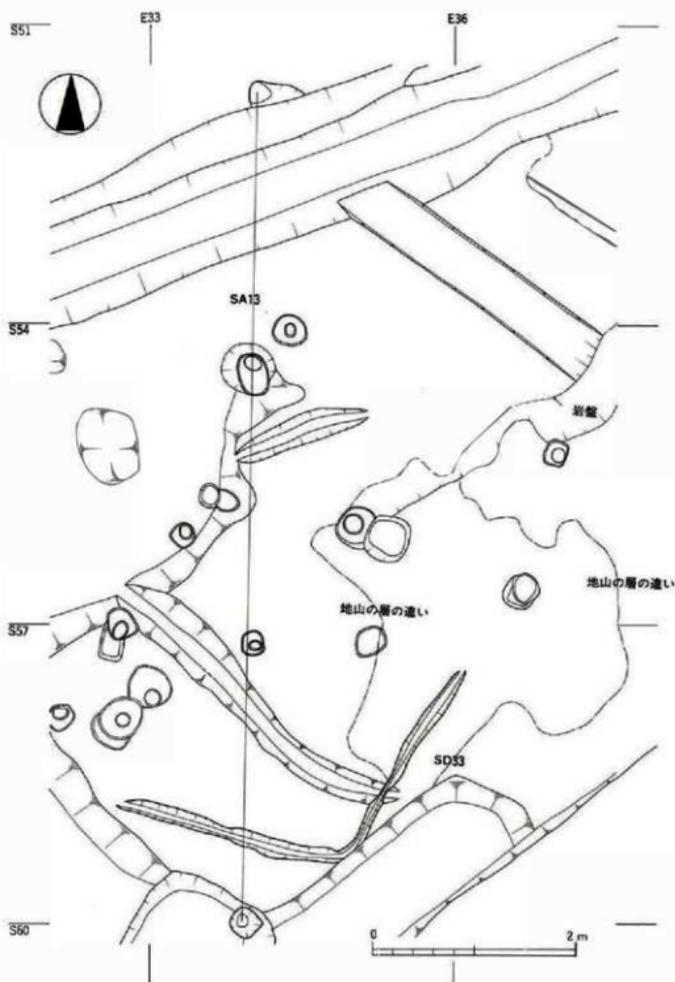


第18図 SB20平面図・断面図

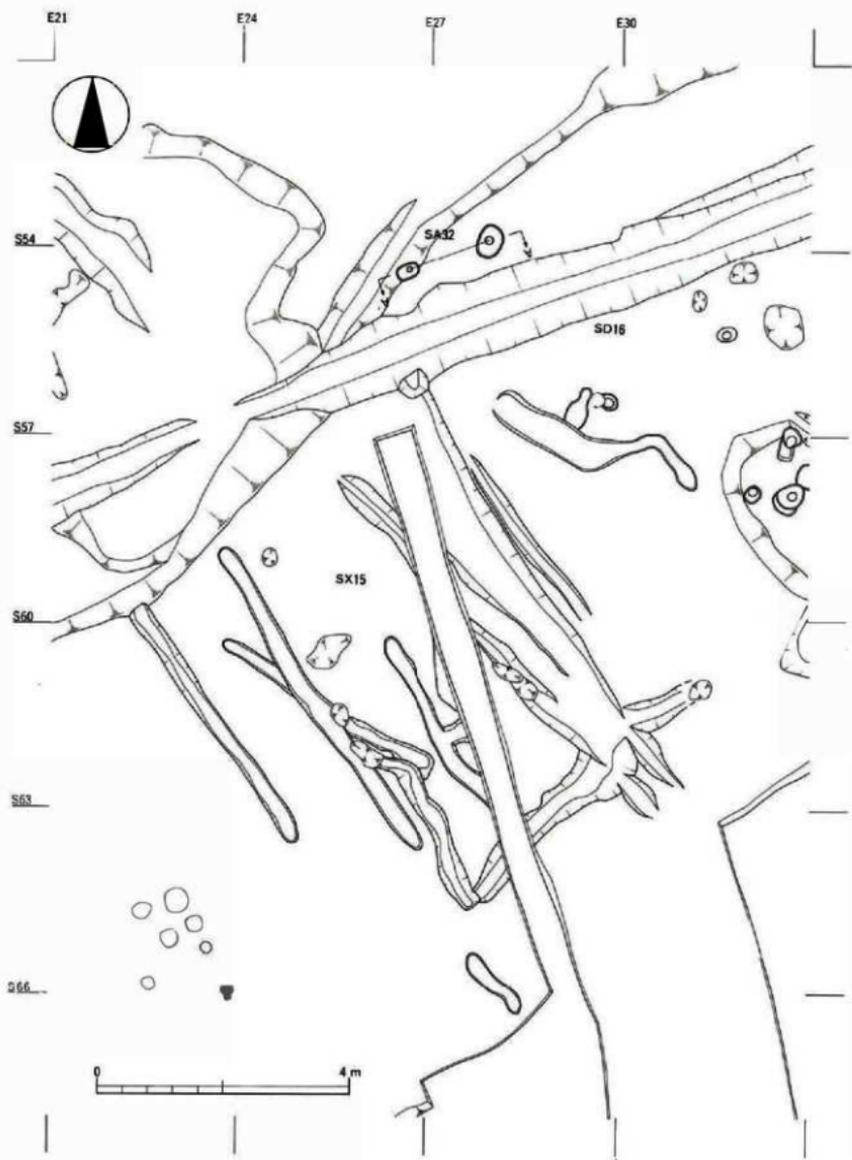
(2) 柱列跡

【SA13】第III調査区東部の地山面で発見した南北方向の柱列である。4基の柱穴を検出しており、そのうち2基の柱穴で柱痕跡を確認した。北側は現代の溝等によって確認できず、南側も調査区外に延びてい

る可能性がある。S D16と重複しており、それより古い。方向は北で0度58分東に偏している。柱間は、南より約2.8m、2.81m、約2.7mである。柱穴の平面形はおおよそ円形であり、規模は径25～50cmである。柱痕跡は径15～18cmの円形である。

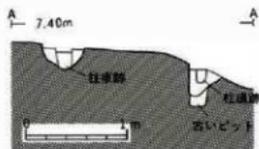


第19図 SA13、SD33平面図



第20圖 SA32、SX15、SD16平面圖

【S A32】 第III調査区の中央部に発見した東西に並ぶ2基の柱穴である。建物跡の柱穴かとも考えられるが、これらと組み合わせる他の柱穴を確認できなかったため、ここでは一応柱列としておく。両柱穴で柱痕跡を確認している。柱間は1.34mであり、方向は東で20度3分北に偏している。底面の高さは西側のものが深く、比高差は約14cmである。柱穴の平面形は楕円形であり、規模は長径35cm、短径25cmと長径52cm、短径40cmである。柱痕跡は径10～16cmである。

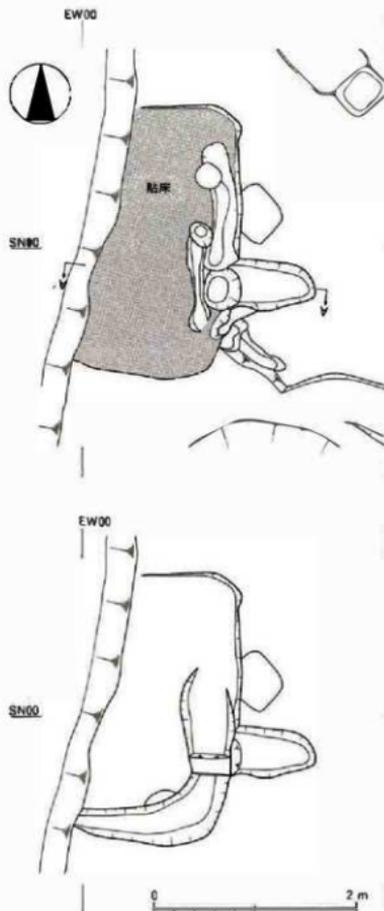


第21図 S A32断面図

(3) 竪穴住居跡

第I調査区で1棟、第III調査区で2棟発見した。いずれも部分的に検出したものであり、全体が把握されたものはない。

【S 105】 第I調査区北部の地山面に発見した住居跡である。表土を除去した段階ですでに床面が露出しており、残存状態は悪い。S B02と重複しており、それより新しい。東壁と北壁および南壁の一部を検出したにすぎないが、平面形はおおよそ方形と推定される。規模は、東辺が約2.9mであり、方向は発掘基準線とほぼ一致している。東辺の中央よりやや南によった位置にはカマドがあり、煙道と側壁の一部が残存している。煙道は長さ85cm、最大幅50cmであり、深さ約5cm残存している。側壁は南側の一部を残すのみである。床面は黄褐色の貼床であり、硬く締まっている。カマドの前には東辺とほぼ平行する溝がある。規模は長さ約1.6m、幅25～11cm、深さ約5cmである。

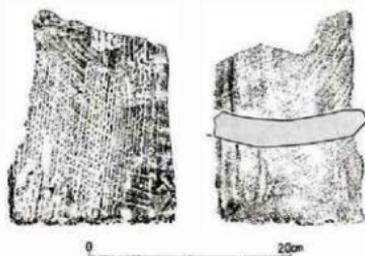


第22図 S 105平面図・断面図

番号	土色・土性など	備考
1	黄褐色(10YR5/6)・砂質土。灰化物・焼土を含む。	カマド内埋土
2	黄褐色(10YR5/6)・砂質土。灰黄褐色土粒を含む。	貼床
3	黄褐色(10YR5/6)・砂質土。	掘り埋土

貼床を除去すると、北壁から約1mの地点から壁に沿って幅50～25cmの溝が巡っている。古い段階の周溝の可能性もあるが、規模や平面形が一定ではないことから本住居構築時の掘り方と考えられる。

遺物は、埋土1層から土師器杯・甕、須恵器杯・甕、焼けた泥岩、煙道から土師器杯・甕、須恵器甕・瓶、平瓦、掘り方から土師器甕、須恵器甕、砥石、ピットから土師器杯、確認面から灰軸陶器瓶などが出土している。全体的に特徴的な部分を失っているものが多い。埋土1層出土の土師器甕は口縁部の破片であり、ロクロ調整されている。ピットから出土した土師器杯はロクロ調整されており、底部に糸切り痕の認められるものもある。煙道出土の平瓦は1枚作りによるものである(第23図)。焼けた泥岩はカマド材の可能性もある。

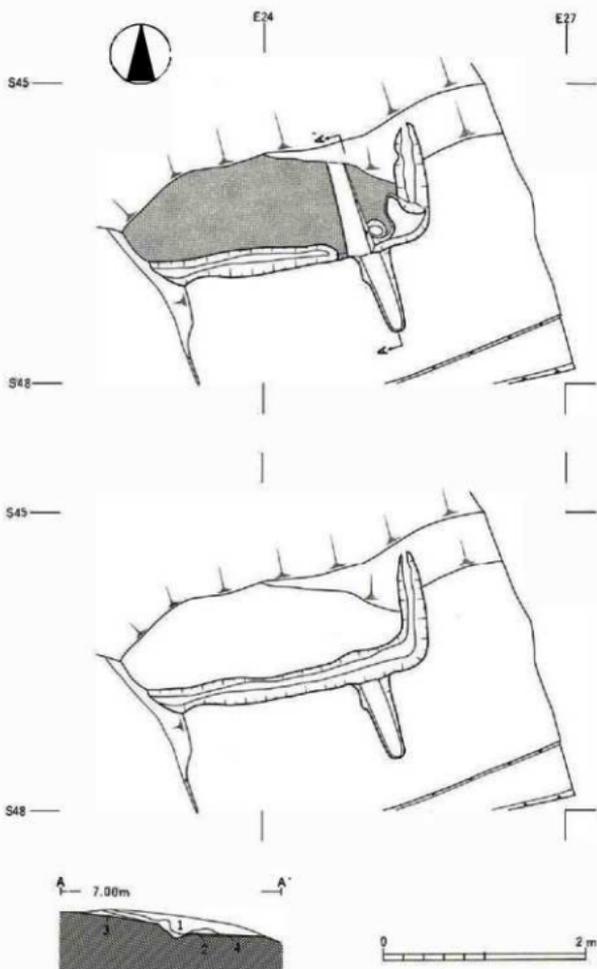


層位	種類	特徴	登録番号
カマド内埋土	平瓦 II B類	【凹面】糸切痕→布→ナデ 【凸面】糸切痕→縄叩き(つよれ気味)	R(1)-10

第23図 S 105出土遺物

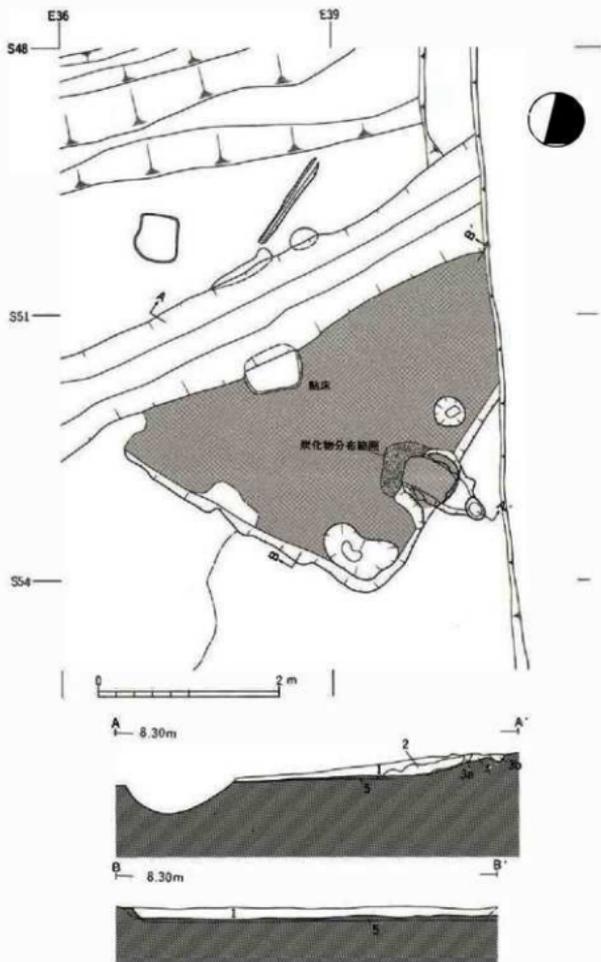
【S 11】第III次調査区の地山面で発見した住居跡である。本体の大部分はその北側の谷によって侵食されており、東壁と南壁の一部を残すのみであるが、平面形はおおよそ方形と推定される。規模は、南辺2.8m以上、東辺1.2m以上である。方向は、南辺でみると約11度北に偏している。煙道から南辺の南東隅よりにはカマドがあり、煙道と側壁の一部が残存している。煙道は長さ約80cm、最大幅35cm、深さ9cmである。側壁は東側の一部を残すのみである。東壁と南壁の間にはそれぞれ周溝があり、カマドの前面で止まっている。南壁の周溝は幅27～19cmであり、深さは5～3cmである。底面は西側、すなわちカマドとは反対の方向に傾斜している。東壁の周溝は幅約30cmであり、深さ5cmである。床面は黄褐色の貼床である。貼床を除去すると、カマド前面で途切れていた周溝は本来連続して掘削されたものであることを確認した。床面構築にあたり、①連続して周溝を掘削、②カマド前面を一部埋め戻し、床を貼る、という工程をとったと考えられる。本住居跡の埋土は、炭化物を含む砂質土が全体的に堆積しており、カマドから煙道にかけては焼土と炭化物を多量に含む層が堆積している。

遺物は、埋土1層から土師器杯・甕、須恵器甕、平瓦、煙道・床面直上・カマド内・貼床から土師器甕が出土している。この内、貼床とカマド内から出土した土師器甕はロクロ調整されたものである。平瓦は多賀城政庁創建期のものである。



番号	土色・土粒など	備考
1	黄褐色 (10YR5/6)・砂質土。炭化物粒少量含む。	
2	暗赤褐色 (2.5YR2/3)・粘土。炭化物を多量に含む。	
3	褐色 (10YR4/6)・粘質土。	
4	黄褐色 (10YR5/6)・粘質土。	貼付

第24図 S111平面図・断面図



番号	土色・土性など	備考
1	黄褐色 (10YR5/6)・砂質土	
2	同上、黄褐色 (10YR5/3)・砂質土	
3 a	暗赤褐色 (2.5YR2/3)・粘土	
3 b	黄褐色 (10YR5/6)・砂質土	
4	暗黄褐色 (10YR7/6)・砂質土	
5	黄褐色 (10YR5/6)・砂質土	竈床

第25図 S112平面図・断面図

【S I 12】第Ⅲ調査区の南東隅の地山面で発見した住居跡である。残存状態についてみると、北側については床面まで完全に削平されているが、南側については比較的良好である。近世以降のSD16によって北半部は大きく破壊されている。東壁および南壁の一部を検出したにすぎないが、平面形はおおよそ方形と推定される。規模は、東辺が2.9m以上、南辺が3.4m以上である。方向は、南辺でみると東で約30度南に偏している。床面は黄褐色土の貼床であり、硬く締まっている。壁は、最も残存状態が良好な東側では約21cmである。東壁の南西隅よりにはカマドがあり、天井、側壁、煙道の一部が残存している。煙道は長さ約50cm、最大幅50cmである。側壁は粘土を積んで構築しており、焚き口の両側には扁平な石を埋めこんでいる。カマドの底面は浅く皿状に窪んでいる。側壁の内面およびカマド底面は硬く焼き締まり、赤褐色に変色している。また、床面上で3基の小ピットを検出した。ピット1は、本住居跡の南西隅の壁際に位置しており、平面形は歪んだ楕円形である。規模は、長径約80cm、短径40～55cm、深さ34cmである。埋土の下層は粘性を帯びている。ピット2はカマドの東側に位置するものである。平面形は円形であり、規模は径35cm、深さ14cmである。ピット3は住居跡のほぼ中央部で検出したもので平面形はおおよそ方形と推定される。規模は一辺60cm×45cm以上であり、深さは19cmである。

遺物は、埋土1層から土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶、貼床から土師器壺、須恵器瓶などが出土している。1層出土の土師器壺の内、1点はロクロ調整されたものである。

(4) 溝跡

【SD07】第Ⅰ調査区で発見した東西溝である。第Ⅱ層に覆われ、地山面から掘りこんでいることを確認した。東側は調査区外へ延びているが、西側はE02ラインで止まっており、確認した長さは13.5mである。方向については、西半部でみると約23度、東半部でみると約17度北でそれぞれ南に偏している。規模は、幅0.5～0.7m、深さ10～20cmである。底面は北から南へ傾斜している。

【SD08】第Ⅰ調査区の地山面で発見した東西溝である。東側は調査区外に延びているが、西側についてはE06ライン付近まで検出したにとどまり、確認した長さは約12mである。方向は北で約度南に偏している。方向については、西半部でみると約23度、東半部でみると約17度北でそれぞれ南に偏している。規模は、幅0.4～0.8m、深さ5～10cmである。底面は北から南へ傾斜している。

【SD09・10】第Ⅰ調査区の地山面で発見した「」状に曲がる溝跡である。南北方向のものをSD09、東西方向のものをSD10とする。SD09はSD07の北側まで約3.5m、SD10は調査区壁際まで約3m検出したにすぎないが、SD10はさらに調査区外へ延びており、第3次調査区に及んでいる。方向は、SD09が北で約40度東に偏しており、SD10は東で約35度南に偏している。規模は、SD09が幅0.4～0.6m、深さ15cmであり、SD10が幅0.3～0.4m、深さ5～10cmである。

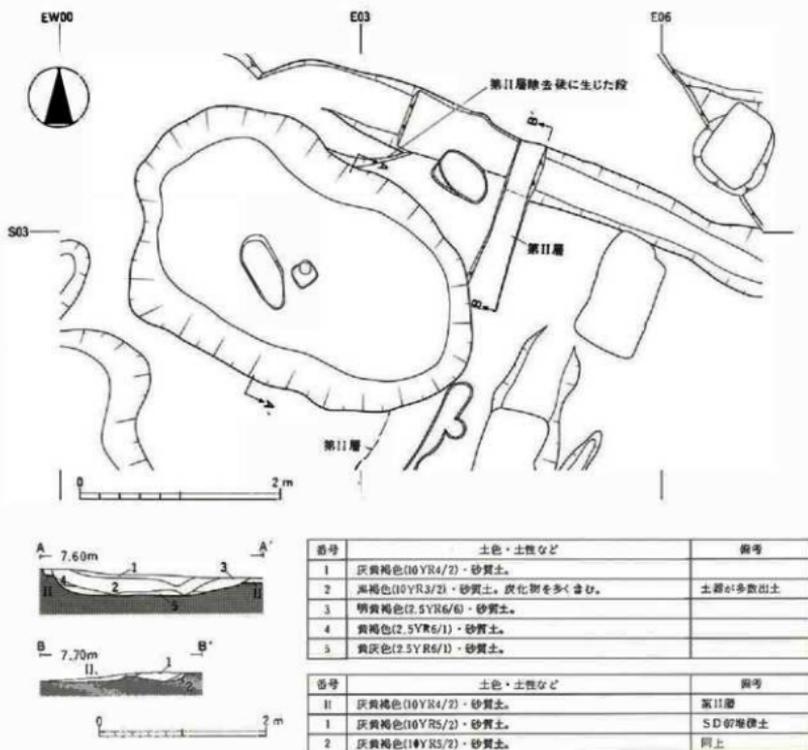
遺物は、土師器杯・甕、須恵器壺などが出土している。土師器壺は非ロクロ調整で、体部外面はハケメ調整である。

【SD16】第Ⅲ調査区において発見した東西溝である。第Ⅲ層上面で検出した。S I 12、S A 13と重複しており、それより新しい。方向は東で23度北に偏している。規模は、幅0.9～1.4m、深さは約0.5mである。埋土は砂質土を主体とし、南側から北側に傾斜して堆積している。埋土下層から近世以降の陶器土瓶が出土している。

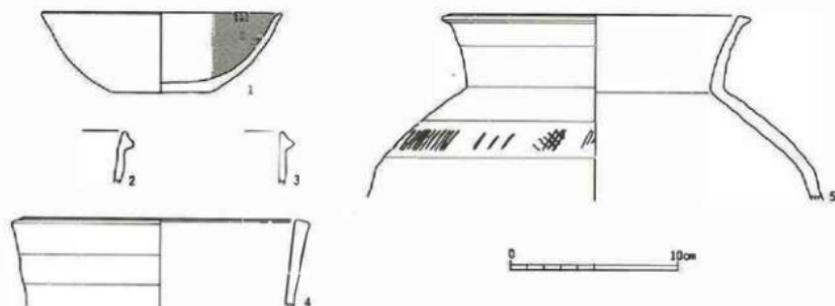
(5) 土壌及びその他の遺構

【SK06】第1調査区の第II層上で発見した土壌である。平面形は歪んだ楕円形であり、規模は長径3.9m、短径2.5m、深さ0.5mである。埋土は5層に細分される。下層（3～5層）は混入物が少なく自然堆積層と見られるが、上層（1・2層）は多量の炭化物を含むもので、窪みを人為的に埋め戻したような状況である。土器類が多数出土した。

遺物は各層から土師器杯・甕・甕・羽釜、須恵器杯・蓋・瓶・甕、赤焼き土器杯・鉢、土製カマド、丸瓦、瓦石などが多くの遺物が出土した。特徴的な部分が失われているものが多く、層位的に変化はほとんど認められない。土師器杯・甕は調整を確認できるものはほとんどがロクロ調整を行ったものである。羽釜は口縁部および鏝の破片が2点出土している（第27図2・3）。接合しないが同一個体の可能性がある。鏝は形骸的で実質的なものとは考えられない。第27図4は口縁部の破片であるが、直立する円筒形の形状から北関東系の甕と推定したものである。土製カマドは体部の破片である。



第26図 SK06・S D07平面図・断面図



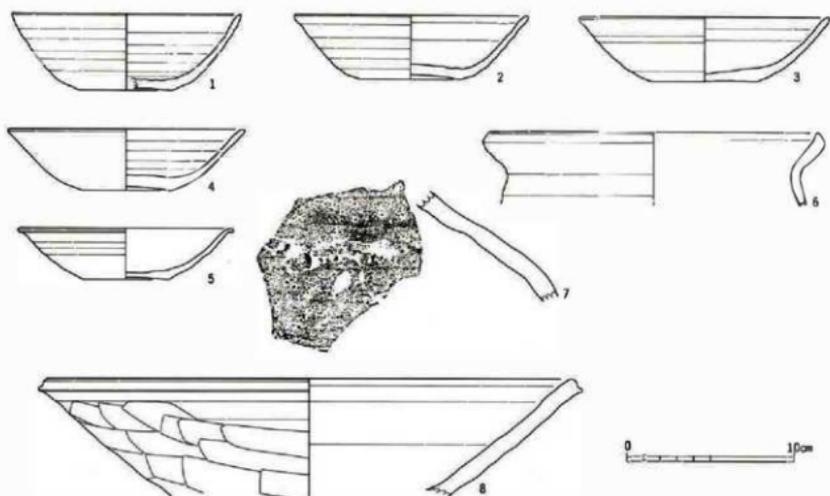
番号	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号
1	土師器・杯	1層	【外面】 ロクロナデ 【内面】 ヘラミガキ→黒色処理	14.4	5.8	4.9	R-2
2	土師器・羽蓋	2層	【外面】 ロクロナデ 【内面】 ロクロナデ				R-18
3	土師器・羽蓋	1層	【外面】 ロクロナデ 【内面】 ロクロナデ				R-19
4	土師器・瓶	1層	【外面】 ロクロナデ 【内面】 ロクロナデ	(17.9)			R-17
5	土師器・甕	1層	【外面】 平行叩き→ロクロナデ 【内面】 ロクロナデ	(18.4)			R-3

第27図 SK46出土遺物

【SX15】第III調査区の緩斜面で発見した小溝跡群である。第IV層に直接覆われ、地山面から掘りこまれたことを確認している。

遺物は、須恵期甕の破片などが少量出土している。

【SX19】第I調査区の南端部において多くの土器が出土した。詳細は不明であるが、調査区を南北に分断する埋没谷の北斜面にあたり、その落ち際に形成された遺物包含層の可能性がある。確認面から中世の無軸陶器甕の体部破片が1点出土しているが、それ以外はすべて古代の土器であり、しかも全体の1/2以上の大きな破片が多い。土師器杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯・高台杯、転用硯、鉄鍬（或いは釘）、鉄滓などが出土している。土師器は調整を確認できるものすべてがロクロ調整をおこなったものである。転用硯は須恵器甕の体部破片を利用したものである。



番号	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号
1	須恵器・杯	S X 19 2層	【外面】ロクロナデ・糸切り 【内面】ロクロナデ	(17.●)	5.7	(4.7)	R(2)-6
2	須恵器・杯	S X 19 1層	【外面】ロクロナデ・回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(14.8)	6.1	3.9	R(2)-7
3	須恵器・杯	S X 19 1層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(15.0)	6.2	3.9	R(2)-5
4	須恵器・杯	S X 19 1層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(14.1)	5.6	3.7	R(2)-4
5	赤焼き土器・杯	S X 19 1層	【外面】ロクロナデ・回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(13.0)	5.2	3.1	R(2)-2
6	土師器・甕	S X 19 1層	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(19.7)			R(2)-14
7	無釉陶器・甕	S X 19 確認面	【外面】ヘラナデ・自然釉 【内面】ヨコナデ				R(1)-31
8	赤焼き土器・鉢	第II層	【外面】ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	(31.4)			R(1)-5

第28図 遺構外出土遺物

4. 遺構の年代と性格

今回の調査で発見した遺構は、掘立柱建物跡6棟、柱列2条、竪穴住居跡3棟、区画溝を含む溝跡4条、土壌1基などである。はじめにそれらの年代を検討し、次に性格について考えてみたい。

(1) 年代

はじめに、遺物が出土している遺構を抽出すると次のとおりである。

- ①S I 05：埋土からいくつかの土器が出土しているが遺構に直接伴う資料はほとんどない。住居内ピットからロクロ調整の土師器杯、カマド前方ピットから須恵器杯が出土している。後者は、近年の多賀城跡の調査において須恵系土器の初現形態とされているものと特徴が共通する(註1)。ロクロ調整の土師器は、多賀城跡出土土器の変遷では8世紀末頃に位置付けられているB群土器の段階から見られる(註2)。また、須恵系土器の初現形態とされている灰色の杯は多賀城跡第61次調査第7層出土土器の中に見られ、9世紀後半頃とされている。埋土からはロクロ調整の土師器甕が出土しているが確実に10世紀以降とみられる遺物は出していない。
- S I 11：貼床からロクロ調整された土師器甕が出土しており、多賀城跡出土土器のB群土器、すなわち8世紀末を上限年代とすることができる。埋土1層からもロクロ調整の土師器甕が出土している。
- ③S I 12：埋土1層からロクロ調整の土師器甕が出土している。
- ④S K 06：埋土は大きく上層と下層に区別される。ロクロ調整された土師器は上層・下層のいずれからも出している。赤焼き土器についてみると、多賀城跡出土土器のE・F群土器にみられるような典型的なものは上層には含まれるが下層には含まれない。下層からはその初現形態とされるものが1点出土している。このような土器の出土状況から、上層は10世紀前葉以降に堆積したものであることは確実であり、土壌が掘削された時期についてはそれ以前とすることができる。土壌埋土の上層と下層の間には明確な間層が認められないことから10世紀前葉をさほど遡らない可能性がある。
- ⑤S D 09・10：埋土から非ロクロ調整の土師器甕が出土している。体部外面はハケメ調整である。非ロクロ調整で体部をハケメ調整した土師器甕は8世紀前葉以前に多くみられるが、表彬ノ入式の前段階にも伴うことが知られており、破片資料からは判断が困難である。
- ⑥S X 19：多賀城跡出土土器のE・F群土器にみられるような典型的な赤焼き土器が多数出土しており、10世紀前葉頃の堆積層と見られる。

遺物は出していないが、①～⑥までの遺構との重複関係が判明しているものは次のとおりである。

- a：S B 01・20はS X 19より古い
- b：S B 02はS I 05より古い
- c：S D 07は第II層に覆われており、S K 06より古い

以上のことをまとめると、S I 11は8世紀末以降、S B 02は9世紀後半以前、S I 05は9世紀後半頃、S B 01・S D 07は10世紀前葉以前、S K 06は10世紀前葉頃となる。S B 03・21などは柱穴の規模や平面形、埋土の様相が共通していることからS B 02とほぼ同様な年代を考慮しておきたい。特にS B 01はS B 02と方

向がほとんど一致していることから同年代すなわち9世紀後半以前のものである可能性が高い。今回の調査における全出土遺物のうち、石鍬や中世陶器などの例外を除くとほとんどが9・10世紀のものであることは、この地区における遺構の年代がその頃にあることを示唆するものと考えられる。年代不明の遺構についてもおおむね9・10世紀の年代を与えることができよう。

(2) 遺構の性格

今回発見した遺構のなかで、性格を窺わせる資料はほとんどないが、ここではS 501について若干の検討を行いたい。

まず、桁行5間以上という規模の建物は、多賀城内および寺跡以外では大規模な部類に属する。多賀城南面の方格地割りの中でもさほど多くはない。構造的に見た場合、床糸は検出されなかったものの、柱穴の底面レベルは地盤の傾斜に沿って深くなっており、床板を張った構造と推定される。床が土間の倉、即ち「屋」の可能性は低いと考えられる。東北地方において、古代の一般的な住居は竪穴住居とする通説的な見解に従えば、本建物は多賀城に関わる官人層の居宅の一部と見ることが可能であろう。

5. まとめ

- (1) 多賀城跡東方約600mの低丘陵部から古代の掘立柱建物跡6棟、柱列2条、竪穴住居跡3棟、区画溝を含む溝跡4条などを発見した。
- (2) 掘立柱建物跡や竪穴住居跡はいずれも平安時代頃の年代と推定される。
- (1) 最も規模が大きい掘立柱建物跡は官人層の居宅の一部である可能性がある。
- (4) 今回の調査によって、従来知られていたよりもさらに広い範囲に遺構の存在が確認され、多賀城をとりまく古代の遺跡の広がりを考える上で大きな成果となった。

(註1) 宮城県多賀城跡調査研究所「Ⅲ 第61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』1992

(註2) 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所「研究紀要Ⅶ」1980

V 高崎遺跡

1. 周辺の地形

高崎遺跡における調査対象地区は直線距離にして南北約300mである。北側約1/3は北側に向かう斜面であり、東北本線との間には一部湿地がみられる。それ以外は、尾根をはさんで北側および南側に向かう緩やかな斜面となっている。尾根頂部と南端部の比高差は約1.7mである。

なお、以下の記述にあたり、調査区の南端部から約100mの地点にある東西方向の市道を境となし、その北側を北地区、南側を南地区と称する。

2. 層序

今回の調査区は南北約300mの長さにおよんでいる。しかも緩やかながら起伏に富んでいることからいくつかの堆積層の存在を予想したが、ほとんどの調査区では表土の下は直接地山となっている。わずかに北地区において谷頭とみられる窪地において黒色土の堆積があり、その上面で溝等を検出したのみである。南区南半部については、住宅地の建設にあたり著しく削平・攪乱を受けており、遺構の残存状態は悪い。

3. 発見した遺構と遺物 1—平成5年度確認調査

【SX1137】北地区南端部の地山面で発見した壁面が焼けている土壌である。平面形は円形であり、規模は直径約0.7m、深さ0.1mである。壁面は火を受けて赤褐色になっているが硬く焼き締まるには至っていない。

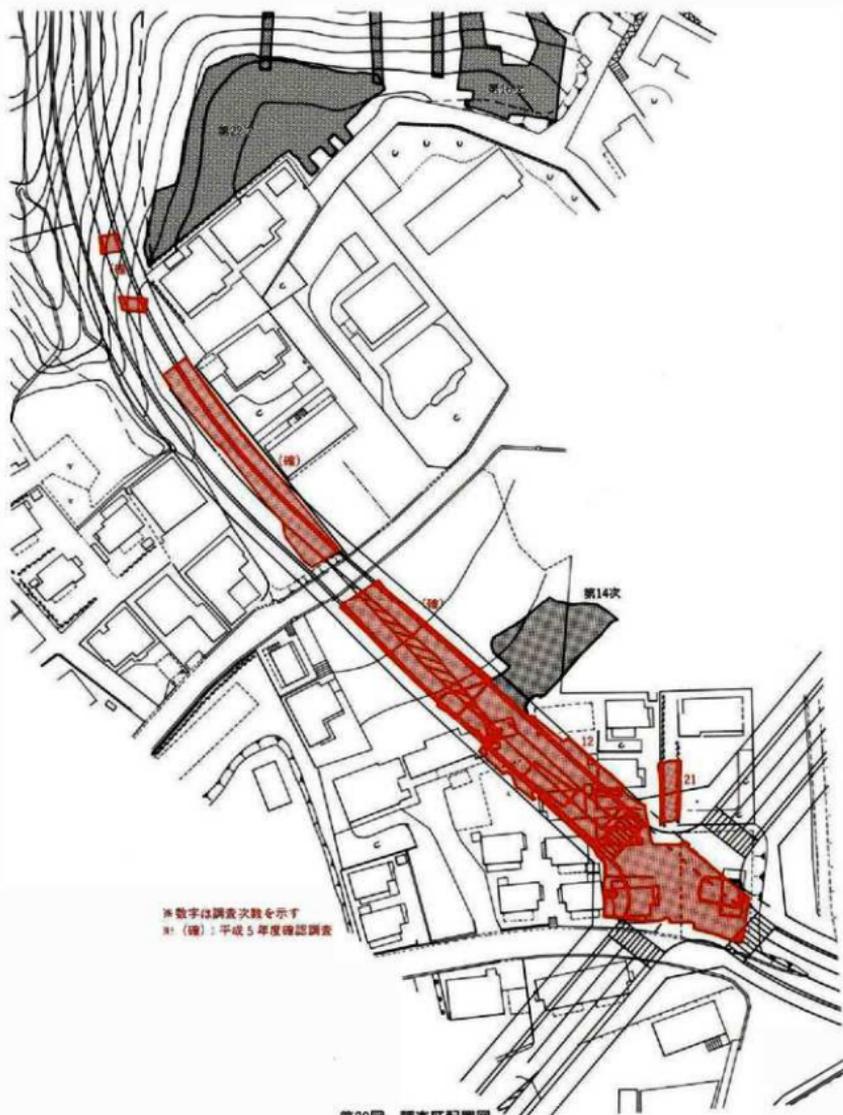
【SD1138】北地区ほぼ中央部の西向き斜面において発見した東西溝である。黒色土上面で検出した。約9m検出し、さらに調査区外に延びている。方向は東で約14度南に偏しており、おおよそ地形の傾斜に沿っている。規模は、上幅0.4～1.3mと一定しない。深さは約20cmである。底面は凹凸があるが、調査区両端で計測すると、約70cmの比高差があり、西側に強く傾斜している。

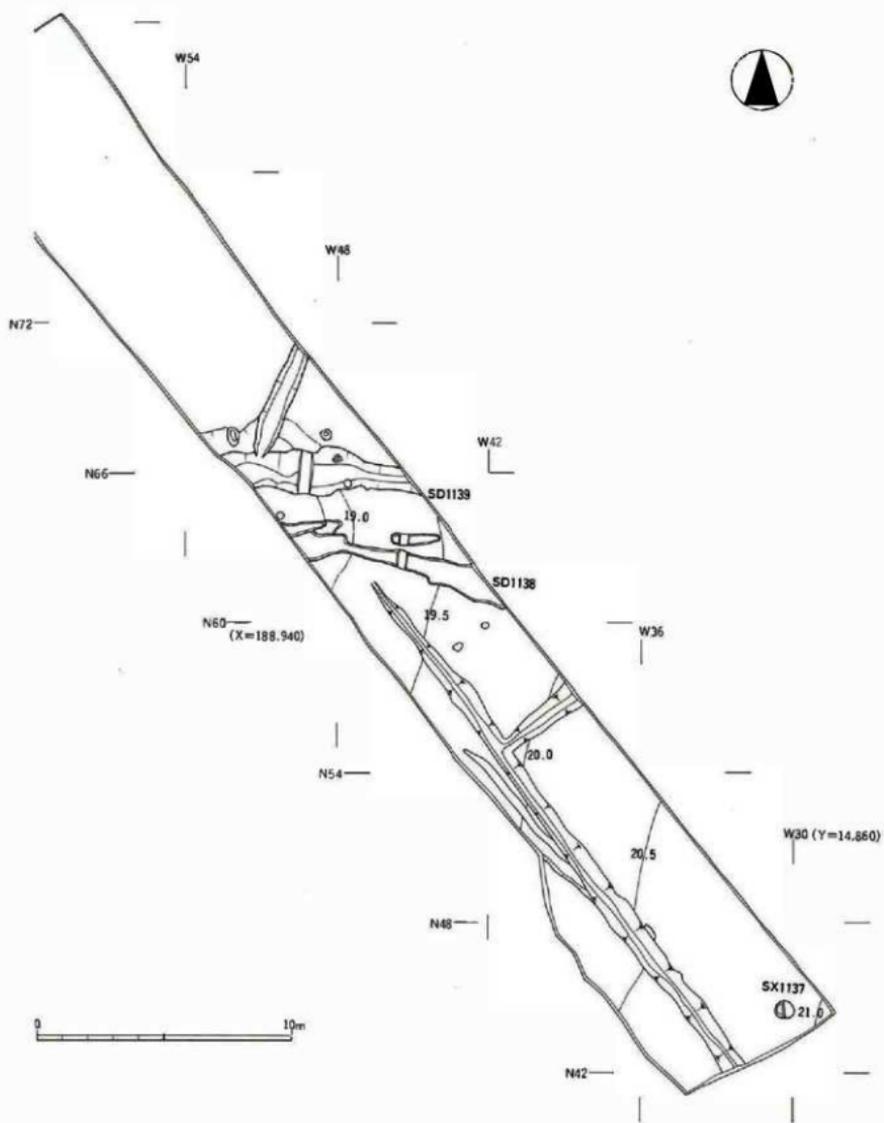
【SD1139】北地区ほぼ中央部の西向き斜面において発見した東西溝である。黒色土上面で検出した。約8m検出し、さらに調査区外に延びている。方向は東で約3度南に偏しており、おおよそ地形の傾斜に沿っている。規模は、上幅0.9～2.0mと一定しない。深さは12～21cmである。調査区両端で計測すると、約60cmの比高差があり、西側に強く傾斜している。

【SX1141】南地区北半部の地山面で発見した土器埋設遺構である。径約20cmの円形の掘り方の中に土器器壁を据えている。土器器壁は体部下半を残すのみであり、しかも器表面は剥落が著しく調整等の特徴は観察できない。

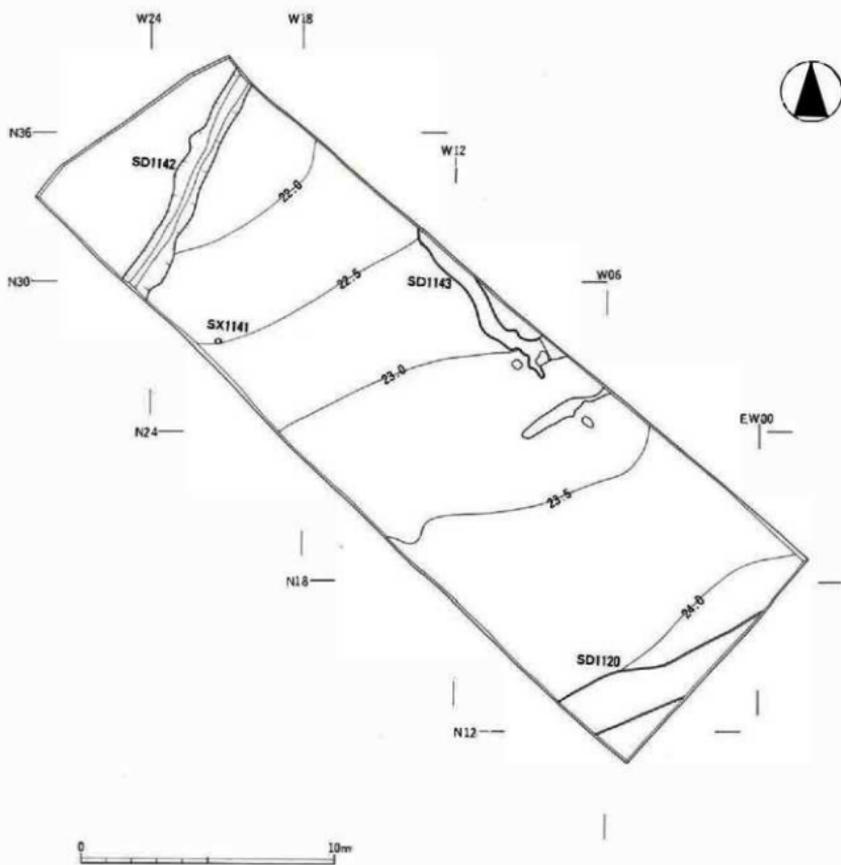
【SD1142】南地区北半部の地山面で発見した南北溝である。約10m検出し、さらに調査区外に延びている。方向は北で約27度東に偏している。規模は、上幅0.8～1.4mと一定しない。深さは25～35cmである。調査区両端で計測すると、約36cmの比高差があり、北側に傾斜している。

【SD1143】南地区中央部北壁際の地山面で発見したL字状に曲がる溝跡である。南北約7m、東西約2m検出し、それぞれさらに調査区外に延びている。残存状況はきわめて悪く、かろうじて底面付近を残すのみである。

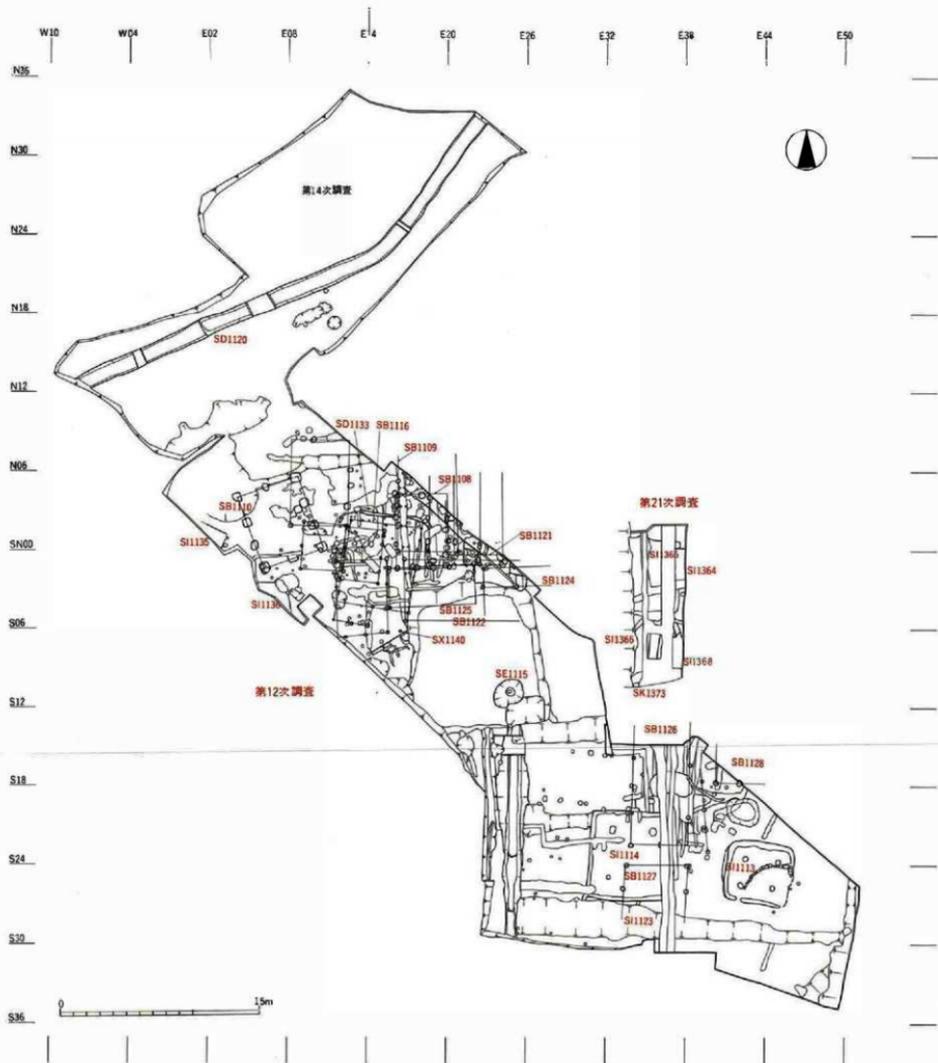




第30图 北地区遺構全体図



第31图 南地区北半部遺構全体図



第32図 南地区南半部遺構全体図

4. 発見した遺構と遺物 2—第12次調査—

第12次調査は丘陵南斜面と尾根付近を対象として実施し、掘立柱建物跡15棟、柱列跡2条、竪穴住居跡5軒、井戸跡1基、溝跡5条、土器埋設遺構1基などを発見した。以下、遺構ごとに説明する。

(1) 掘立柱建物跡

調査区全体から15棟発見した。このうち北半部の東西20m以上、南北15mの範囲に集中している。

【S B1110】桁行3間、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。調査区北半部のうち、最も西側の地山面で見つかった。柱穴はすべて検出しているが、北妻横通りと北西隅の柱穴は削平され、わずかに底面付近を痕跡的に残すのみである。S B1111・1117建物跡と重複しており、S B1111より古い。同位置で建て替えが行われており、2時期の重複が認められる。以下、古い順に説明する。

S B1110A 北妻横通りと北西隅の柱穴をのぞくすべての柱穴で重複関係が確認された。柱位置が明らかでないため、柱間および方向は不明であるが、B期とほぼ同様と推定される。柱穴は長方形であり、規模は、最も大きなもので67×80cm、小さなもので57×69cmである。壁はほぼ垂直に掘りこまれている。東側柱列でみると、掘り方の底面は南側のものほど低くなっており、北東隅の柱穴と南東隅の柱穴との比高差40cmであることから斜面に建てられたものと推定される。埋土は、黄褐色土やにぶい黄褐色土であり、硬く締まっている。

S B1110B A期の柱を抜き取り、ほぼ同位置で建て替えたものである。北妻横通りと北西隅の柱穴をのぞくすべての柱穴で柱痕跡を確認した。本建物の方向は、東側柱列でみると北で21度36分西に偏しており、南妻でみると東で18度21分北に偏している。桁行については、東側柱列で総長5.62m、柱間は、南より1.88m・1.81m・1.93m、西側柱列で総長約5.8m、柱間は、南より1.88m・1.95m・約1.9mである。梁行については、南妻で総長4.72m、柱間は、西より2.30m・2.43m、北妻で総長約4.7m、柱間は、西より約2.3m・約2.4mである。柱穴の平面形は、方形のものもあるが楕円形を呈するものが多い。一方の壁は垂



図版番号	種類	層位	特徴	登録番号
1	平瓦 II B類	南東隅柱穴 A掘方	【凹面】 布目→ナデ 【凸面】 縄叩き目（つぶれ気味）	R(02)-155
2	丸瓦 II B類	南東隅柱穴 A掘方	【凸面】 縄叩き目→ロクロナデ 【凹面】 布目	R(02)-156

第33図 S B1110出土遺物

直でないものが多く見られることから、A期の抜き取り穴を利用したと推定される。規模は、最も大きなもので長径78cm、短径60cm、小さなもので長径50cm、短径41cmである。埋土は明褐色土である。B期も、東側柱列でみると、掘り方の底面は南側のものほど低くなっており、北東隅の柱穴と南東隅の柱穴との比高差は36cmであることから斜面に建てられたものと推定される。南東隅柱穴と南西隅柱穴では瓦を利用して礎盤としている。前者は平瓦ⅡB類と丸瓦ⅡB類である。

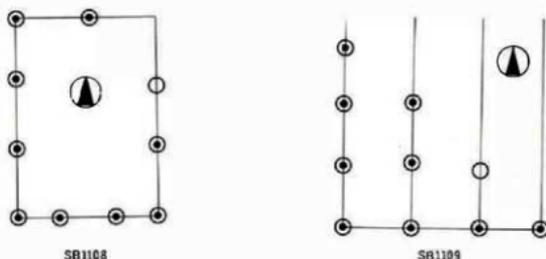
【SB1108】桁行3間の南北棟掘立柱建物跡である。梁行は北妻が2間で南妻が3間となっている。調査区北半部で発見した。調査区外にある北東隅の柱穴をのぞくすべての柱穴を検出し、西側柱列と南妻では柱痕跡も確認した。SB1119・1109・1116・1122・1125、SD1133と重複しており、SB1119より新しく、SB1109・1125、SD1133よりも古い。本建物跡の方向は、西側柱列でみると北で2度12分西に偏している。桁行については、西側柱列で総長5.73m、柱間は、南より2.02m・1.96m・1.75m、東側柱列については、柱間が南より約2.1m・約1.7mである。梁行については、南妻で総長3.90m、柱間は西より1.16m・1.66m・1.09m、北妻については西より1間目の柱間が2.19mである。柱穴の平面形は方形のものと円形のものがある。

【SB1119】南北・東西3間以上の掘立柱建物跡である。調査区北側に延びており、さらに東側にも延びている可能性があるため建物の形式は不明である。SB1108・1109・1121と重複しており、SB1108より新しい。方向は、西側の南北柱列で見ると北で0度13分東に偏しており、南側の東西柱列でみると東で0度12分南に偏している。柱間については、西側の南北柱列で南より1.82m・1.78m・1.56m以上、西側より1間目の南北柱列で南より2.08m・1.74m以上、西より2間目の南北柱列が1間分で約1.7m、南側の東西柱列が西より1.90m・1.95m・1.82m以上である。

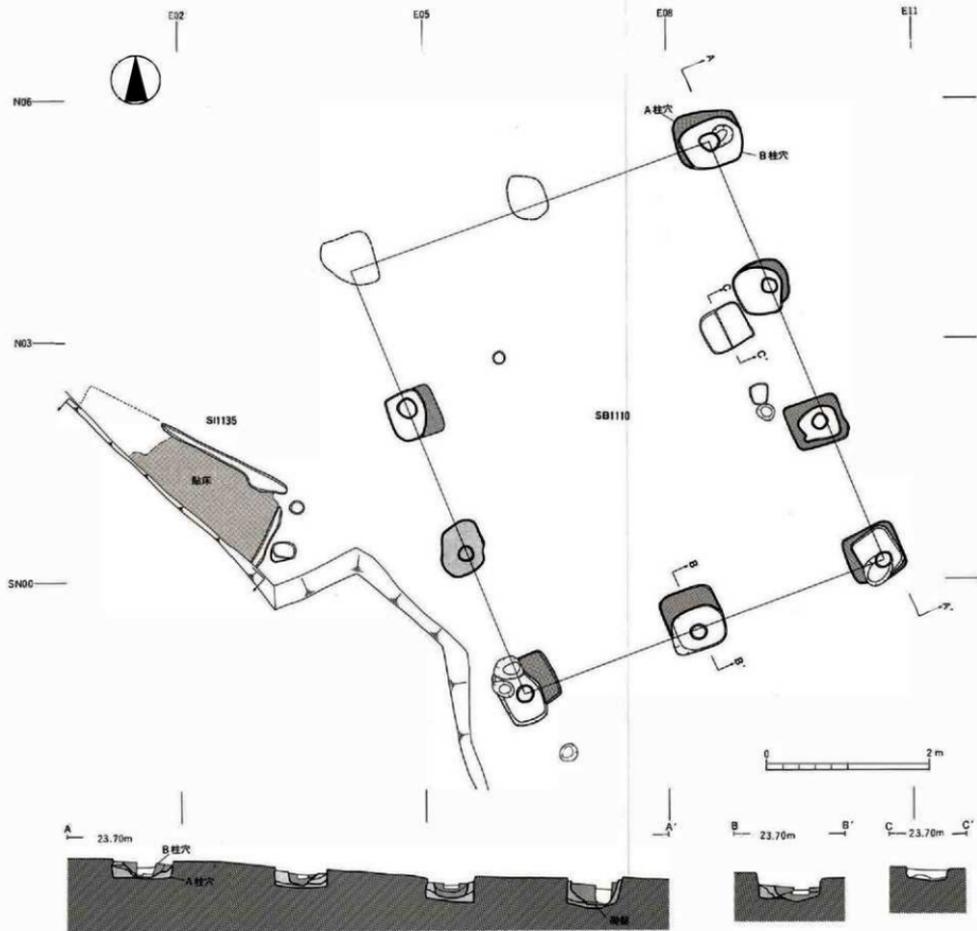


種類	層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号
須恵器・杯	柱痕跡	【外面】ロクロナデ・回転糸切り 【内面】ロクロナデ		5.4		R00-56

第34図 SB1119出土遺物



第35図 SB1108・1119模式図



第36図 SB1110平面図・断面図、S11135平面図

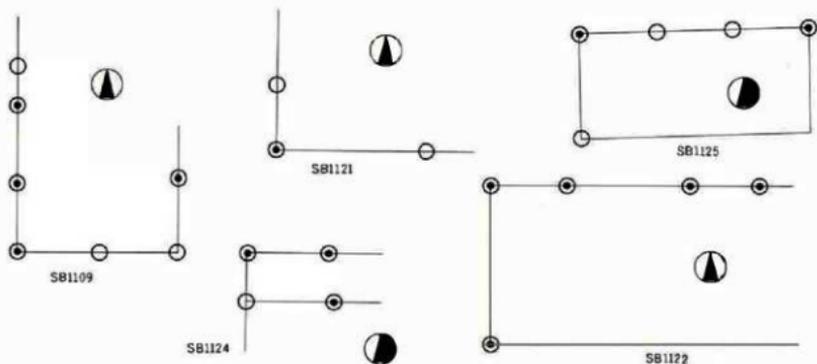
【SB1109】桁行3間以上、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。SB1108・1116・1121建物跡と重複しており、SB1108より新しい。方向は、西側柱列でみると北で0度38分東に偏している。桁行については、西側柱列で総長約5.4m以上、柱間は、南より2.06m・2.14m・約1.2m以上、東側柱列で1間分の柱間が約2.3mである。梁行については、南妻が総長約4.6m、柱間は西より約2.3m・約2.3mである。

【SB1121】南北・東西1間以上の掘立柱建物跡である。大部分が調査区外にあり、3基の柱穴を検出したにすぎないため建物の形式は不明である。3基の柱穴のうち1基に柱痕跡を確認した。SB1108・1109・1119・1122建物跡、SK1131と重複しているがいずれとも新旧関係は明らかでない。方向は、東西柱列でみると東で0度32分南に偏している。柱間は、東西柱列が約4.3m、南北柱列が約2.0mである。

【SB1122】桁行3間以上、梁行1間の東西棟掘立柱建物跡である。東妻は調査区外に延びており、南側柱列は南西隅の柱穴以外すべて破壊されているため、検出したのは西妻と北側柱列の一部である。検出したすべての柱穴で柱痕跡を確認した。SB1119・1125・1124・1108建物跡と重複しており、SB1119より新しい。方向は、北側柱列でみると東で0度14分南に偏している。桁行については、北側柱列で総長7.61m以上、柱間は、西より2.09m・3.54m・1.98m以上である。梁行については西妻が4.54mである。

【SB1125】桁行3間、梁行1間の東西棟掘立柱建物跡である。南側柱列はほとんどが破壊されており、わずかに南西隅の柱穴を検出したのみである。北東隅と北西隅の2基の柱穴で柱痕跡を確認した。SB1108・1112建物跡、SD1132溝跡と重複しており、SB1108より新しく、SB1112、SD1132より古い。方向は、北側柱列でみると東で2度39分北に偏している。桁行については、北側柱列で総長6.49m、柱間は西より約2.1m・約2.2m・約2.2mである。梁行については、西妻で約2.9mである。

【SB1124】北半部の最も東側で発見した掘立柱建物跡である。東西方向に2列、対称の位置に並ぶ4基の柱穴を検出したのみである。3基の柱穴で柱痕跡を確認した。北側に展開する可能性もあるが、南側の柱列のほうがやや規模が大きいため、南側の2基の柱穴を北入側柱、北側の2基の柱穴を北庇とみて北庇付東西棟掘立柱建物跡を想定する。SB1122と重複しているが新旧関係は不明である。方向は、北側柱列でみると東で2度24分北に偏している。柱間については、北側柱列で1間分2.38m、北入側柱列で1間分約2.5m、庇の出は約1.4mである。

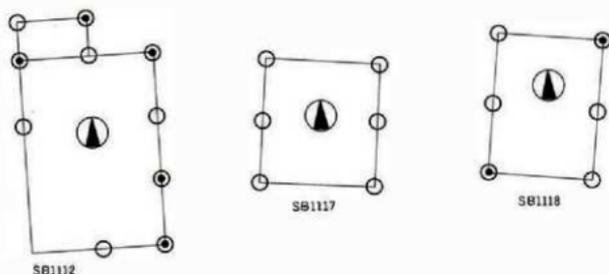


第37図 SB1109・1121・1122・1124・1125模式図

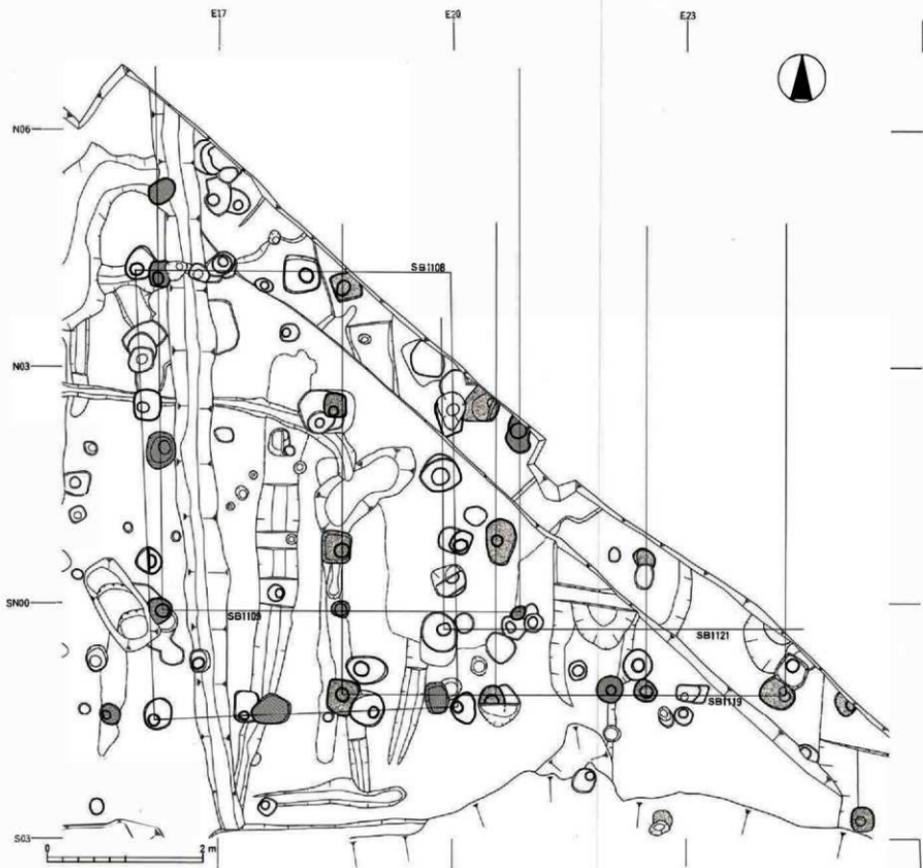
【SB1112】北妻に東西・南北1間の庇が付く桁行3間、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。南西隅柱穴は調査区外にあり、西側柱列の南から1間目の柱穴は攪乱で破壊され、検出できなかった。SB1116・1117・1118・1125建物跡と重複しており、SB1125より新しい。方向は、東側柱列でみると、北で1度2分西に偏している。桁行については、東側柱列で総長5.52m、柱間は、南より1.89m・約1.8m・約1.9mであり、庇の出は西側柱列上で約1.1m、棟通りで約1.2mである。庇を含めた総長は約6.8mと推定される。梁行については、北妻で総長3.82m、柱間は、西より約2.0m・約1.9mである。

【SB1117】桁行2間、梁行1間の南北棟掘立柱建物跡である。SB1110・1111・1112・1116・1118建物跡と重複しており、SB1118より新しい。柱穴はすべて検出しているが、いずれの柱穴でも柱痕跡は確認していない。方向は、西側柱列でみると北で約3度東に偏しており、東側柱列でみると北で約2度東に偏している。桁行については、西側柱列で総長約3.7m、柱間は、南より約1.9m・約1.8m、東側柱列で総長約3.5m、柱間は、南より約1.9m・約1.7mである。梁行については、南妻で約3.2m、北妻で約3.1mである。柱穴はおおよそ円形であり、規模は径20～27cmである。掘り方埋土は褐色土である。

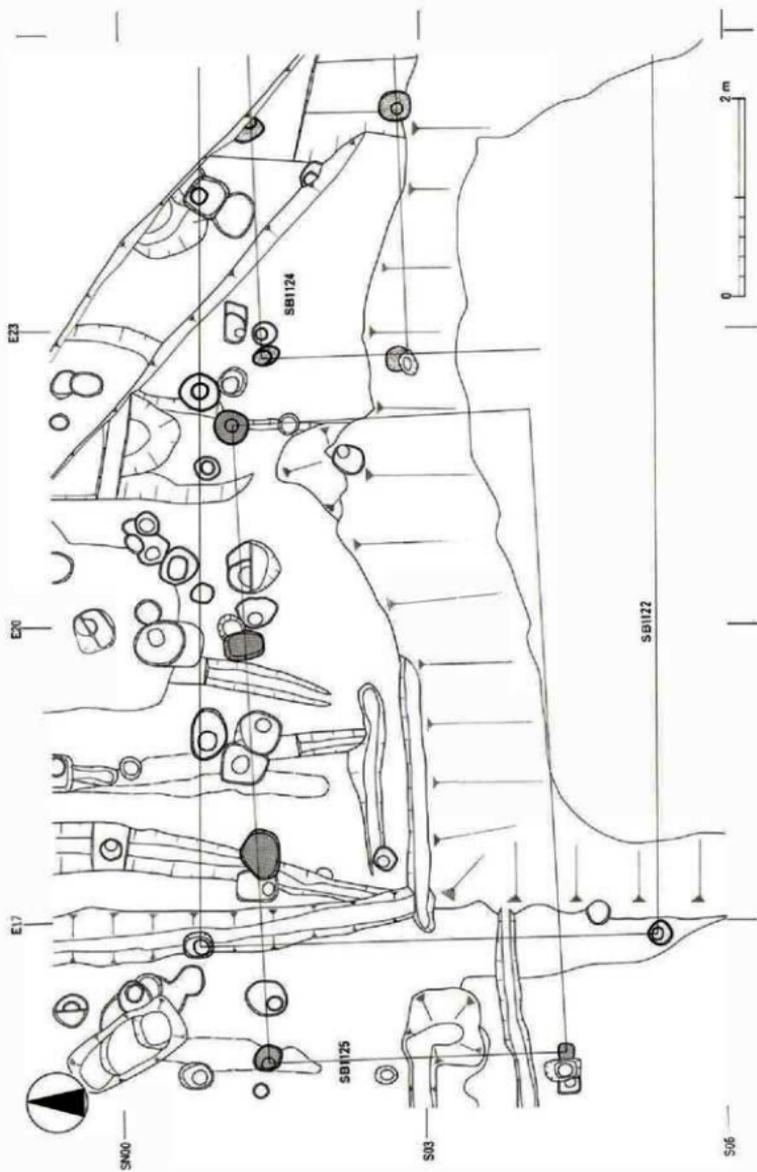
【SB1118】桁行2間、梁行1間の南北棟掘立柱建物跡である。柱穴はすべて検出しており、その半数の柱穴で柱痕跡を確認した。SB1111・1112・1116・1117建物跡と重複しており、SB1117より古い。方向は、西側柱列でみると、北で約7度東に偏しており、東側柱列でみると、北で約6度東に偏している。桁行については、西側柱列で総長約4.2m、柱間は南より約1.9m・約2.2m、東側柱列で総長約4.1m、柱間は、南より約1.8m・約2.1mである。梁行については、南妻が約2.6m、北妻が約2.8mである。



第38図 SB1112・1117・1118模式図

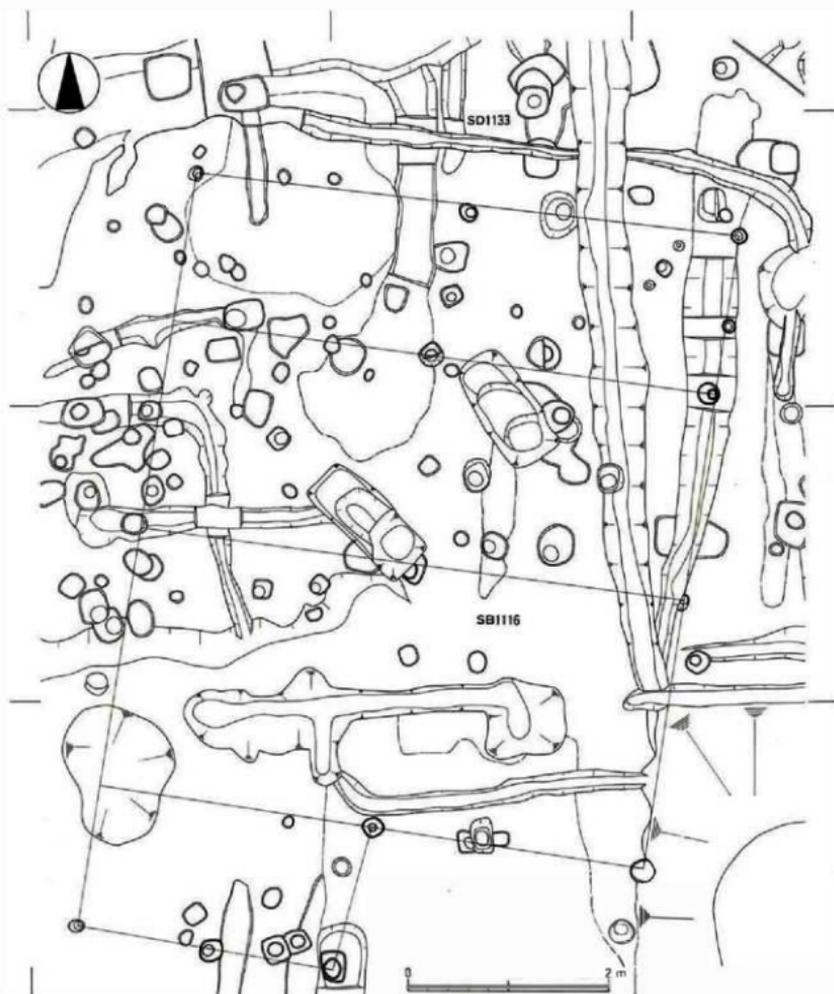


第39圖 S B 1108・1109・1119・1121平面図



新40図 SB 1122・1124・1125平面図

【SB1116・SD1133】SB1116は南妻に東西2間、南北1間の庇がある桁行3間、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。棟通りにも柱を持つ構造である。身舎南西隅および西側柱列北より1間目の柱穴をのぞくすべての柱穴を検出し、それらの約半分の柱穴で柱痕跡を確認した。SB1109・1112・1117・1118・1122建物跡、SD1132溝跡と重複しており、SD1132より新しい。方向は、身舎棟通りの柱列で見ると、北で



第41図 SB1116、SD1133平面図

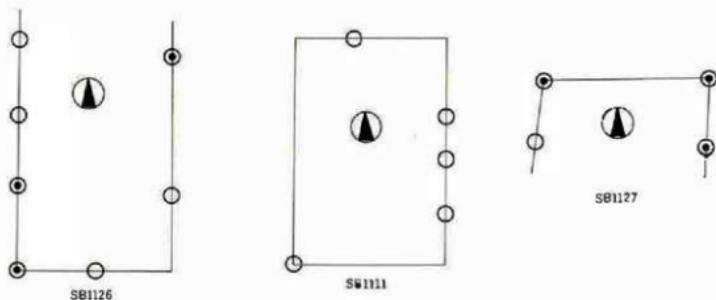
9度17分東に偏している。桁行については、柱痕跡を確認している棟通りの柱列でみると身舎は6.32m、柱間は、南より2.65m・2.17m・0.63m・0.88mである。庇の出は1.47mであり、総長7.79mである。梁行については、北妻で総長5.43m、柱間は西より2.76m・2.67mである。庇は、東西総長約2.6m、柱間は、西より約1.3m・1.27mである。

S D1133は本建物跡に伴う雨落ち溝と考えられる遺構である。S B1116の北妻側から北西・北東隅にかけて巡っており、北妻側では約7m、東側柱列側では約2.3m、西側柱列側では痕跡的に検出したのみである。本溝跡とS B1116との間隔についてみると、北妻で約0.7m、東側柱列でも約0.7mである。規模は、最も残存状態が良好な部分で幅27cm、深さ13cmである。底面は南側に向かって傾斜しており、S B1116北妻付近と北東隅付近との比高差は約8cmである。

【S B1111】 桁行4間、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。S B1110・1117・1118建物跡と重複しており、S B1110より新しい。検出できなかった柱穴が多く、柱痕跡は棟通りの柱穴で確認したのみである。方向は、棟通りでみると北で1度58分東に偏している。桁行については、棟通りでみると総長6.42m、柱間は、東側柱列でみると中央の2間が南より約1.6m・約1.3mである。梁行については約4.2mと推定される。

【S B1126】 桁行4間以上、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。南半部の地山面で発見した。南東隅の柱穴は検出できず、さらに北妻は調査区外にある。3基の柱穴で柱痕跡を確認した。S I1114、S K1144と重複しており、S I1114より新しく、S K1144より古い。方向は、西側柱列でみると、北で約2度東に偏している。桁行については、西側柱列で総長約6.5m以上、柱間は、南より2.44m・約2.2m・約1.9m以上である。梁行については、南妻から1間目の柱でみると約4.3mである。柱穴はおおむね円形であり、

【S B1127】 桁行2間以上、梁行1間の南北棟掘立柱建物跡である。南半部の地山面で発見した。南妻は後世の溝によって破壊されている。3基の柱穴で柱痕跡を確認した。方向は、北妻でみると東で約1度南に偏している。桁行柱間は、西側柱列で約1.7m、東側柱列で2.05mであり、梁行については北妻で4.73mである。



第42図 S B1111・1126・1127模式図

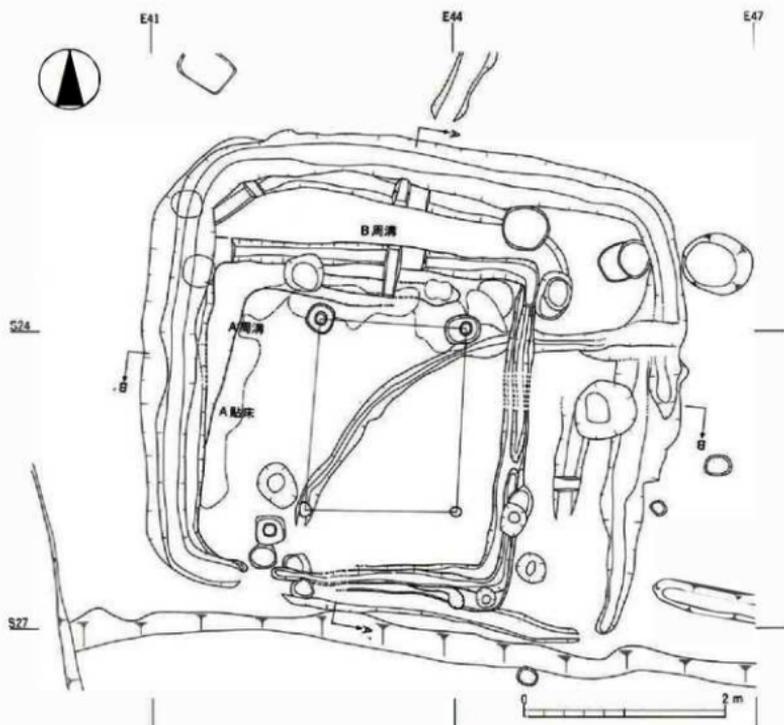
(2) 竪穴住居跡

調査区北半部で2棟、南半部で2棟、合計4棟発見した。北半部の2棟は残存状態が悪く、床面付近をかろうじて残すのみであるが南半部の2棟については残存状態は比較的良好であった。

【S I 1113】 調査区南半部で発見した竪穴住居跡である。同位置で4時期の変遷があり（A→B→C→D期）、B期とD期はさらに3小期に細分することができる。以下、古い順に説明する。

S I 1113A 北周溝と西周溝の一部を確認した。西周溝際には褐色土の貼床が見られる（A貼床）、ほとんどの部分は地山をそのまま床面としている。周溝は、幅約16cm、深さ約8cmである。

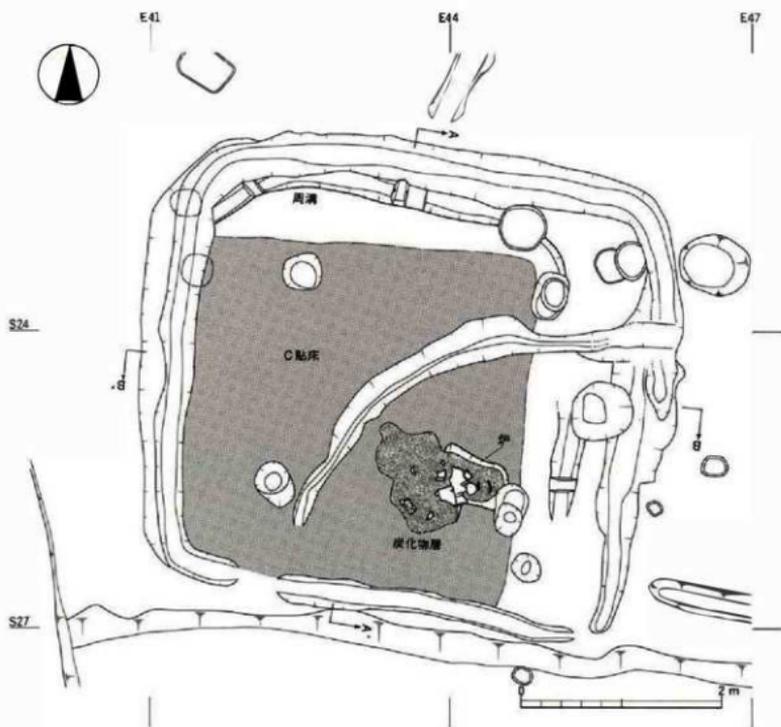
S I 1113B 周溝および支柱穴を検出し、ほぼ全体を検出した。西周溝はB期の周溝で大きく破壊されているが、それ以外はおおよそ検出した。A期の遺構とは西辺と北辺の周溝が重複しており、それらの外側に拡張している状況が確認できる。床面は、A期と同様に地山を直接床面としている。周溝には3時期の重複が見られるが（a 1・a 2→b）、平面的に確認できたのは東辺と南辺の東半部のみである。周溝の



第43図 S I 1113A・B平面図

幅は、最も広い部分でみると、a 1期は15cm以上、a 2期は20cm以上、b期は20cmである。主柱穴はやや東辺よりの位置に4基検出した。南西隅の柱穴はD期の暗渠で、南東隅の柱穴はC期の炉とそれぞれ重複し、底面付近を残すのみである。それぞれの柱間は、北西・北東間1.44m、南西・南東間約1.5m、南西・北西間約1.9m、南東・北東間約1.8mである。

S I 1113C 北辺周溝と炉を検出した。床面は、B期の遺構をすべて埋めて整地したにおい黄褐色土の貼床であり(C貼床)、北辺付近は地山のままである。周溝は、西辺がD期の周溝によって完全に被壊されており、北辺も一部削り取られている。北東隅から南側にかけては残存状態が悪い。規模は、最も良好な部分で幅25cm以上であり、深さは12cmである。南東隅よりに炉がある。東西65cm、南北80cmの範囲を洩く掘り窪めたものであり、西側を除く三方は壁の立ち上がりが確認され、北壁は火を受けて赤褐色を呈していた。底面からその西側にかけては炭化物層の堆積が認められた。その広がり北壁および南壁の西端部から西側約70cmの範囲に及んでいる。



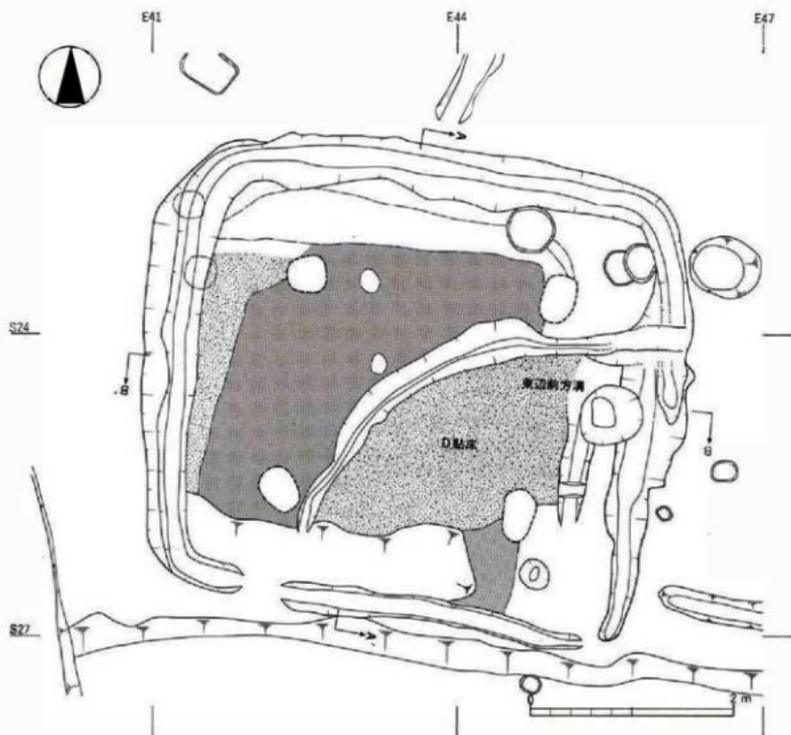
第44図 S I 1113C平面図

遺物は、炉の炭化物層上から土師器甕と平瓦が出土した。土師器甕は口縁部と体部が出土しており、体部には縦方向のヘラケズリがみられる。口縁部は厚減しているがログロ調整とみられる。平瓦はII B類である。

S I 1113D C期の遺構の上面をいよ黄褐色土の貼床(D貼床)で覆い、四方に大きく拡張したものである。この段階の遺構としては周溝①・②、住居内暗渠、焼土土壌、東辺前方溝、主柱穴などがある。これらの新旧関係について、東辺付近を中心に整理すると、周溝①・東辺前方溝→焼土土壌→炭化物層→周溝②・暗渠となる。周溝の重複から少なくとも2時期あり、それらに挟まれる土壌の存在から3小期(a・b・c)に区分される。

D a期：西辺と東辺の周溝、および東辺前方溝を検出した。規模は、D c期とほぼ同様と推定されるが、東辺は中心で約0.3m内側となっており、やや小規模であった可能性がある。

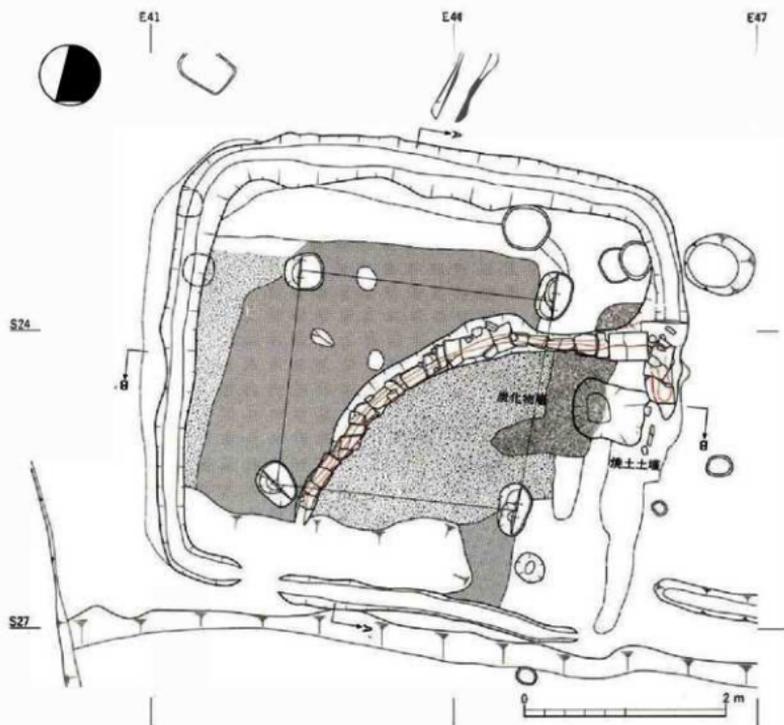
D b期：D a期の周溝埋土および東辺前方溝の埋土上面から掘り込まれた焼土土壌1基を検出した。その



第45図 S I 1113D a 平面図

上面は薄い炭化物層によって西半分が覆われている。土壌は、平面形がおおよそ長方形であり、規模は、長辺約0.7m、短辺約0.6m、深さ16cmである。壁は、東側が緩やかに立ち上がる形状である。埋土は炭化物や焼土を多量に含むに濃い黄褐色土である。

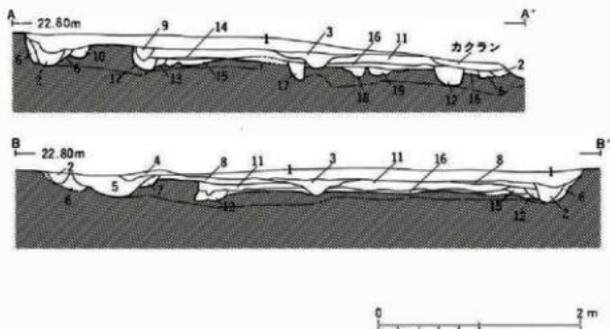
D c 期：最も新しい段階のものである。南西隅の一部が攪乱によって削平されている。平面形は東西にやや長い長方形であり、規模は、東西約5.2m、南北約4.8mである。方向は、北壁で見ると東で約8度南に偏しており、西壁で見ると北で約5度北に偏している。床面はほぼ平坦であるが、東壁付近が若干高くなっている。壁の残存高は北壁12cm、西壁14cmであり、南壁は削平されている。周溝は各辺を巡っているが、東辺については北側2/3までしかみられない。幅は最も広い部分で55cm、最も狭い部分で27cmである。また、北東隅から南へ約1.4mの地点から、南西隅に向けて緩やかに屈曲する溝が設けられている。上幅は、一定せず、最も広い部分で43cm、最も狭い部分で16cmである。底面は南側に向かって傾斜しており、東辺周溝との連結点と南端部との比高差は約10cmである。この溝と、東辺周溝の南端部から北に0.8~1.5mの



第46図 S1113D c 平面図

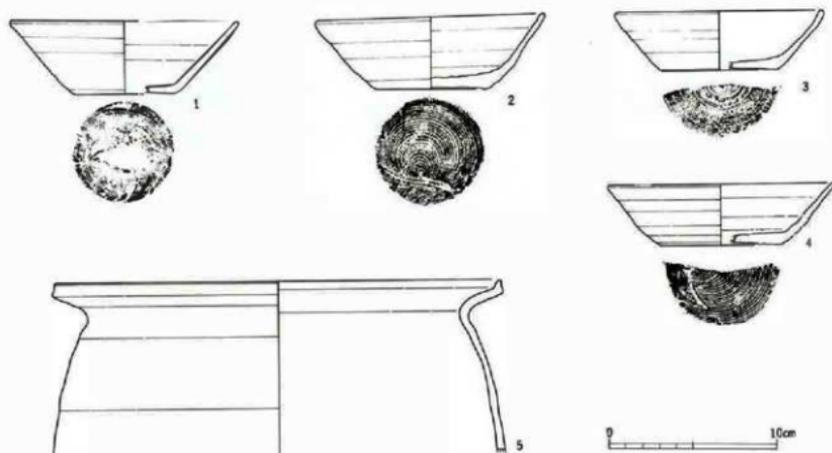
範囲は瓦で蓋をした暗渠となっている。蓋となっている瓦はいずれも破片であり、大きさも一定でないがおおよそ密接して並べられている。主柱穴は対角線上で4基確認している。いずれも抜き取られており柱痕跡は確認できない。柱穴底面に残された柱の当り痕跡から、それぞれの柱間は北西・北東間約2.5m、南西・南東間約2.4m、南西・北西間約2.1m、南東・北東間約2.3mである。

遺物は、床面から須恵器杯、周溝から土師器甕と須恵器杯が出土している。床面出土の須恵器杯はほぼ完形に復元でき、底部は回転余切り無調整である。周溝から出土した須恵器杯のうち底部の切り離しが明らかなのは、回転余切り無調整2点、ヘラ切り1点である。また、暗渠の蓋となっている瓦には平瓦と丸瓦とがあり、平瓦がほとんどである。平瓦にはⅠA・ⅡA・ⅡB類があり、ⅡB類が圧倒的に多い(第49～54図)。互いに接合するものが多くみられた。



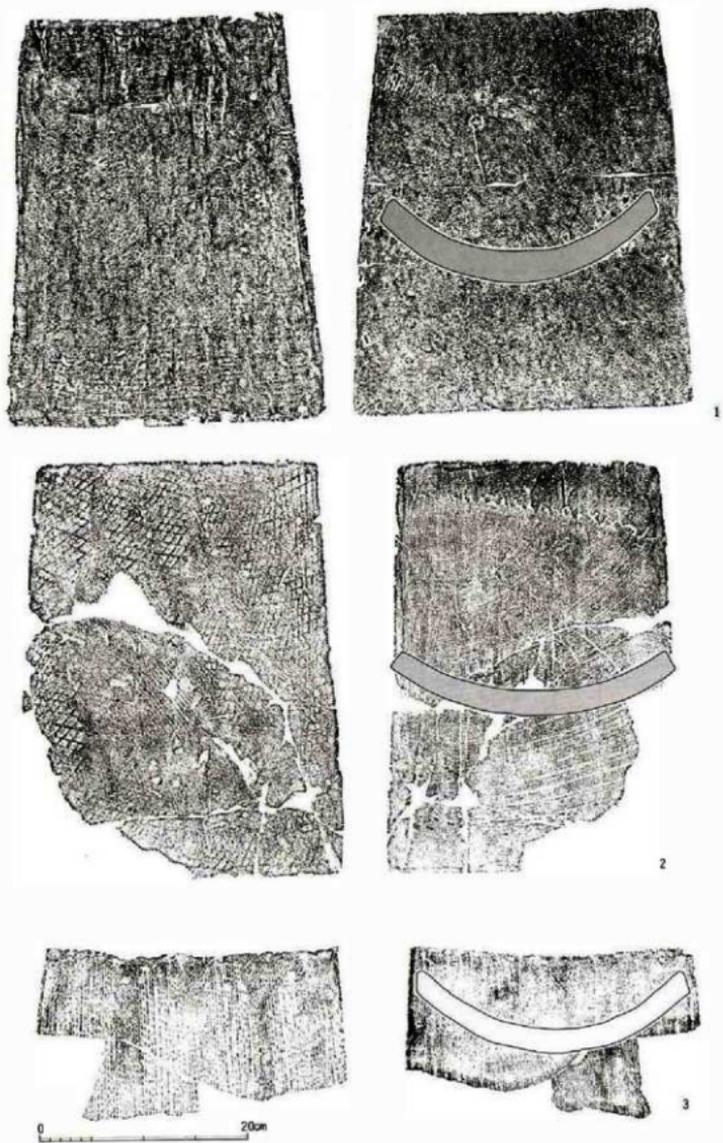
番号	土性・土色など	備考
1	にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土	D埋土
2	にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土	Db周溝埋土
3	にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土	Db暗渠埋土
4	黒褐色(10YR2/3)粘質土。炭化物を多く含む	Db焼土土壤炭化物層
5	にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土。焼土を多く含む	Db焼土土壤埋土
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土。地山ブロックを含む	Da周溝埋土
7	にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土	Da東辺前方溝埋土
8	にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土。黄褐色土粒を含む	D貼床
9	にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土	ビット
10	にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土	C周溝
11	にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土	C貼床
12	にぶい黄褐色(10YR6/6)砂質土	B周溝
13	にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土	B周溝
14		B床面上焼土
15	にぶい黄褐色(10YR7/4)砂質土。地山ブロックを含む	B貼床
16	褐色(10YR4/4)砂質土	A貼床
17	明黄褐色(10YR5/8)砂質土	ビット
18	黄褐色(10YR5/6)砂質土	ビット
19	明黄褐色(10YR8/8)砂質土	ビット

第47図 S I 1113断面図



第48図 S | 1113出土遺物(1)

番号	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号
1	須恵器・杯	周溝C 1層	【外面】 ロクロナデ・回転糸切り 【内面】 ロクロナデ	13.7	6.6	4.4	R(12)-3
2	須恵器・杯	2層	【外面】 ロクロナデ・回転糸切り 【内面】 ロクロナデ	13.7	6.5	4.3	R02-10
3	須恵器・杯	周溝C 1層	【外面】 ロクロナデ・ヘラ切り 【内面】 ロクロナデ	(12.4)	3.6	(6.8)	R02-13
4	須恵器・杯	周溝D 1層	【外面】 ロクロナデ・回転糸切り 【内面】 ロクロナデ	(13.5)	3.7	(7.2)	R02-12
5	土師器・甕	カマド内 No4	【外面】 ロクロナデ 【内面】 ロクロナデ	(21.5)			R(12)-73



第49図 S I 1113出土遺物(2)

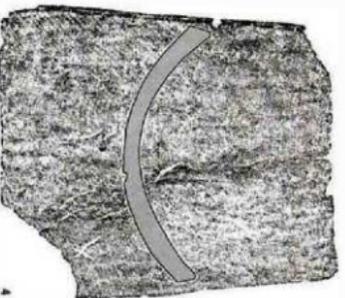
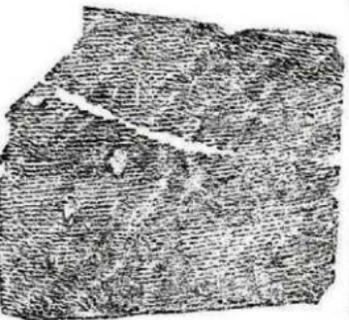
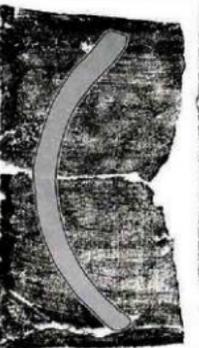
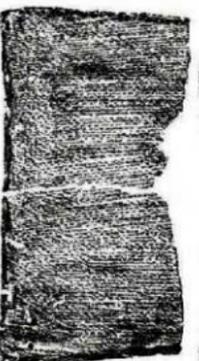
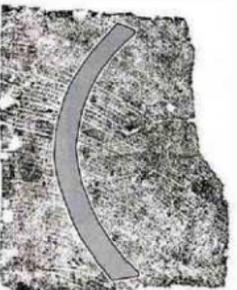
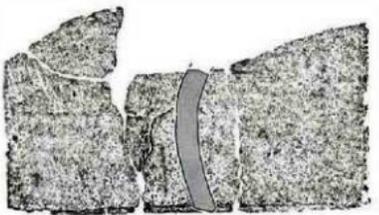
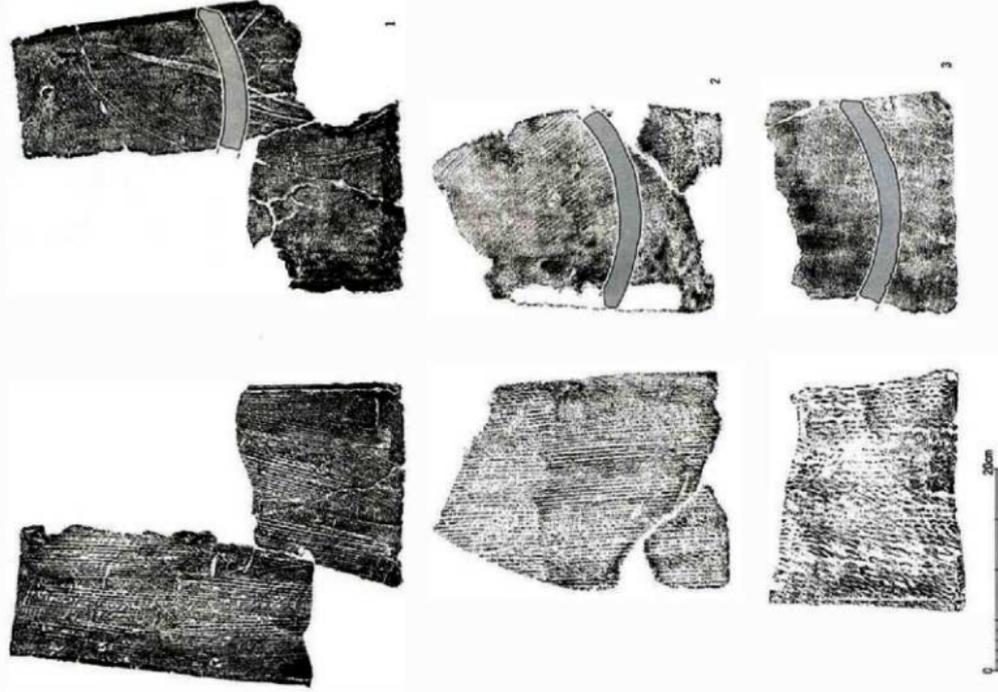
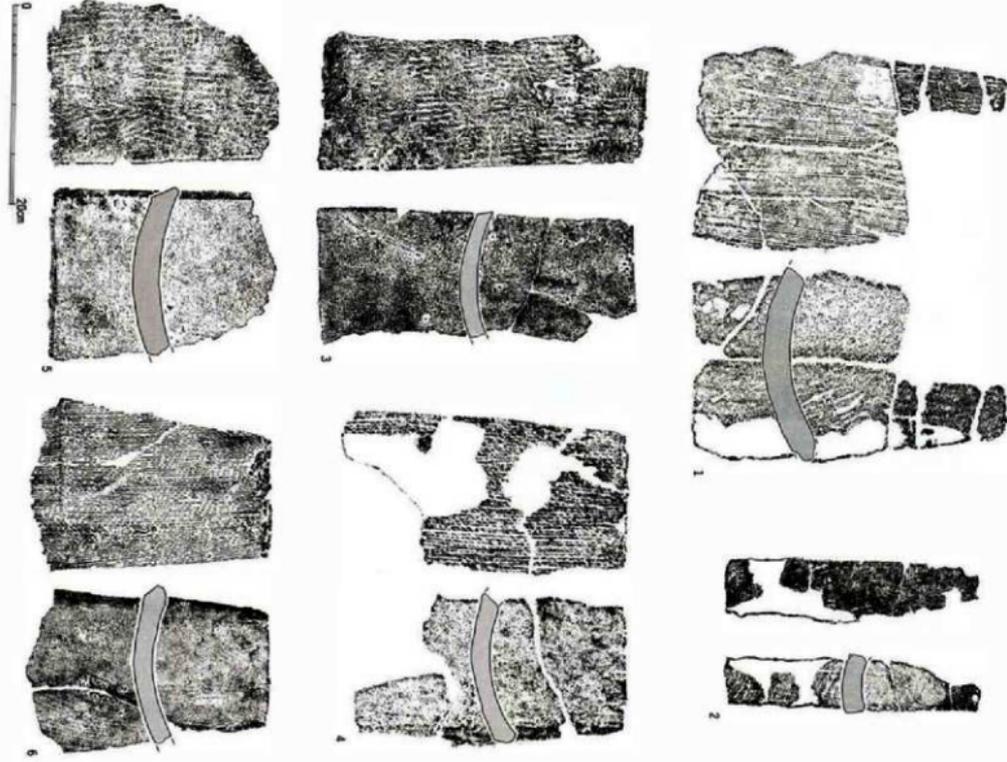


图50图 S1113粘土薄层(C)



第51圖 S 1113出土遺物(4)

图 25 第 5113 号土简 S



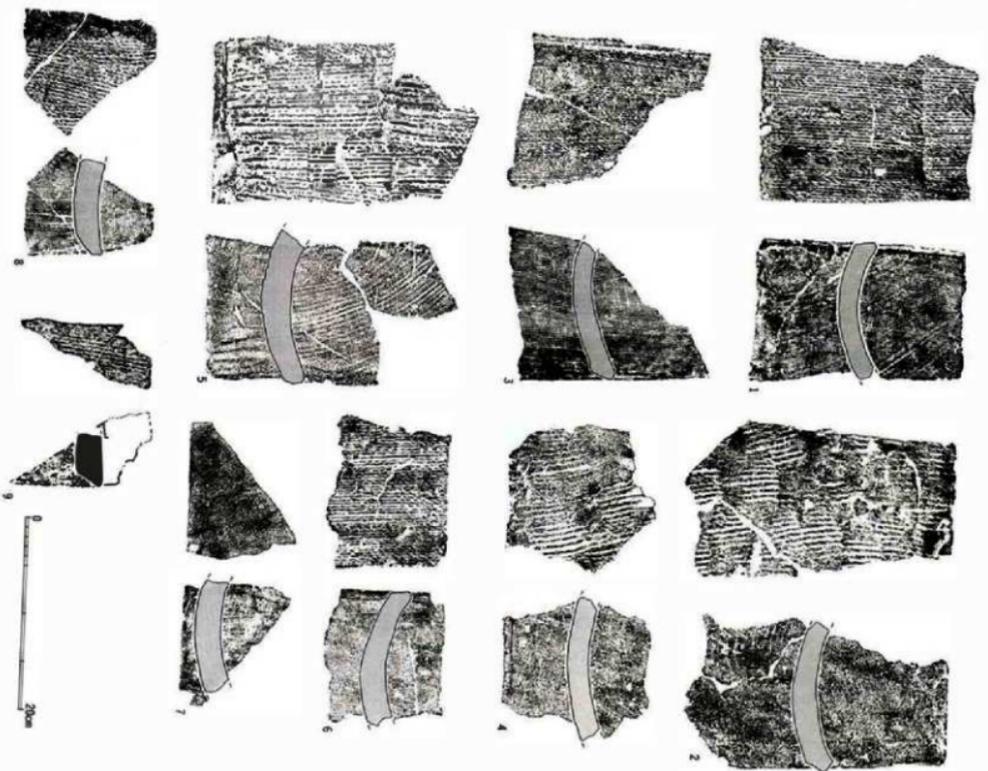
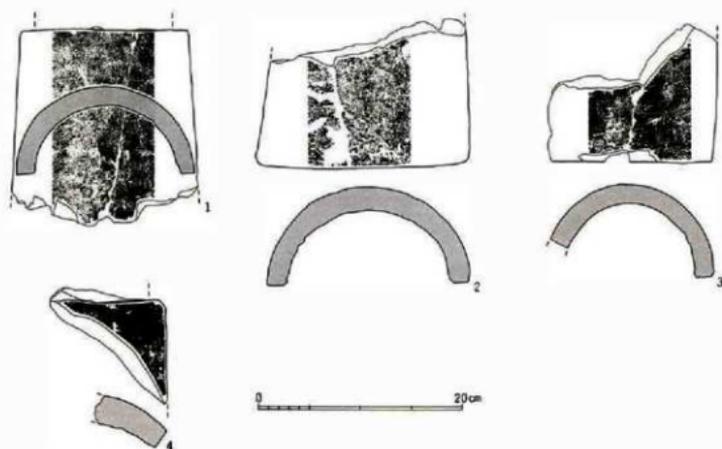


圖53 蘇 1113出土遺物(9)



図版 番号	種類	層位	特徴	取り上げ 部位	登録番号
49-1	平瓦 IA類	D期暗渠	【凹面】 布目→ナデ→凸型台圧痕 【凸面】 布目→ナデ	38	R02-148
49-2	平瓦 IIA類	D期暗渠	【凹面】 色切り痕→布目（一枚布） 【凸面】 糸切り痕→縄叩き目	41	R02-137
49-3	平瓦 IIB-b類	D期暗渠	【凹面】 糸切り痕→布目→ナデ 【凸面】 縄叩き目（つぶれ気味）	37	R02-134
50-1	平瓦 IIB-b類	D期暗渠	【凹面】 糸切り痕→布目→ナデ 【凸面】 縄叩き目（つぶれ気味）→調整台圧痕	4・8・30	R02-114
50-2	平瓦 IIB類	D期暗渠	【凹面】 糸切り痕→布目→ナデ 【凸面】 糸切り痕→ナデ	29	R02-128
50-3	平瓦 IIB-b類	D期暗渠	【凹面】 布目→ナデ 【凸面】 糸切り痕→縄叩き目（つぶれ気味）	3・9	R02-113
50-4	平瓦 IIB類	D期暗渠	【凹面】 糸切り痕→布目→ナデ 【凸面】 縄叩き目（つぶれ気味）	31	R02-129
51-1	平瓦 IIB-b類	D期暗渠	【凹面】 糸切り痕→布目→ナデ 【凸面】 糸切り痕→縄叩き目（つぶれ気味）	1・24	R02-111

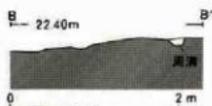
第54図 S11113出土遺物(7)

図版 番号	種類	層数	特徴	取り上げNo	登録番号
51-2	平瓦 IIA類	D期暗渠	【凹面】糸切り痕→布目（一枚布） 【凸面】縄叩き目→ナデ	40	R02-136
51-3	平瓦 IIB類	D期暗渠	【凹面】糸切り痕→布目→ナデ 【凸面】縄叩き目（つぶれ気味）	36	R02-133
52-1	平瓦 IIB類	D期暗渠	【凹面】布目→ナデ 【凸面】縄叩き目（つぶれ気味）	9・20	R02-119
52-2	丸瓦 II類	D期暗渠	【凸面】ロクロナデ 【凹面】粘土紐痕→布目	49	R02-140
52-3	平瓦 IIB類	D期暗渠	【凹面】布目→ナデ 【凸面】縄叩き目（つぶれ気味）	12・23・44	R02-121
52-4	平瓦 IIB-b類	D期暗渠	【凹面】摩滅のため不明 【凸面】縄叩き目（つぶれ気味）	21	R02-147
52-5	平瓦 IIB-b類	D期暗渠	【凹面】布目→ナデ 【凸面】縄叩き目（つぶれ気味）→調整台圧痕	18	R02-124
52-6	平瓦 IIB-b類	D期暗渠	【凹面】糸切り痕→布目→ナデ 【凸面】縄叩き目（つぶれ気味）	13	R02-122
53-1	平瓦 IIB-b類	D期暗渠	【凹面】糸切り痕→布目→ナデ 【凸面】縄叩き目（つぶれ気味）	7	R02-117
53-2	平瓦 IIB類	C期 炉	【凹面】糸切り痕→布目→ナデ 【凸面】縄叩き目（つぶれ気味）	7	R02-118
53-3	平瓦 IIB-b類	C期 炉	【凹面】布目→ナデ 【凸面】縄叩き目（つぶれ気味）	6	R02-116
53-4	平瓦 IIB類	D期暗渠	【凹面】布目→ナデ 【凸面】糸切り痕→縄叩き目（つぶれ気味）	35	R02-132
53-5	平瓦 IIB類	D期暗渠	【凹面】糸切り痕→布目→ナデ 【凸面】縄叩き目（つぶれ気味）	22・25	R02-125
53-6	平瓦 IIA類	D期暗渠	【凹面】布目（一枚布） 【凸面】縄叩き目→ナデ	2	R02-112
53-7	平瓦 IIA類	D期暗渠	【凹面】布目→ナデ→凸型台圧痕 【凸面】ナデ	27	R02-126
53-8	平瓦 IIB類	D期暗渠	【凹面】布目→ナデ 【凸面】縄叩き目（つぶれ気味）	39	R02-135
53-9	平瓦 IIB類	D期暗渠	【凹面】摩滅のため不明 【凸面】縄叩き目（つぶれ気味）	48	R02-139
54-1	丸瓦 IIB類	D期暗渠	【凸面】縄叩き目→ロクロナデ 【凹面】粘土紐痕→布目	32	R02-130
54-2	丸瓦 II類	D期暗渠	【凸面】ロクロナデ 【凹面】粘土紐痕→布目	5	R02-115
54-3	丸瓦 II類	D期暗渠	【凸面】縄叩き目→ロクロナデ 【凹面】粘土紐痕→布目	34	R02-131
54-4	丸瓦 IIB類	D期暗渠	【凸面】ロクロナデ 【凹面】粘土紐痕→布目	46	R02-141

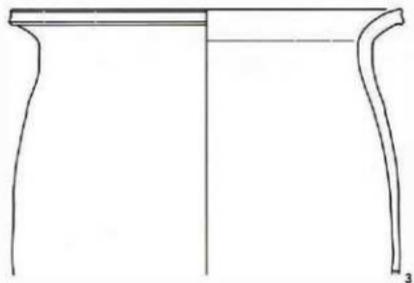
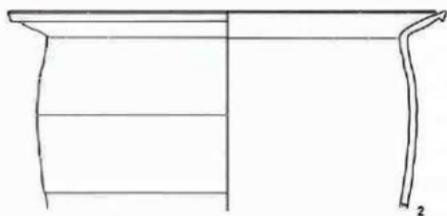
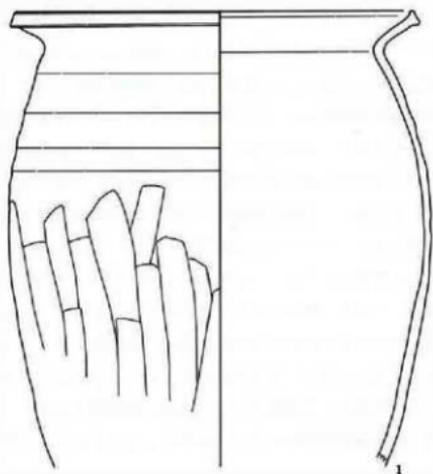
【S I 1114】南半部の地山面で発見した竪穴住居跡である。東辺が現代の溝によって破壊されているが、それ以外はおおよそ全体を検出した。平面形は、やや南辺が広いもののおおよそ方形であり、規模は、南北6.9m、東西は北辺付近で5.1m以上、5.6m以下であり、南辺付近では6.0m以上である。方向についてみると、北辺は東で約2度南に偏しており、西辺は北で約5度東に偏している。床面はおおよそ平坦であり、岩盤のブロックを多量に含む黄褐色土による貼床が見られる。貼床は北半部では薄いが、南半部では9cm以上である。周溝は、破壊されている東辺をのぞく各辺で検出し、南西隅から延びる外延溝も確認した。周溝の幅は、最も広い部分で40cm、最も狭い部分で20cmである。西辺では壁が大きく外側に入り込んでいる部分もある。深さは、北東隅→北西隅→南西隅→外延溝また南東隅→南西隅→外延溝の順に深くなっている。北辺のほぼ中央部にはカマドがある。両側壁が残存し、煙道も検出した。カマドは、周溝に瓦で蓋をして暗渠とし、その上に構築されている。暗渠となっているのは東西約1.2mの範囲であり、カマドが構築されている範囲とほぼ一致する。煙道部は長さ0.9m、幅26～34cmであり、底面はカマド本体に向かって傾斜しており、北端部と南端部との比高差は9cmである。煙道部南端とカマド本体の奥壁にも丸瓦を組み合わせた暗渠状の施設がある。これは、丸瓦の凸面を上にし、互いの玉縁を密接して据えたもので、奥壁に立てられた丸瓦は周溝の底面に、煙道部のものも底面に直接据えられている。また、カマド後方には東西1.1m以上、南北約0.3m、深さ約20cmのテラスがある。カマドに関わる何らかの施設である可能性がある。

遺物は、床面から土師器甕・鉢、須恵器杯、カマド内から土師器甕、須恵器杯、煙道から土師器甕、周溝から土師器甕、須恵器杯・瓶、埋土からも土師器杯・甕、須恵器杯、赤焼き土器杯・鉢などが出土している。土師器甕は調整が明らかかなものはすべてクロ調整である。土師器鉢もクロ調整を行ったものである。カマド内出土の須恵器杯は底部がへら切りである。施設の一部に転用されている瓦には平瓦3点（I A類2点、II B類1点）と軒丸瓦1点、丸瓦2点（II B類）がある。軒丸瓦は瓦当面が剝離している。丸瓦の内1点には玉縁部凸面に「富田」のへら書きがある。赤焼き土器は埋土1層から数点出土しているのみでそれより下層には含まれていない。

【S I 1123】S I 1114の下層で発見した竪穴住居跡である。S I 1114の貼床に覆われ、地山面上で検出した。残存状態はきわめて悪く、北辺と東辺一部の周溝を残すのみである。規模は、東西3.6m以上、南北1.7m以上である。方向は、北辺でみるとおおよそ発掘基準線に一致している。周溝は幅17～26cmであり、底面は、地形の沿って南側に傾斜している。遺物は出土していない。



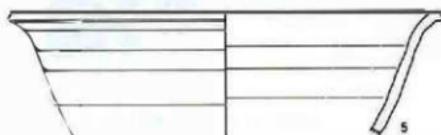
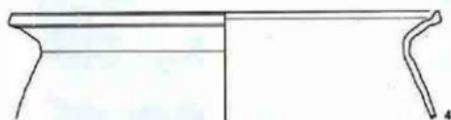
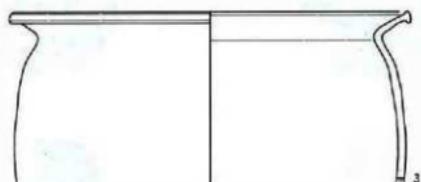
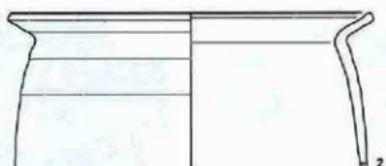
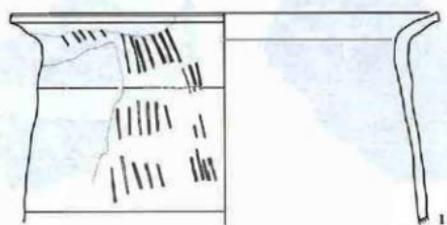
第55図 S I 1123断面図



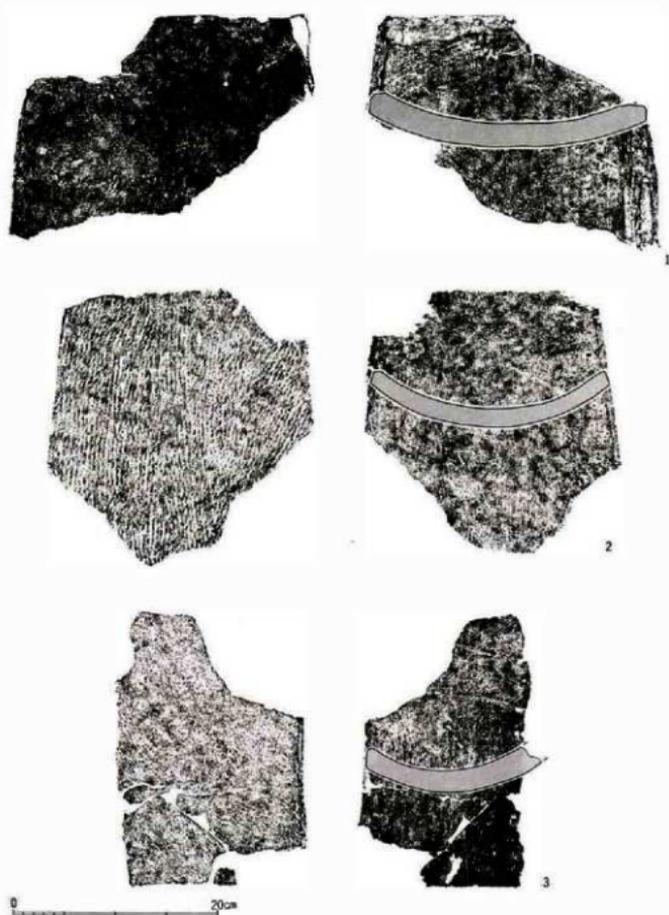
第56図 S / 1114出土遺物(1)



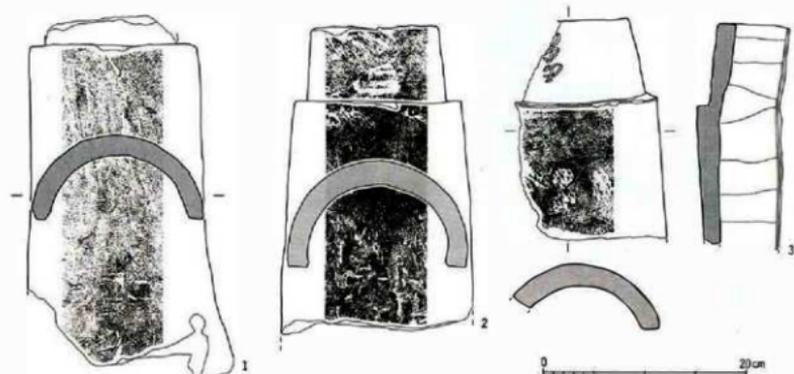
第57図 S1114平面図・断面図、S1123平面図



第58図 S I 1114出土遺物(2)



第59回 S I 1114出土遺物(3)



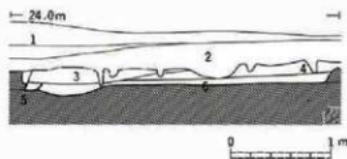
番号	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	平面図No	登録番号
56-1	土師器・甕	カマド内	【外面】 ロクロナデ→ヘラケズリ 【内面】 ロクロナデ・ナデ	(23.5)			6	R02-58
56-2	土師器・甕	煙道	【外面】 ロクロナデ 【内面】 ロクロナデ	(25.9)			13	R02-74
56-3	土師器・甕	周溝	【外面】 ロクロナデ 【内面】 ロクロナデ	(23.2)			12	R02-69
58-1	土師器・甕	カマド内	【外面】 平行叩き→ロクロナデ 【内面】 ロクロナデ	(25.5)			1	R02-70
58-2	土師器・甕	カマド内	【外面】 ロクロナデ 【内面】 ロクロナデ	(23.3)				R02-75
58-3	土師器・甕	2層	【外面】 ロクロナデ 【内面】 ロクロナデ	(26.6)				R02-71
58-4	土師器・甕	周溝	【外面】 ロクロナデ 【内面】 ロクロナデ	(25.4)				R02-72
58-5	土師器・鉢	床面	【外面】 ロクロナデ 【内面】 ロクロナデ	(25.6)				R02-76
番号	種類	層位	特徴			平面図No	登録番号	
59-1	平瓦 I A類		【凹面】 糸切り痕→布目→ナデ→凸型台圧痕 【凸面】 布目→ナデ			5	R02-143	
59-2	平瓦 II B類		【凹面】 糸切り痕→布目→ナデ 【凸面】 縄叩き目(つぶれ気味)→調整台圧痕			10	R02-146	
59-3	平瓦 I A類		【凹面】 糸切り痕→布目→ナデ→凸型台圧痕 【凸面】 縄叩き目→ナデ			6	R02-144	
60-1	軒丸瓦 II B類		【凸面】 ロクロナデ→ヘラケズリ 【凹面】 粘土紐痕→布目			9	R02-145	
60-2	丸瓦 II B類		【凸面】 縄叩き目→ロクロナデ 【凹面】 粘土紐痕→布目			2	R02-142	
60-3	丸瓦 II B類		【凸面】 縄叩き目→ロクロナデ、ヘラ書き「富田」 【凹面】 粘土紐痕→布目			3	R02-8	

第60図 S I 1114出土遺物(4)



第61図 S I 1114出土遺跡⑤

【S I 1135】北半部の地山面で発見した竪穴住居跡である。東辺と北辺の周溝の一部を検出した。平面形はおおよそ方形と推定され、規模は、東辺1.1m以上、北辺1.8m以上である。方向は、北辺で見ると、東で約34度南に偏している。周溝の幅は、最も広い部分で24cmである。調査区南壁の断面観察によると、岩盤のブロックを多量に含む厚さ6～10cmの黄色土があり、貼床と見られる。その上面には炭化物層があり、それらを覆って焼土や炭化物を含む黄褐色土の堆積が見られた。



第62図 S I 1135断面図

番号	土性・土色など	備考
1		盛土
2	におい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土	表土
3	黄褐色土 (10YR5/6) 粘質土	竪穴住居より新しい土壌?
4	黄褐色 (10YR5/6) 粘質土	住居内埋土
5	黄褐色 (2.5YR5/4) 粘質土	周溝埋土
6	黄色 (2.5YR8/6) 地山細粒を多量に含む	掘方埋土

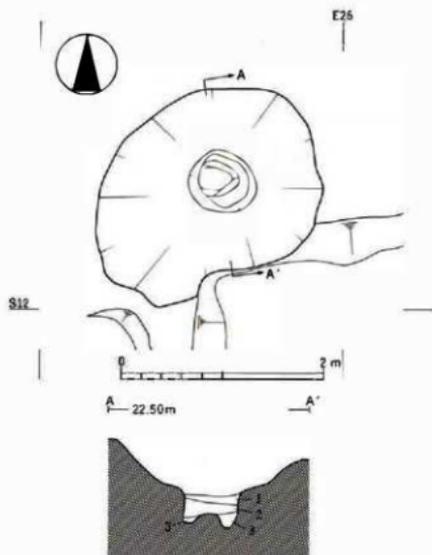
【S I 1136】北半部の地山面で発見した竪穴住居跡である。北辺と東辺の一部を確認した。平面形はおおよそ方形であり、規模は、東西2.3m以上、南北2.0m以上である。

(3) 井戸跡

今回の調査で1基発見した。

【SE1115】調査区中央部の地山面で発見した素掘りの井戸跡である。平面形は楕円形であり、上半分は槽鉢状にくぼみ、下半分は円筒状に落ち込んだ形状である。規模は、上半分は長径2.5m、短径1.9mであり、下半分は径約0.7mで、深さは0.9mである。埋土は、上半分はやや粘性を帯びた暗褐色であり、下半分の上にはオリブ黒色の粘質土が堆積している。最下層は締まりのない砂質土である。

遺物は、1層からカワラケ、2層からカグが出土している。カワラケは底部の破片である(第65図)。粘土紐巻き上げ成形の後、ロクロ調整されており、底部には回転糸切り痕がある。



番号	土性・土色など	備考
1	黒色 (5Y3/1) 粘土	井戸内埋土
2	オリブ黒色 (5Y3/1) 粘土	井戸内埋土
3	オリブ灰色 (10Y4/2) 粘質土。しまりなし	井戸内埋土

第63図 SE1115平面図・断面図



第64図 SE1115遺物出土状況



第65図 SE1115出土遺物

種類	層位	特徴	底径	登録番号
かわらけ	1層	【外面】 ロクロナデ 【内面】 ロクロナデ 底部：回転糸切り	6.0	R02-172

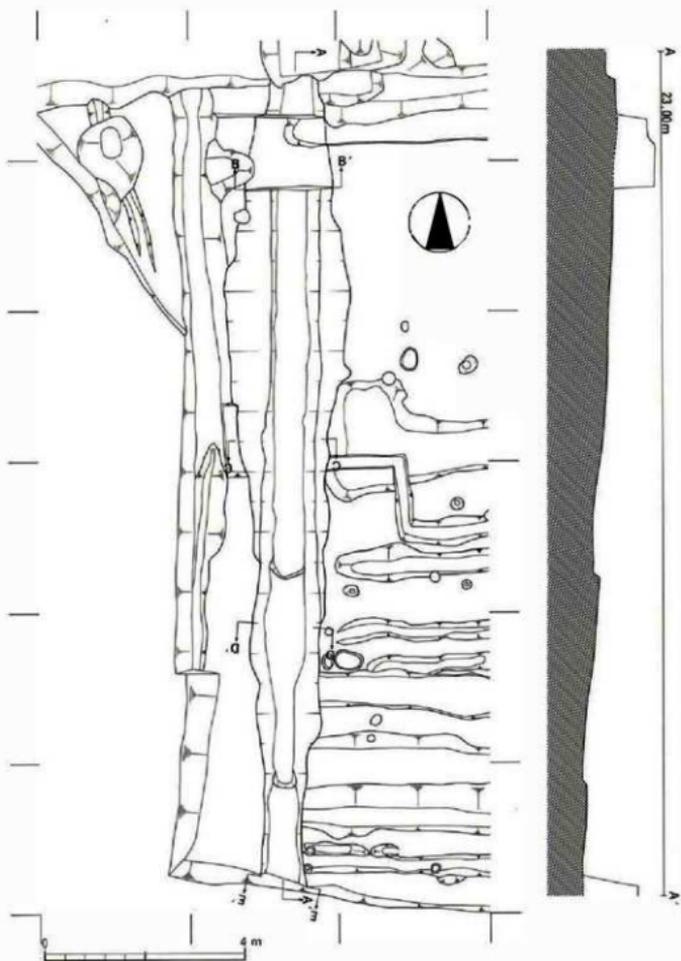
(4) 溝跡

調査区全体で多数発見されている。

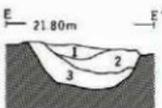
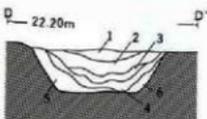
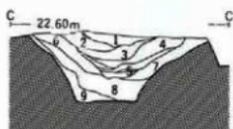
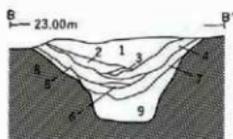
【SD1120】調査区北端部の地山面で発見した東西溝である。東西ともに調査区外に延びており、東側の第14次調査ではその延長部分を検出している。規模は、幅1.3～1.5m、深さ11～32cmである。底面は、今回の調査区東壁から約6mの地点に段があり、わずかに立ち上がっているが、全体的には東側から西側に向かって傾斜しており、調査区西端部と第14次調査区東端部でみると、比高差は約25cmである。埋土は黄褐色砂質土を主体とし、自然に埋没したような状況である。

【SD1130・1150】調査区南半部の地山面で発見した南北溝である。北側は大規模な攪乱で破壊されている。その北側延長線上で発見したSD1150は規模、埋土の状況が極めて類似している。同一の遺構とみて一括して取り扱う。SD1130は赤焼き土器を含むSK1145と重複しており、それより古い。それぞれ調査区外にさらに延びている。方向は、SD1130の南端部とSD1150のほぼ中央部で計測すると、北で1度30分度東に偏している。規模は、最も残存状況が良好な部分で、幅約2.6m、深さ約0.9mである。SD1130についてみると、ほぼ中央部と南壁よりそれぞれ段がつくが、全体的には南側に向かって傾斜しており、SD1130の南端部とSD1150のほぼ中央部で計測すると比高差は143cmである。埋土は、上層は暗褐色土やぶい黄褐色土、下層は明黄褐色土が主体であり、両側から流れ込んだような状況であり、自然堆積と見られる。

遺物は、上層から土師器杯・甕、須恵器杯・高台杯・蓋・瓶・鉢・甕、下層からも土師器杯・甕、須恵器杯・甕などが出土しており、上層から多く出土している。上層出土資料についてみると、土師器杯は調整が明らかなのはほとんどないが、ロクロ調整したものが1点確認された。土師器甕は調整が明らかなのはすべてロクロ調整である。須恵器杯底部の切り離しが明らかなのが20点あり、その内訳は回転糸切り2点、静止糸切り1点、ヘラ切り14点、切り離し後手持ちヘラケズリ2点、不明1点となっている。ヘラ切りが圧倒的に多い。高台杯は底部が糸切りのものとヘラ切りのものがそれぞれ1点出土している。下層出土資料についてみると、土師器杯は特徴的な部分がほとんどない。土師器甕はロクロ調整のもの、ハケメの見られるものが出土している。須恵器杯は切り離しが明らかなのはいずれもヘラ切りである。なお、検出時に赤焼き土器が数点出土しているが、確実に埋土から出土したものはない。



第66圖 SD 1130平面圖



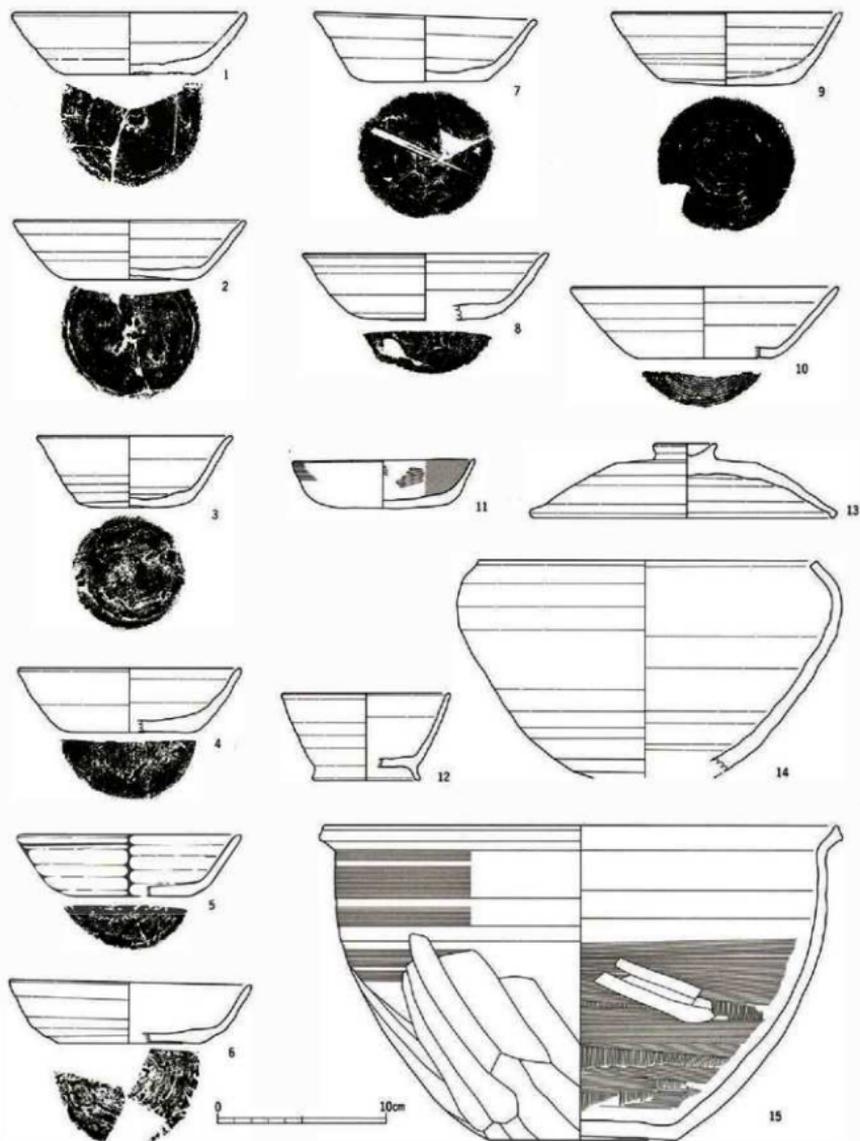
番号	土性・土色	備考
1	暗褐色 (10YR3/4) 粘質土。炭化物を含む	1層
2	暗黄褐色 (10YR6/6) 粘質土。炭化物を含む	
3	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土。炭化物を含む	
4	黄褐色 (10YR5/6) 粘質土。炭化物を含む。地山細粒を多量に含む	
5	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土。炭化物を含む	2層
6	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土。炭化物を多量に含む	
7	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土。地山細粒を多量に含む	
8	明黄褐色 (10YR6/8) 粘質土	3層
9	明黄褐色 (10YR6/8) 粘質土。地山細粒を多量に含む	

番号	土性・土色	備考
1	黄褐色 (10YR5/6) 粘質土。炭化物を含む	1層
2	黄褐色 (10YR5/6) 粘質土。炭化物を含む	
3	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土。炭化物を含む	
4	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土。炭化物を含む	
5	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土。炭化物を含む	2層
6	黄褐色 (10YR5/6) 砂質土。地山細粒をわずかに含む	
7	明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土。地山細粒を多量に含む	
8	黄褐色 (10YR7/8) 砂質土。地山細粒を含む	3層
9	黄褐色 (10YR7/8) 砂質土。地山細粒を多量に含む	

番号	土性・土色	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土	1層
2	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土	
3	明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土。地山細粒を多量に含む	2層
4	明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土。地山細粒をわずかに含む	
5	明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土。地山細粒を多量に含む	3層
6	明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土。地山細粒を多量に含む	

番号	土性・土色	備考
1	黄褐色 (10YR5/6) 粘質土。地山細粒を含む	2層
2	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土。地山細粒を含む	
3	明黄褐色 (10YR6/8) 粘質土。地山細粒を多量に含む	3層

第67図 SD1130断面図



第68图 S D1130・1150出土遗物

番号	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号
1	須恵器・杯	1層	[外面] ロクロナデ 底部：ヘラ切り、ヘラ記号「一」 [内面] ロクロナデ	(13.9)	7.7	3.7	R02-39
2	須恵器・杯	1層	[外面] ロクロナデ 底部：ヘラ切り [内面] ロクロナデ	(13.8)	6.8	3.6	R02-37
3	須恵器・杯	1層	[外面] ロクロナデ、油埋付着 底部：ヘラ切り [内面] ロクロナデ、油埋付着	11.6		4.4	R02-35
4	須恵器・杯	1層	[外面] ロクロナデ 底部：ヘラ切り [内面] ロクロナデ	(13.2)	(6.8)	3.9	R02-36
5	須恵器・杯	1層	[外面] ロクロナデ 底部：ヘラ切り [内面] ロクロナデ	(13.4)	(6.6)	3.7	R02-45
6	須恵器・杯	1層	[外面] ロクロナデ 底部：ヘラ切り [内面] ロクロナデ	14.5	6.3	3.7	R02-43
7	須恵器・杯	1層	[外面] ロクロナデ 底部：ヘラ切り、ヘラ記号「一」 [内面] ロクロナデ	13.3	7.2	4.0	R02-5
8	須恵器・杯	1層	[外面] ロクロナデ 底部：ヘラ切り→手持ちヘラケズリ [内面] ロクロナデ	(14.6)	(8.0)	4.0	R02-42
9	須恵器・杯	2層	[外面] ロクロナデ 底部：ヘラ切り [内面] ロクロナデ	(13.6)		4.4	R02-38
10	須恵器・杯	1層	[外面] ロクロナデ 底部：糸切り [内面] ロクロナデ	(15.9)	(7.8)	4.3	R02-40
11	土師器・杯	2層	[外面] ココナデ、油埋付着 [内面] ヘラミガキ・黒色処理、油埋付着	10.8		2.9	R02-4
12	須恵器・高台杯	1層	[外面] ロクロナデ 底部：糸切り [内面] ロクロナデ	(10.0)	(6.4)	5.3	R02-41
13	須恵器・蓋	1層	[外面] ロクロナデ→回転ヘラケズリ [内面] ロクロナデ	17.7		4.5	R02-2
14	須恵器・鉢	2層	[外面] ロクロナデ→回転ヘラケズリ [内面] ロクロナデ	20.0			R02-7
15	須恵器・甕	1層	[外面] ロクロナデ→手持ちヘラケズリ [内面] ハケメ→カキメ	30.4	10.9	19.0	R02-6

(第68図 SD1130・1150出土遺物)

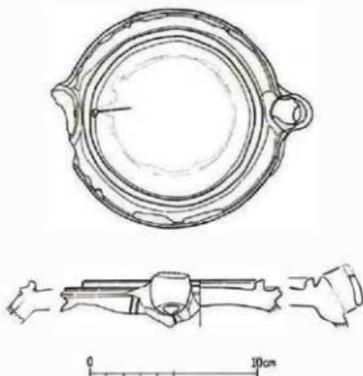
表2 SD1130・1150出土土器集計表

[数字は単位点数]

種類	器種	部位	調整	SD 1130		SD1150	合計	
				1層	2・3層	1層		
土師器	杯	口縁部	ロクロ調整			1	1	
			不明	2	2	3	7	
		体部		5		10	15	
			回転ヘラケズリ			1	1	
		底部	手持ちヘラケズリ			2	2	
			ロクロ	1			1	
	高台杯	底部	不明	3			3	
				1			1	
	甕	口縁部	ロクロ調整	4	1		5	
			不明	2		7	9	
		体部	ロクロ調整	8	1	6	15	
			ハケメ		1		1	
		底部	ヘラケズリ・不明	80	17	64	161	
			糸切り	1			1	
		不明		2			2	
				1			1	
須恵器	杯	口縁部		12		3	15	
				10	4	2	16	
		体部		1			1	
			静止糸切り	2			2	
		底部	手持ちヘラケズリ	2			2	
			ヘラ切り	14	2	6	22	
	回転糸切り		2			2		
	不明		2			2		
	高台杯	底部	ヘラ切り	1			1	
			糸切り	1			1	
			不明		1			1
					1			1
		甕	口縁部	8		10	18	
			体部	67	13	21	101	
	蓋	底部	2	2		4		
		口縁部	2			2		
	甕	口縁部	1	1		2		
		体部	5		1	6		
その他						52	52	
合計				292	44	137	473	

【SD1146】調査区南半部で発見した南北溝である。南側は土壌などによって蔽われており、約3.5m検出したのみである。方向は、北で約14度東に偏している。幅は35～55cmであり、深さは約25cmである。

遺物は、円面硯が1点出土している。脚部を欠いているが、硯部はおおよそ残存しており、内縁がある。硯部の裏面にはロクロナダによる凹凸が残っている。脚部にはヘラ描きの文様があるが判然としない。直線による縦方向のもの、曲線によるものなどがある。また、この硯の特徴的なものとして、対の位置に、筒状と小型の皿状の部品がついている。いずれも硯部の縁から脚部にかけて貼りつけられている。前者については、内法が径8～12mmで上端部は広く、下端部が狭い。筆立ての可能性などが考えられよう。小型の皿状の部分については全容が不明であるが、硯面と皿状部分の両方から径4.5mmの円孔を穿っているが貫通していない。硯面は、中央部を中心に著しい磨耗痕が観察される。

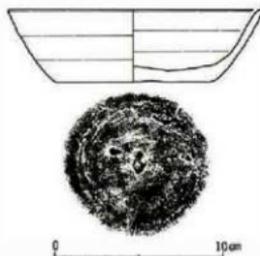


種類	特徴	硯面径	硯部径	登録番号
円面硯	【外面】ヘラ描き文様 【内面】ロクロナダ	9.7	13.3	R2-1

第69図 SD1146出土遺物

【SD1149】調査区北半部の地山面で発見した「」字形の溝である。S B1112・1116・1117・1118と重複しているが新旧関係は不明である。規模は、東西方向が約1.8m、南北方向が約2.6mであり、幅は15～30cm、深さは約5cmである。

遺物は須恵器杯が出土した。底部の切り離しはヘラ切りである。

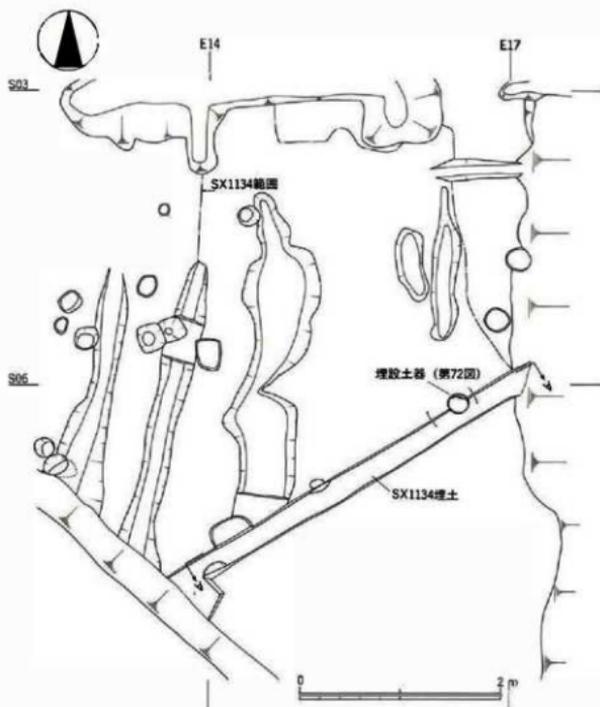


種類	特徴	口径	硯面径	硯部径	登録番号
須恵器・杯	【外面】ロクロナダ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナダ	(16.0)	9.0	4.4	R2-9

第70図 SD1149出土遺物

(5) 土器埋設遺構

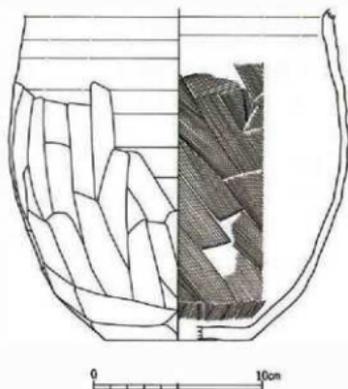
【SX1140】調査区北半部で発見した土器埋設遺構である。不整形の落ち込みであるSX1134の上面で検出した。径約50cmの円形の据え方の中に、土師器甕を直立した状態で据えたものである。



1. SX1140掘方
2. ビット
3. SX1134埋土
4. 土壌

第71図 SX1140平面図・断面図

土師器甕は体部と底部が残存しており、口縁部は失われていた。体部はロクロ調整後、下半部を縦方向にヘラケズリしている。



種類	特徴	口径	底径	器高	登録番号
土師器・甕	【外面】ロクロナデ→ヘラケズリ 【内面】ヘラナデ		(8.6)		R02-157

第72図 S X 114出土遺物

(6) その他の出土遺物

表土など遺構外より多くの土器、瓦、近世以降の陶磁器などが出土した。第73図3は底部に「十四文」の墨書がある施釉陶器小皿である。また、古代の遺構埋土より縄文時代と推定される石鏃が出土した。該期の遺構は発見していないが、周辺に存在した可能性があらう。



番号	遺構・層位	種類	特徴	口径	底径	器高	登録番号
1	南地区南半部 第1層	施釉陶器小皿	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸 切り。墨書「十四文」 【内面】鉄釉		3.1		R02-161
番号	遺構・層位	種類	特徴	長さ	幅	厚さ	登録番号
2	S 1 1113貼床	石鏃	頁岩	(3.1)	(1.6)	●.4	R02-165
3	S D 1120 2層	石鏃	基部欠損 頁岩	(2.2)	1.5	0.3	R02-164

第73図 その他の出土遺物

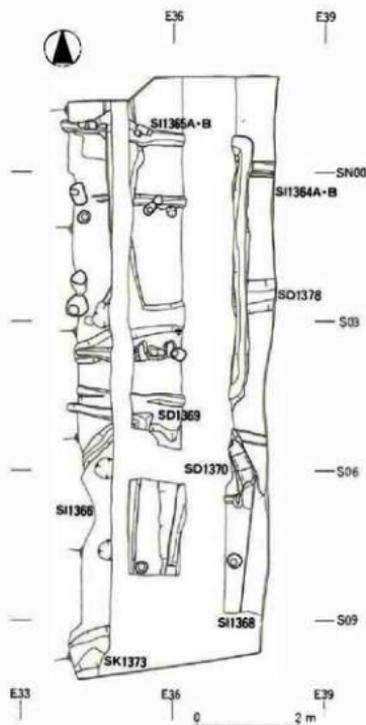
5. 発見した遺構と遺物 3 —第21次調査—

竪穴住居跡 4 軒、土壇 1 基、溝跡 2 条を発見した。

(1) 竪穴住居跡

【S I 1365】調査区北側で発見した竪穴住居跡である。当初検出した床面を除去した後に、その内側で一回り小型の住居を検出した。これらに関しては、両者の貼床が堆積層を挟まず直接重なっていること、方向がほぼ同じであることなどから、ここでは2時期の変遷であると判断した。以下、古い住居をS I 1365 A、新しい住居をS I 1365 Bとして概要を記載する。

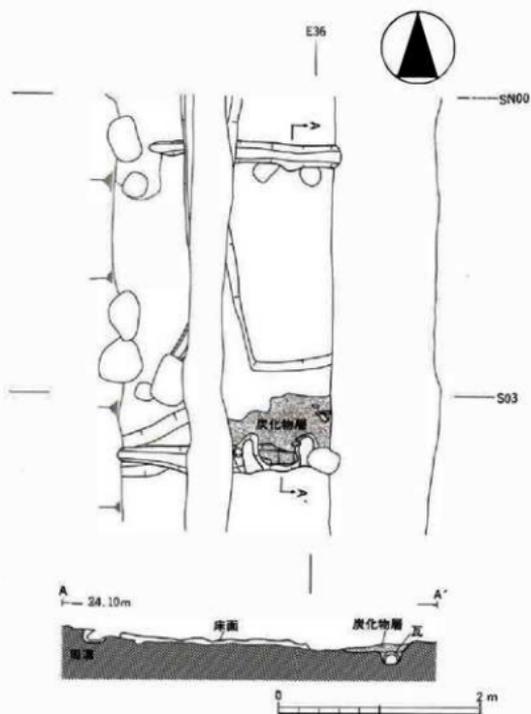
S I 1365 A 1365 B床面除去後に検出した。S 1378と重複し、それよりも古い。東辺および西辺は後世の削平によって破壊されている。平面形は残存部から推測すると、方形であったと考えられる。規模は南北約3.3m、東西2.1m以上である。方向は北辺で計ると、発掘基準線に対して西で約1度北に偏している。床面は楊灰色粘質土を2～6cm貼床している。北側で一部凹凸があるものの、概ね平坦である。カマ



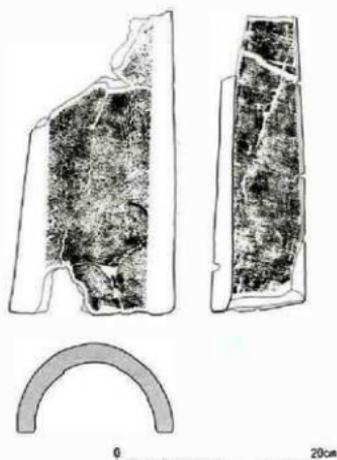
第74図 第21次調査区北半部遺構全体図

ドは南辺に付設されている。燃焼部の規模は幅30～36cm、奥行き約30cmであり、残存する側壁の高さは7～9cmである。燃焼部および側壁の下には丸瓦を暗渠状に埋設している。周溝は北辺と南辺が残存している。上幅20～24cm、下幅14～18cm、深さ8～10cmである。底面は北辺に比べて南辺の方が低く、比高差は20cmほどである。

遺物は周溝埋土より土師器甕、丸瓦、平瓦が出土している。このうち土師器では、調整が確認できるものはすべてロクロ調整のものである。丸瓦はII類と粘土板巻き作り有段丸瓦、平瓦はI A類・II B類である。



第75図 S I 1365A 平面図・断面図



番号	種類	層位	特徴	登録番号
1	丸瓦	周溝・カマド下	【凹面】糸切り→布目 【凸面】縄印き→ロクロナデ	R20-11

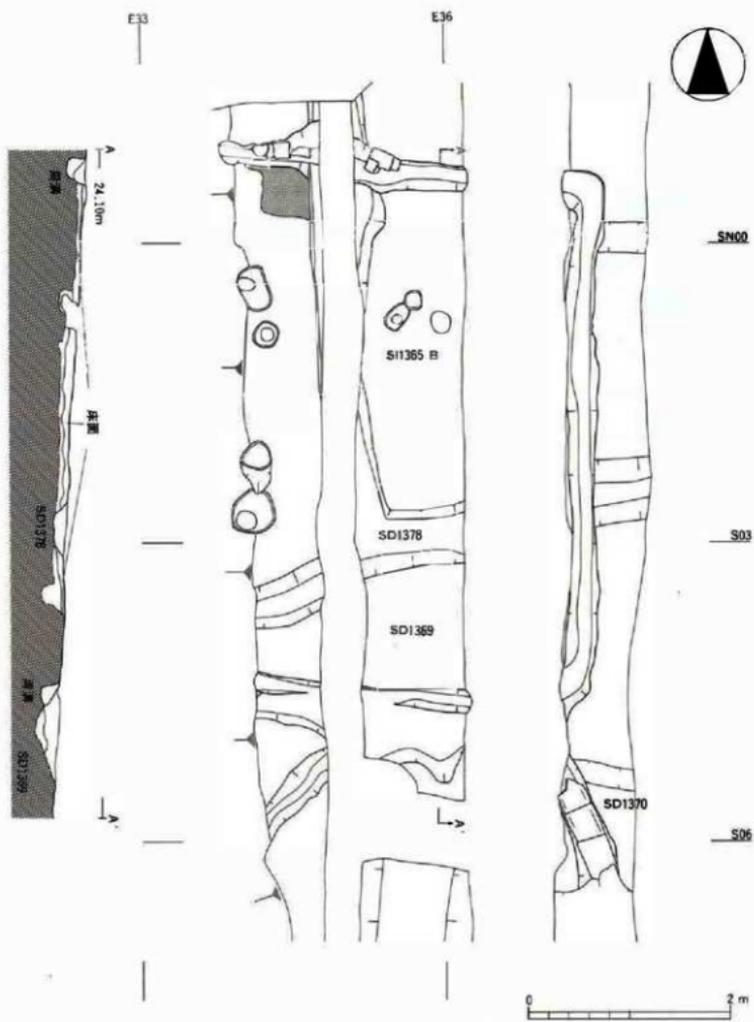
第76図 S I 1365A出土遺物

S I 1365B 周溝と床面を検出した。S I 1364、S D 1372、1378と重複し、それらよりも古い。西辺は後世の削平によって破壊されている。平面形は方形であり、規模は南北が約5.5m、東西3.8m以上である。方向は東辺で計ると、発掘基準線に対して北で約1度東に偏している。床面は明黄褐色粘質土を貼床しており、2～10cmほどが残存している。周溝は北辺・東辺・南辺で確認した。上幅24～30cm、下幅16～22cm、深さ25～30cmであり、北辺周溝内には瓦を暗集状に埋設している。底面は北辺に比べて南辺が低く、約25cmの比高差がある。カマドの位置は明らかではないが、北側で焼面を確認していることから、この付近に敷設されていた可能性が高い。

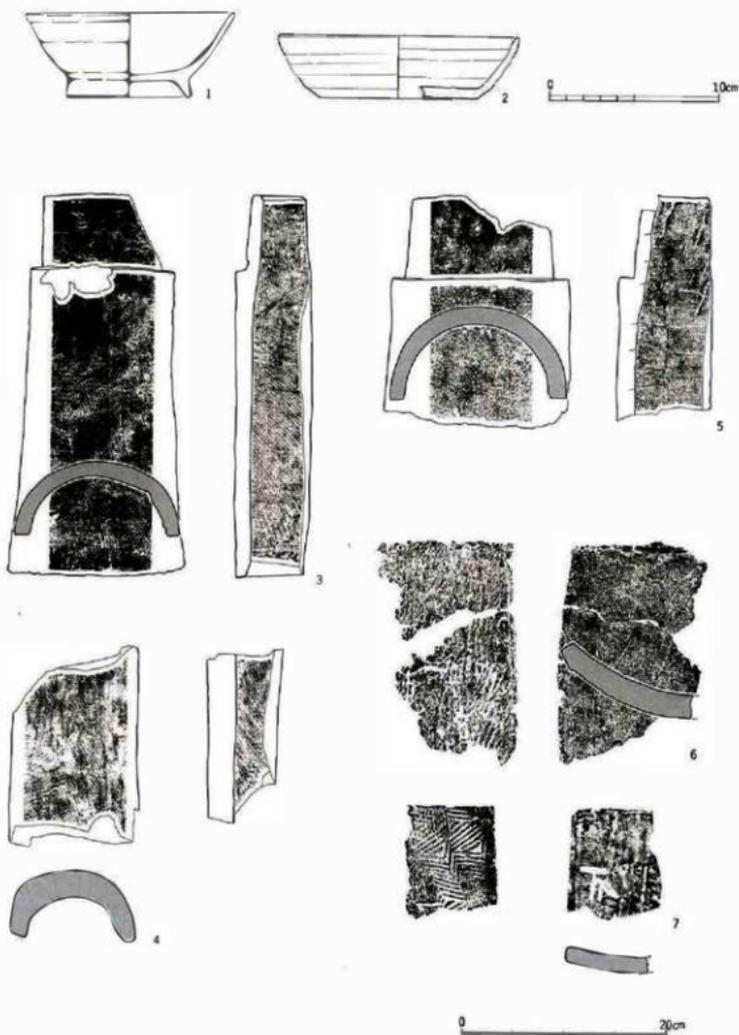
遺物は周溝埋土および貼床より土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・甕・瓶、丸瓦、平瓦が出土している。このうち土師器では、調整が確認できるものはすべてロクロ調整のものである。丸瓦はI A類・II類・II B類、粘土板巻き作り有段丸瓦、平瓦はI C類・II B類である。

【S D 1370】調査区中央部で検出した南北溝跡である。位置関係や出土した遺物から判断すると、S I 1365 Bの外延溝であると考えられる。S I 1368と重複しそれよりも古い。規模は長さ1.1m以上、上幅33～35cm、下幅20～22cm、深さ19～20cmである。溝内には凸面を上にした平瓦が伏せられて暗集となっており、底面は南側に向かって緩やかに傾斜している。

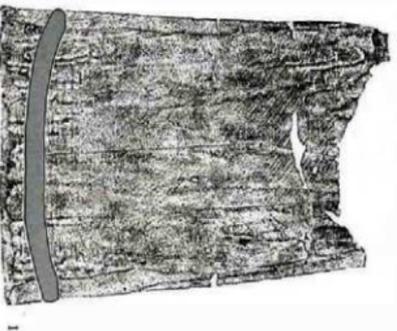
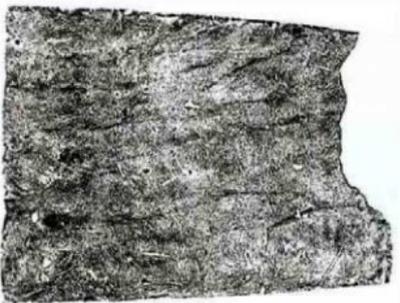
出土した平瓦はI A類・II B類である。



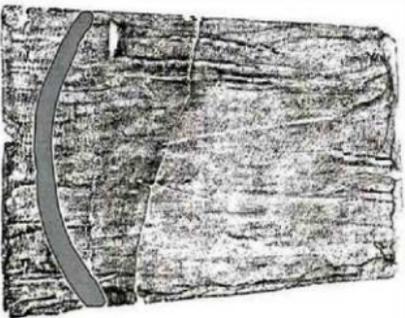
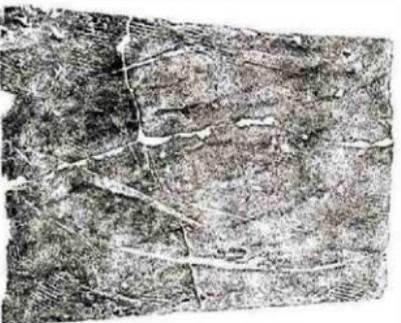
第77圖 S 11365B平面圖・断面圖



第78図 S I 1365B 出土遺物(1)

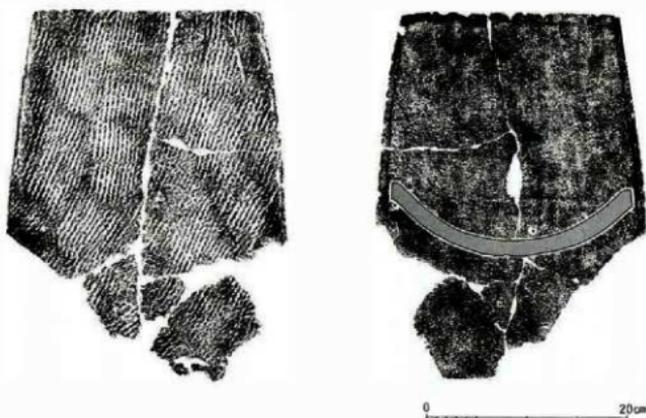


1



2

第79圖 S 1365 B出土遺物(1)

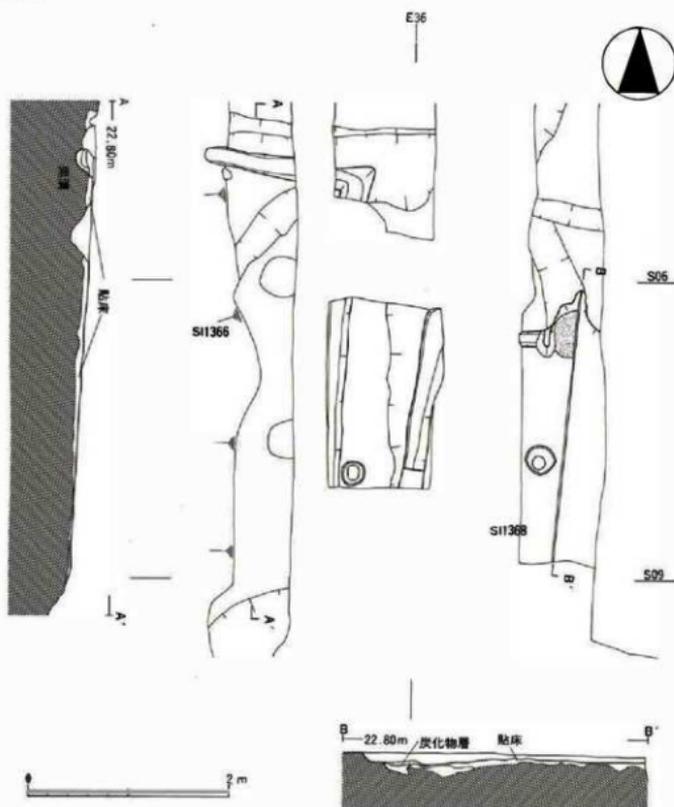


番号	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号
78-1	須恵器・高台付杯	床埋土	【外面】 ロクロナデ 【内面】 ロクロナデ	12.4	7.2	5.1	R20-44
78-2	須恵器・杯	床埋土	【外面】 ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】 ロクロナデ	14.0	9.2	3.8	R20-42
78-3	丸瓦	周溝	【凹面】 糸切り→布目 【凸面】 縄叩き→ロクロナデ				R20-10
78-4	丸瓦・I A-c	周溝	【凹面】 糸切り→布目の重複 【凸面】 平行叩き（第2次叩き）→ヘラケズリ				R20-14
78-5	丸瓦・IIB-a	周溝	【凹面】 粘土皸痕、布目 【凸面】 縄叩き→ロクロナデ				R20-12
78-6	平瓦・IIB	周溝	【凹面】 布目→ナデ 【凸面】 縄叩き→叩き目のつぶれ				R20-28
78-7	平瓦・I C-a	周溝	【凹面】 布目、「下下」の除刻文字 【凸面】 縄叩き（第1次叩き）→矢羽根状叩き（第2次叩き）				R20-27
79-1	平瓦・I A-a	1層	【凹面】 糸切り→布目→ナデ 【凸面】 縄叩き→第2次布目→ナデ				R20-22
79-2	平瓦・I A-a	1層	【凹面】 糸切り→布目→ナデ 【凸面】 縄叩き→第2次布目→ナデ				R20-23
80	平瓦・IIB-b	1層	【凹面】 布目→ナデ 【凸面】 縄叩き→叩き目のつぶれ、側端部に凹型台圧痕				R20-24

第80図 S I 1365 B 出土遺物(3)

【S I 1368】調査区中央部で検出した竪穴住居跡である。S D 1370と重複し、それよりも新しい。一部を検出したにすぎないため、全体の規模については明らかでない。方向は西辺で計ると、発掘基準線に対して北で約11度東に偏している。堆積土は3層に細分することができ、第2層に炭化物が多量に混入している。床面は灰黄色粘質土を2～7cm貼床しており、南側に向かって緩やかに傾斜している。カマドは北辺に付設されている。燃焼部の規模は奥行きが約42cmであり、残存する壁高は約8cmである。周溝は北辺および西辺で確認している。上幅20～25cm、下幅12～22cm、深さ8～18cmである。底面は南側に向かって傾斜しており、比高差は約10cmである。

遺物は住居内埋土および床埋土から土師器甕、須恵器杯・高台付杯・甕・瓶、丸瓦、平瓦が出土している。このうち土師器では、調整が確認できるものはすべてロクロ調整のものである。丸瓦はII B類、平瓦はI A類である。



第81図 S I 1366・1368平面図・断面図



番号	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号
1	須恵器・杯	床埋土	【外面】ロクロナデ 底部：へう切り 【内面】ロクロナデ	14.6	7.1	4.1	R120-43
2	須恵器・杯	床埋土	【外面】ロクロナデ 底部：へう切り 【内面】ロクロナデ		8.4		R120-45

第82図 S I 1368出土遺物

【S I 1366】調査区中央部で検出した竪穴住居跡である。S D 1378、S K 1373と重複し、それよりも古い。住居の大半が後世の削平を受けているため、規模については明らかでない。方向は東辺で計ると、発掘基準線に対して北で約9度東に偏している。床面は黒褐色粘質土を貼床しており、6cmほどが残存している。周溝は東辺と北辺で確認している。上幅20～30cm、下幅12～14cm、深さ10～12cmである。底面レベルは北側から南側に向かって傾斜しており、比高差は約20cmである。

遺物は周溝埋土および貼床から土師器杯・甕、須恵器杯・甕・長頸瓶が出土している。このうち土師器では、調整が確認できるものはすべてロクロ調整のものである。

【S I 1364】調査区北側で検出した竪穴住居跡である。S I 1365、S D 1378と重複し、前者よりも新しく、後者よりも古い。北辺周溝および床面に2時期の変遷があり、古い住居がS I 1364A、新しい住居がS I 1364Bである。

S I 1364A 床面と北辺周溝の一部が僅かに残存するのみであり、規模等については不明である。方向は北辺で計ると、発掘基準線に対して西で約2度北に偏している。床面は暗褐色粘質土を貼床している。周溝は上幅22～26cm、下幅12～15cm、深さ10～14cmである。

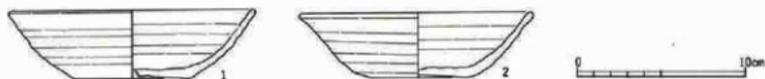
遺物は貼床より土師器杯・甕、須恵器杯・甕・杯蓋・瓶が出土している。このうち土師器では、調整が確認できるものはすべてロクロ調整のものである。

S I 1364B 床面と北側周溝の一部が僅かに残存するのみであり、規模等については不明である。方向は北辺で計ると、発掘基準線に対して西で約5度北に偏している。床面は灰黄褐色粘質土を貼床している。周溝は上幅16～20cm、下幅8～10cm、深さ12～14cmである。

出土遺物はない。

【S K 1373】調査区南側で検出した土壌である。S I 1366と重複し、それよりも新しい。規模は長径80cm以上、短径75cm、深さ22～26cmである。埋土は1層のみである。褐灰色粘質土を主体とし、明黄褐色土がブロック状に混入多量に混入している。

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。



番号	種類	層位	特徴	口径	底径	器高	登録番号
1	須恵器・杯	埋土	【外面】 ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】 ロクロナデ	14.3	(7.0)	4.2	R00-47
2	須恵器・杯	埋土	【外面】 ロクロナデ 底部：回転糸切り 【内面】 ロクロナデ	13.9	5.9	4.0	R00-46

第83図 SK1373出土遺物

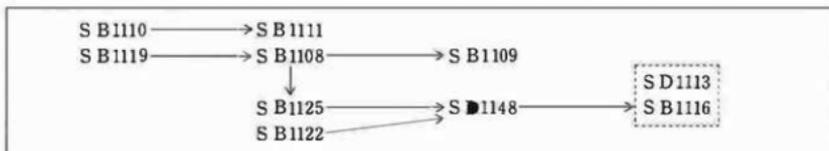
5. 遺構の性格と年代

今回の調査で発見した遺構は、掘立柱建物跡15棟、竪穴住居跡9軒、溝跡11条、井戸跡1基、土器埋設遺構2基などである。以下、(1)掘立柱建物跡、(2)竪穴住居跡、(3)溝跡、(4)井戸跡について年代を検討し、最後にそれらの性格について考える。

(1)掘立柱建物跡の年代

南地区北半部で発見した建物跡については次のとおり新旧関係を把握した。

これらの柱穴の形態・規模、埋土、方向についてみると次の3群に分類することができる。



第84図 掘立柱建物跡の重複関係

- 柱穴が一辺40～80cmの方形で、埋土は地山土が主体。方向は北で西に偏す。
..... S B 1110
- 柱穴が一辺50cm以下の方形および楕円形で、埋土は褐色砂質土が主体。方向は発掘基準線とほぼ一致。
..... S B 1111・1108・1109・1119・1122・1125
- 柱穴が径15～25cmの円形で、埋土は暗褐色砂質土が主体。方向は、北で東に偏す。
..... S B 1116・1117・1118

これらの新旧関係は、第84図で示したように、a→b、b→cであり、a→b→cの関係が成り立つ。最も古いS B 1110は平瓦ⅡB-b類と丸瓦ⅡB類を礎盤としており、そのうち平瓦ⅡB-b類は多賀城政庁第Ⅲ期に伴うものであることからき世紀末が年代の上限となる。

b・c群の年代については、柱穴から出土している遺物がすべて古代の遺物であり、中世以降の遺構との関係がほとんど把握できないなど手がかりがほとんどない。柱穴の規模はa群と比較して小規模であり、必ずしも方形を基調としていない点は中世以降の建物跡と共通しているようにも見受けられる。特に、c群のS B 1116は、柱穴が円形で小規模であり、横通りにも柱穴が設けられているなど構造的にもほかの建物跡とは異なっている。しかし、b群についてみれば、建物の構造は一般的な切妻形式の側柱建物であり、柱間もさほどばらつきがなく、a群のS B 1110と比較的近いものが見られる。最も古いS B 1119の柱痕跡から、須恵器杯がほぼ完全な状態で出土していることなども、b群の年代を中世以降まで年代を下げる根拠にはなりえないように思われる。b群と同様な様相をもつ建物群は市川橋遺跡大臣宮地区(第14次調査)で発見した建物跡に類例を求めることができる(註1)。同遺跡においても具体的な年代は与えることができなかったが、周辺から出土している土器はF群土器のなかでも新しい様相を持つものであり、10世紀中葉以降の年代を推定することもできるものである。したがって、b群建物の年代については、おおよそ古代の範疇で捉えておくにとどめたい。c群についてはさらにそれより新しいことから或いは中世に入る可能性もあろう。

(2) 竪穴住居跡の年代

南地区南半部およびその北東に位置する第21次調査区において4軒の竪穴住居跡を発見した。これらの竪穴住居跡はその多くからロクロ調整された土師器が出土しており、赤焼き土器および須恵系土器の初現形態とされる杯(註2)を含むものが全く見られないことから、年代はおおよそ8世紀末から9世紀の間におさまると見ることができる。これは、多賀城跡出土土器の変遷ではB・C・D群土器に相当するものである。この時期の土器群については、近年の多賀城跡の調査において詳細な検討が行われており、①第62次調査第I群土器：8世紀末から9世紀前半、②S E2101 B第III層出土土器：9世紀前半から9世紀前半、③第62次調査第II群土器：9世紀中葉、④第61次調査第10層出土土器：9世紀後半という変遷が明らかにされている(註3)。また、暗渠に使用された平瓦と丸瓦が多く出土しており、それらの年代も竪穴住居跡の年代を推定する手がかりとなる。

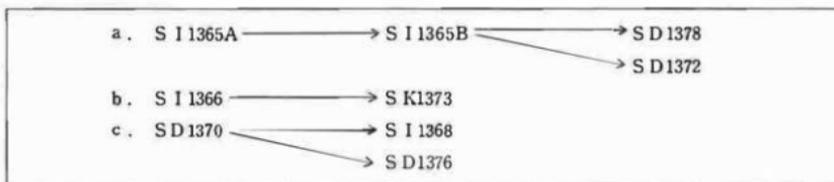
S I1113についてはA～B期の変遷があり、C期の炉とB期床面および周溝から遺物が出土している。C期の炉からは平瓦II B-1b類とロクロ調整の土師器壺が出土している。B期の床面からはほぼ完形の須恵器杯が1点出土しており、底部の切り離しは回転糸切り無調整である。周溝からも須恵器杯が出土しており、底部の切り離しは回転糸切り無調整のものが2点とヘラ切りが1点である。また、D期床面に構築された暗渠に平瓦IA・II A・II B類と丸瓦II B類が蓋として使用されている。平瓦はII B類が圧倒的に多く、II B-1b類も含まれている。

C期の年代については、ロクロ調整の土師器壺はB群土器以降に伴うものであり、平瓦II B-1b類が政庁第III期に伴うことから8世紀末を上限とすることができる。B期の年代については、資料としては少ないが、床面および周溝出土の須恵器杯が手がかりとなる。底部の切り離しについてみると、回転糸切り無調整が3点、ヘラ切りが1点である。回転糸切り無調整のものを含み、須恵系土器の初現形態とされるものを含まないというあり方は、多賀城跡第60次調査S E2101 B井戸跡第III層出土土器およびそれよりやや新しい様相が見られる第62次調査第II群土器における須恵器杯のあり方に類似している。ヘラ切りより回転糸切り無調整のものが多くに注目すれば第II群土器により近く、それよりさらに新しい可能性もある。第II群土器については9世紀中葉頃の年代が考えられているので、ここではおおよそその年代に従っておきたい。暗渠の蓋に転用されている瓦については、平瓦II B-1b類を含むものの、それより新しい形式のものも含んでいない。第61次調査の成果によれば、9世紀後半とされる第10層には須恵器杯は含まれず、須恵系土器の初現形態とされる杯を含むのが特徴である。このことから、本住居は9世紀後半頃には廃絶し、埋没していたことが推定され、それ以前の年代を与えることが妥当である。したがって、A・B期は9世紀中葉以前、C・D期は9世紀中葉頃となる。

S I1114は、床面から土師器壺・鉢、カマド内から土師器壺、須恵器杯、周溝から土師器壺が出土している。また、暗渠の蓋として平瓦IA類・II B類、丸瓦II B類が転用されている。土師器壺は、口縁部の破片で見ると6個体あり、調整が明らかなものすべてがロクロ調整を行ったものである。叩き成形痕を残すものが1点認められる。土師器鉢もロクロ調整を行ったものである。須恵器杯は底部の切り離しがヘラ切りである。これらの年代は、ロクロ調整された土師器壺の存在からB群土器以降すなわち8世紀末以降であることは確実である。さらに、ロクロ調整で叩き成形痕を残す土師器壺に注目すると、8世紀末から9世紀前半の年代が考えられている多賀城跡第63次調査第I群土器には少数含まれ、それよりやや新しい多賀城跡第60次調査S E2101 B井戸跡出土資料には全く認められないことから、本住居跡は、第I群土器

の年代に近いと考えることができる。暗渠に転用されている瓦のうち、II B類についても確実に第III期に伴うものはない。したがって、本住居跡の年代は8世紀末から9世紀前葉と推定される。

第21次調査区で発見した竪穴住居跡については次の重複関係を把握した。



第85図 竪穴住居跡の重複関係

これらの関係のうち、a群では最も古いS I 1365Aから平瓦I A類や粘土板巻き作りの有段丸瓦など政庁創建期に伴う瓦が出土しているが、貼床からロクロ調整された土師器甕が出土しており、8世紀末を過ぎることが明らかである。また、それに連続するS I 1365Bからはロクロ調整された土師器甕と政庁第III期に伴う平瓦が、さらにそれより新しいS I 1364からもロクロ調整された土師器甕が出土している。したがって、a群とした竪穴住居跡や溝跡はすべて8世紀末以降の年代が与えられる。c群では最も古いS D 1370から政庁第III期に伴う平瓦II B-b類が出土しており、8世紀末が年代の上限となる。a・c群の下限については手がかりがないが、赤焼き土器および須恵系土器の初現形態とされるものが全く出土していないことから、消極的ではあるが9世紀後半以前に廃絶し、埋没した可能性が考えられる。b群ではS I 1366からロクロ調整された土師器甕が出土している。また、それより新しいS K 1373からは底部回転系切り無調整の須恵器杯が出土している。S I 1366は8世紀末以降であり、S K 1373は回転系切り無調整の須恵器杯がほぼ完形で出土していることから確実に遺構に伴う資料と見られ、それらが主体となる第62次調査第II群土器に近い年代すなわち9世紀中葉の年代を考えておきたい。

以上のことを整理すると以下のとおりである。

S D 1370・1376	8世紀末以降
S I 1114	8世紀末～9世紀前葉
S I 1366・1368	8世紀末～9世紀中葉以前
S I 1365・1364・1372、S D 1378	8世紀末～9世紀中葉
S I 1113A・B	9世紀中葉以前
S I 1113C・D、S K 1373	9世紀中葉

(3) 溝跡の年代

S D 1130・1150南北溝とS D 1120東西溝の年代について検討する。

S D 1130・1150からは土師器杯・高台杯・甕、須恵器杯・高台杯・蓋・甕・瓶などが出土している。上層から多く出土しており、下層からは少量出土したのみである。上層出土資料についてみると、土師器杯ではロクロ調整されたものが5点あり、底部の切り離しも回転ヘラケズリが1点、手持ちヘラケズリされたものを1点確認した。土師器甕についてもロクロ調整されたものが多く認められた。須恵器杯は、底部

の切り離しが明らかなものが25点あり、その内訳は静止糸切り1点、回転糸切り2点、ヘラ切り20点、切り離し後手持ちヘラケズリ2点となっている。高台杯は底部が糸切りのものとヘラ切りのものがそれぞれ1点出土している。非ロクロ調整のものは体部外面にハケメの見られるものが1点出土している。下層出土資料についてみると、土師器壺はロクロ調整のものとハケメの見られるものが出土している。須恵器杯は、底部の切り離しが明らかなものはいずれもヘラ切りである。

上層出土の土器群についてみると、土師器壺はすべてロクロ調整を行ったものであり、須恵器杯は底部の切り離しがヘラ切りを主体とし、回転ヘラケズリ、手持ちヘラケズリ、回転糸切り無調整のものを少量含むものである。このようなあり方は多賀城跡第60次調査S E 2101 B 井戸跡第III層出土土器群に類似している。下層出土の土器は須恵器杯がすべてヘラ切りによることなど上層出土土器に共通する部分もあるが、非ロクロ調整の土師器壺の存在に注目すれば、S E 2101 B よりやや古い第62次調査第I群土器に類似しているといえる。第I土器は8世紀末から9世紀前葉、S E 2101 B は9世紀前葉から9世紀前半の年代が与えられていることから、上層土器群はおおよそ9世紀前半頃の年代が想定される。また、下層出土土器群の年代から、溝の開削時期については8世紀末頃まで遡る可能性もあると考えられる。

S D 1120については、ほとんど遺物が出土していないが、第14次調査区においてその延長部分を調査しており、既に報告を行っている(註4)。年代については、①土師器杯はロクロ調整で手持ちヘラケズリを施したものと非ロクロのものとがある。②土師器壺はすべて非ロクロ調整である。③須恵器杯はすべてヘラ切りである。④瓦は平瓦IIB-1b類など政庁第III期のものを含む、などの点から幅をもたせて8世紀末から9世紀頃と考えている。

(4)井戸跡の年代

S E 1115からはカワラケとカゴが出土している。カワラケについては底部の破片が1点出土しているのみであり、詳細な年代は不明であるがおおよそ中世のものと考えられる。したがって、井戸跡についての同様に中世の遺構と推定される。

(5)遺構の性格

今回の調査において発見した遺構は、確実に中世のものである井戸跡や、年代を限定しがたい掘立柱建物跡をのぞくと、方形の柱穴をもつS B 1110や竪穴住居跡は8世紀末から9世紀にかけての遺構である。直接これらの遺構の性格を示す資料はないが、いくつかの遺構について若干の検討を加え、本地区のあり方について考えてみたい。

はじめに、本調査区における竪穴住居跡の特徴として暗渠施設を有するものが多いことがあげられる。暗渠は、カマド下に構築されているもの(aタイプ)と、周溝から分岐して住居内を斜めに延びているもの(bタイプ)とがある。

aタイプとしてS I 1114・1365Aがある。S I 1365Bもその可能性が高い。S I 1114・1365Aは周溝の一部を暗渠とし、その上にカマド本体を構築している。周溝はカマド下を通過できるような構造になっている。S I 1114では、煙道部からカマド下の周溝に至る部分も暗渠としている。これらはいずれも平瓦と丸瓦を蓋として転用している。特に、S I 1114は周溝底面のレベルが北東→北西→南西あるいは南東→南西と傾斜しており、南西隅の外延溝に向かっている。屋内に入り込んだ雨水等が滞ることなく屋外に排水

することを考慮した構造になっている。

bタイプとしてS1113Dがある。東辺から分岐した溝が南西隅付近に向かって住居内を斜めに横切っており、両者の分岐点および斜めの溝は蓋を伴う暗渠であり、蓋には平瓦と丸瓦が転用されている。東辺前面にある焼土土壌はカマドの一部とも見られるが断定できない。内部中央を斜めに横切る溝の蓋は基本的に住居床面より高く設置されている。床面上で2箇所焼面が確認されている。

これらの暗渠をもつ竪穴住居跡については、直接性格を示すような資料は確認されていないが、bタイプの暗渠をもつ竪穴住居跡は多賀城跡大畑地区で発見されている(註5)。同地区で発見されたものからは鉄滓が出土しており、焼面を伴っていることから小鍛冶を中心とした工房と考えられており、溝は排水の便を考慮したものとして推定されている。したがって、S1113については同様の性格を推定することができよう。aタイプについては報告例がほとんどない。

ところで、瓦を竪穴住居跡の周溝等に敷き並べて暗渠としている例は多賀城跡や市川橋遺跡館前地区などで少数の報告例があるが、高崎遺跡第10次調査地区では発見した竪穴住居跡約76棟のうち、4軒以上に瓦を用いた暗渠が確認されている。同地区は多賀城廃寺の西側約150mの位置にあり、丘陵西斜面のほぼ全体から多数の竪穴住居跡と少数の掘立柱建物跡が発見され、竪穴住居跡を主体として構成されていることが明らかである。このような状況は、掘立柱建物跡を主体として構成されている多賀城南面の方格地割り内の状況とは基本的に異なっている。すべての竪穴住居跡について一概に決めることはできないが、漆紙や鉄滓が出土した竪穴住居跡も存在することから工房も存在した可能性は大きい。また、灰胎陶器瓶類が一括廃棄された竪穴住居跡もあるなど一般集落を構成するものとは考え難い。同地区は廃寺に近接していることから寺に付属した工房群と見る考えもある。今回の調査区と同地区とは、寺との位置関係、立地、遺構の構成、年代等共通点が多い。

次に、多賀城廃寺との関わりについて述べる。今回発見した遺構の広がりについては明らかではないが、調査区の南側の谷や、北地区の斜面など地形的に起伏の激しい地区を除けばさらに調査区外に広がっている可能性がある。今回の調査区内、掘立柱建物跡や竪穴住居跡が集中して発見された南地区は、多賀城廃寺の伽藍中心から北東約250m、築地北東隅からは約200mの位置にあり、寺とは近接した位置関係にあるといえる。しかし、伽藍中樞部の中心から東側は67~181m、北側は32~151mの範囲をほぼ全面調査しているが、直接寺との結びつきを示すような遺構・遺物は発見できなかった。伽藍中樞部の中心から北側112~133mの位置にあるSD1120東西溝と、同じく東側約205mの位置にあるSD1130南北溝についてはそれぞれ何らかの区画となる可能性はある。SD1120は丘陵の尾根筋にほぼ沿った位置を東西に延びており、第14次調査区で大きく北に偏しているのは自然地形に合わせているとも見られる(註6)。その北側では明確な古代の遺構は検出されなかったことから、掘立柱建物跡や竪穴住居跡群の北側を区画している可能性がある。SB1110などおおよそ方向を同じくするものであろう。また、SD1130は丘陵の傾斜に対してほぼ直交するように延びている。方向がおおよそ真北方向であり、その東側で発見された竪穴住居跡の方向がほとんどSD1130と合っていることなどから計画的に掘削されたものである可能性が高い。これらの溝が具体的にどのような性格を持つものかは判断できないが、今後周辺地区の調査で解明していきたい。

8. まとめ

- (1)多賀城鹿寺の北東約200mの低丘陵上において古代の掘立柱建物跡15棟、竪穴住居跡9軒、溝跡11条、土器埋設遺構2基、中世の遺構として井戸跡1基、また中世の遺構の可能性のある掘立柱建物跡3棟などを発見した。
- (2)遺構は丘陵南斜面に多く分布し、北斜面では希薄である。
- (3)古代の遺構の年代はいずれも9世紀である。
- (4)竪穴住居跡には瓦を転用した暗渠を持つものがあり、工房の可能性はある。

(注1) 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡ほか一平成5年度発掘調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第35集 1994

(注2) 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』1992

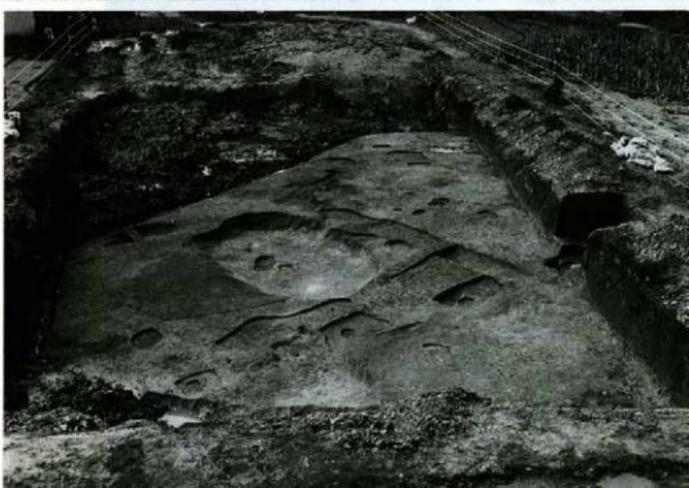
(注3) 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』1993

(注4) 多賀城市教育委員会『II.第14次調査』『高崎遺跡一第13～16次調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第42集
1996

(注5) 注3に同じ

(注6) 注4に同じ

写 真 图 版

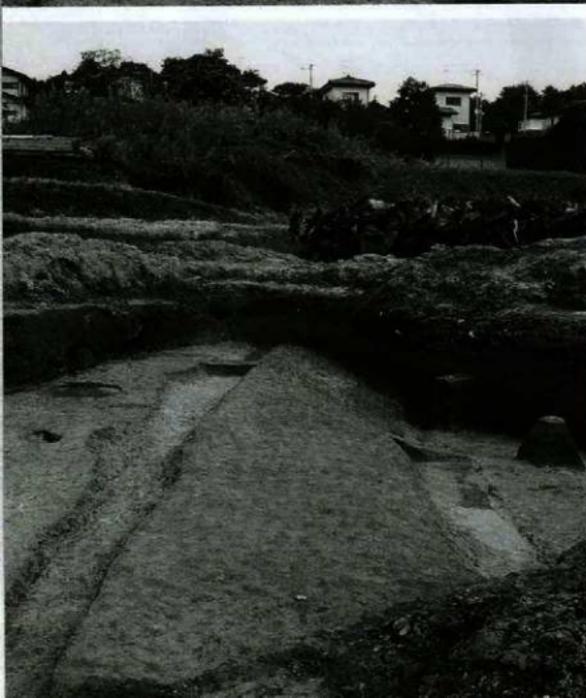
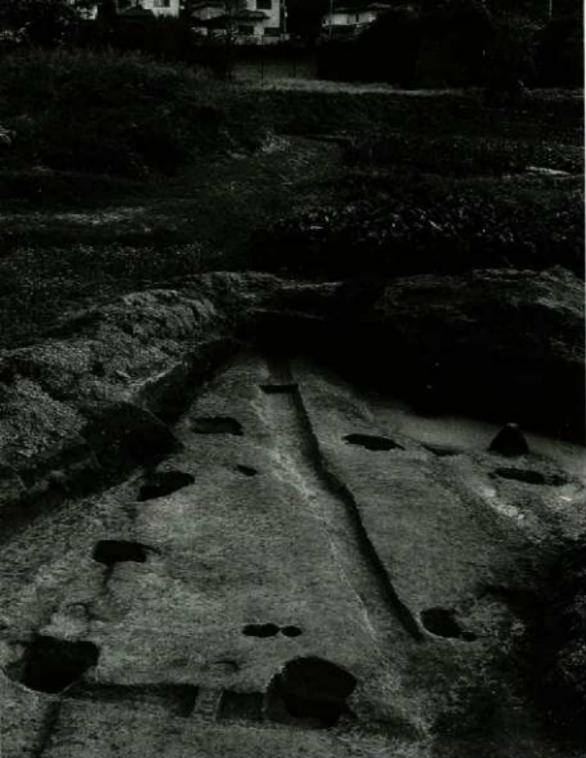


図版1 小沢原遺跡

上：調査前の状況（北より）

中：第1次調査全景（南より）

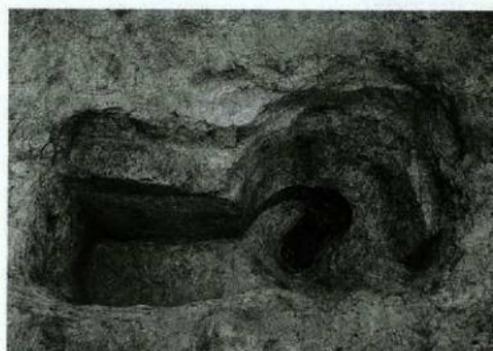
下：同上



図版2 小沢原遺跡

上：S B01（西より）

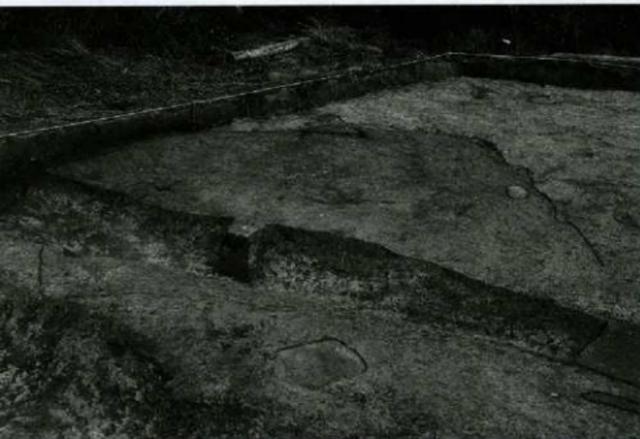
下：S D07・08（西より）



図版3 小沢原遺跡

左上：S B01西側柱列北より4間目柱穴
左中：同 3間目柱穴
左下：同 2間目柱穴

右上：同左B期底面
右中：同左B期底面
右下：S B01北西隅柱穴



図版4 小沢原遺跡
上：S 112 (西より)
中：同 検出状況
下：同 カマド
右下：同 カマド側壁細部





図版5 小沢原遺跡

上：S111（北より）

中：S105（西より）

中：岡 カマド

下：SK06（東より）

図版6 小沢原遺跡

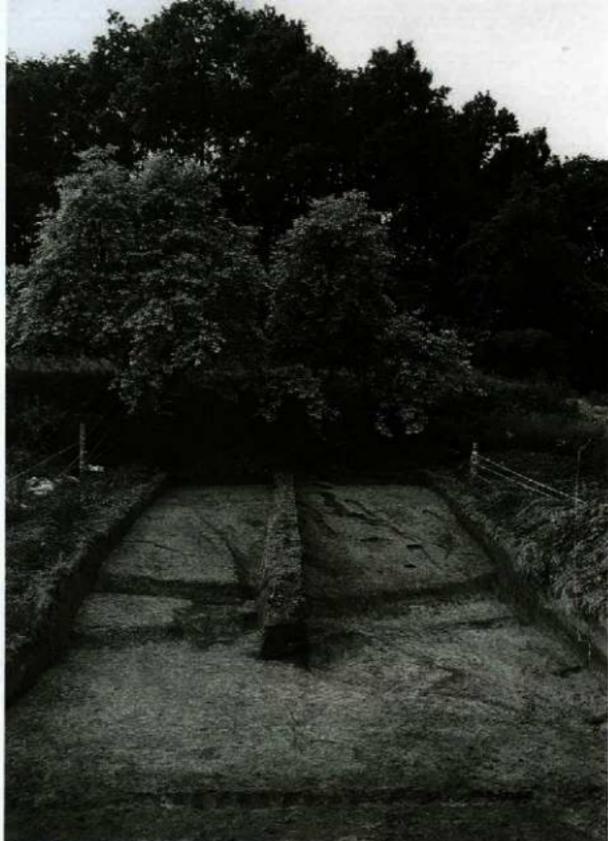
上： 第III調査区（北より）

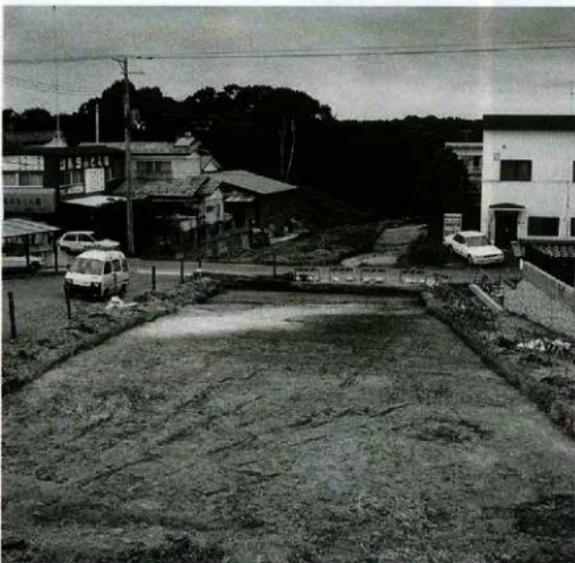
中左：第IV調査区No.2・3トレンチ（北より）

中右：同上 No.4・5トレンチ（西より）

下左：同上 No.3トレンチ（東より）

下右：同上 No.4トレンチ（東より）





図版7 高崎遺跡

上左：北地区・南地区北半部の調査前の
状況（南より）

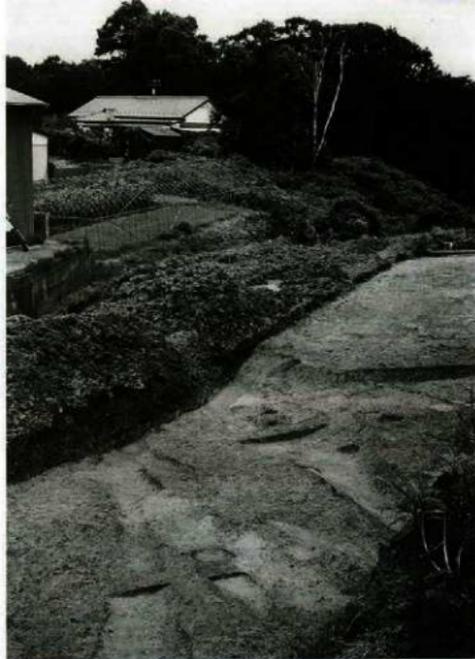
上右：SD1142（北より）

中：南地区北半部全景（南より）

下左：SX1141

下右：同上





図版 8 高崎遺跡

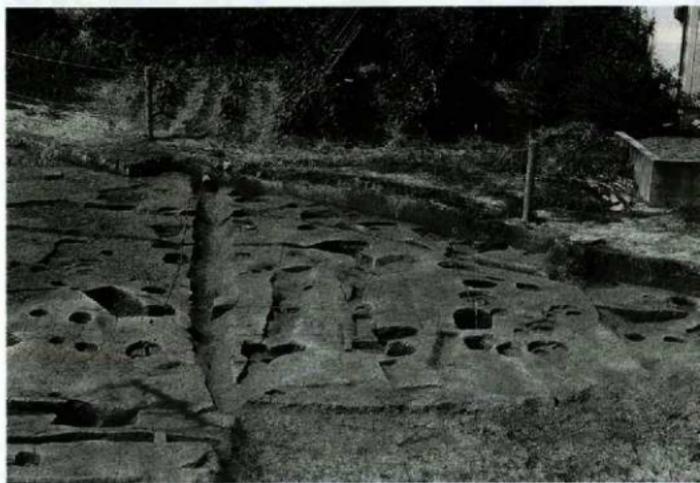
上左：北地区全景（南より）

上右：S D1138・1139（南東より）

中左：S X1137

中右：北地区No.1 トレンチ（南東より）

下：同上 No.2 トレンチ（西より）



図版9 高崎遺跡
上：第12次調査区全景（南より）
中：同上 近景（南より）
下：S B 1119柱穴遺物出土状況



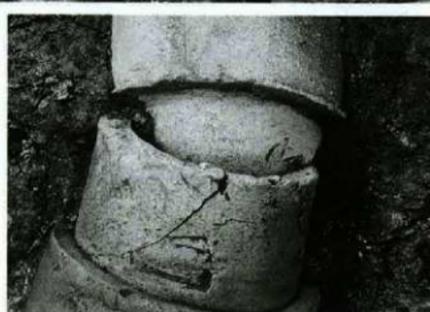
図版10 高崎遺跡

上：SB1110（南より）

中：同上南東隅柱穴礎盤検出状況

下：SD1150遺物出土状況

左：SD1130（北より）



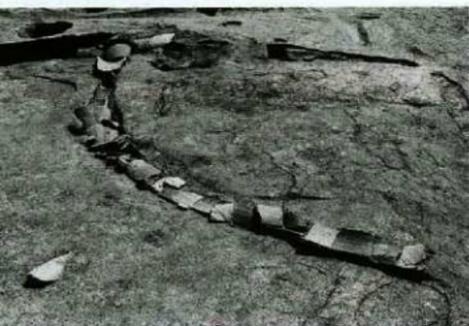
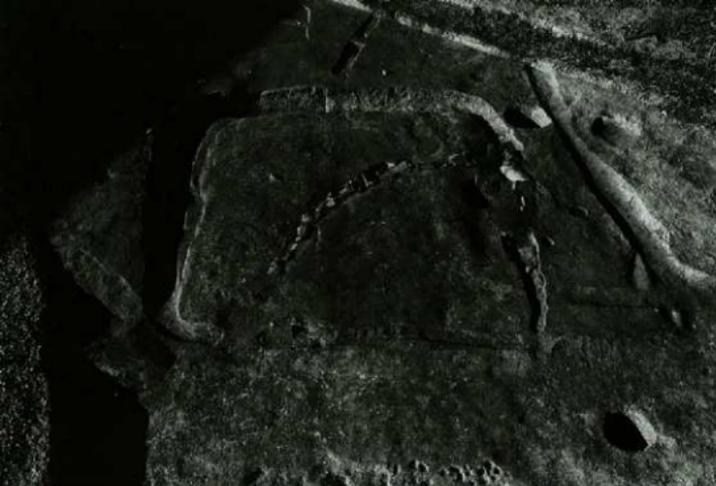
図版11 高崎遺跡

上： S11114 (南より)

中： 同上カマド (南より)

下左： 同上 (南より)

下右： 同上細部



図版12 高崎遺跡

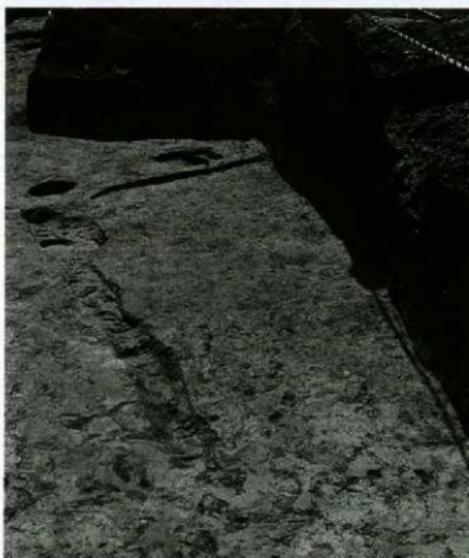
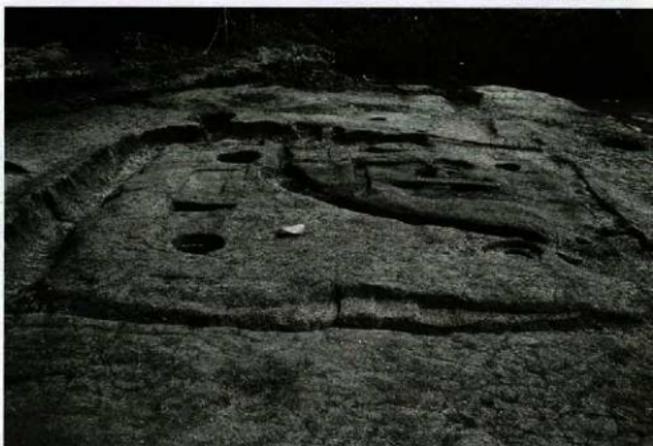
上： S1113D（南より）

中左：同上 暗渠（西より）

中右：同上 竈跡去後の状況（西より）

下左：同上 暗渠蓋細部

下右：同上



図版13 高崎遺跡

上：S11113C (南より)

中：同上 (西より)

下：S11135 (北より)



図版14 高崎遺跡

上：S I 1365B (南より)

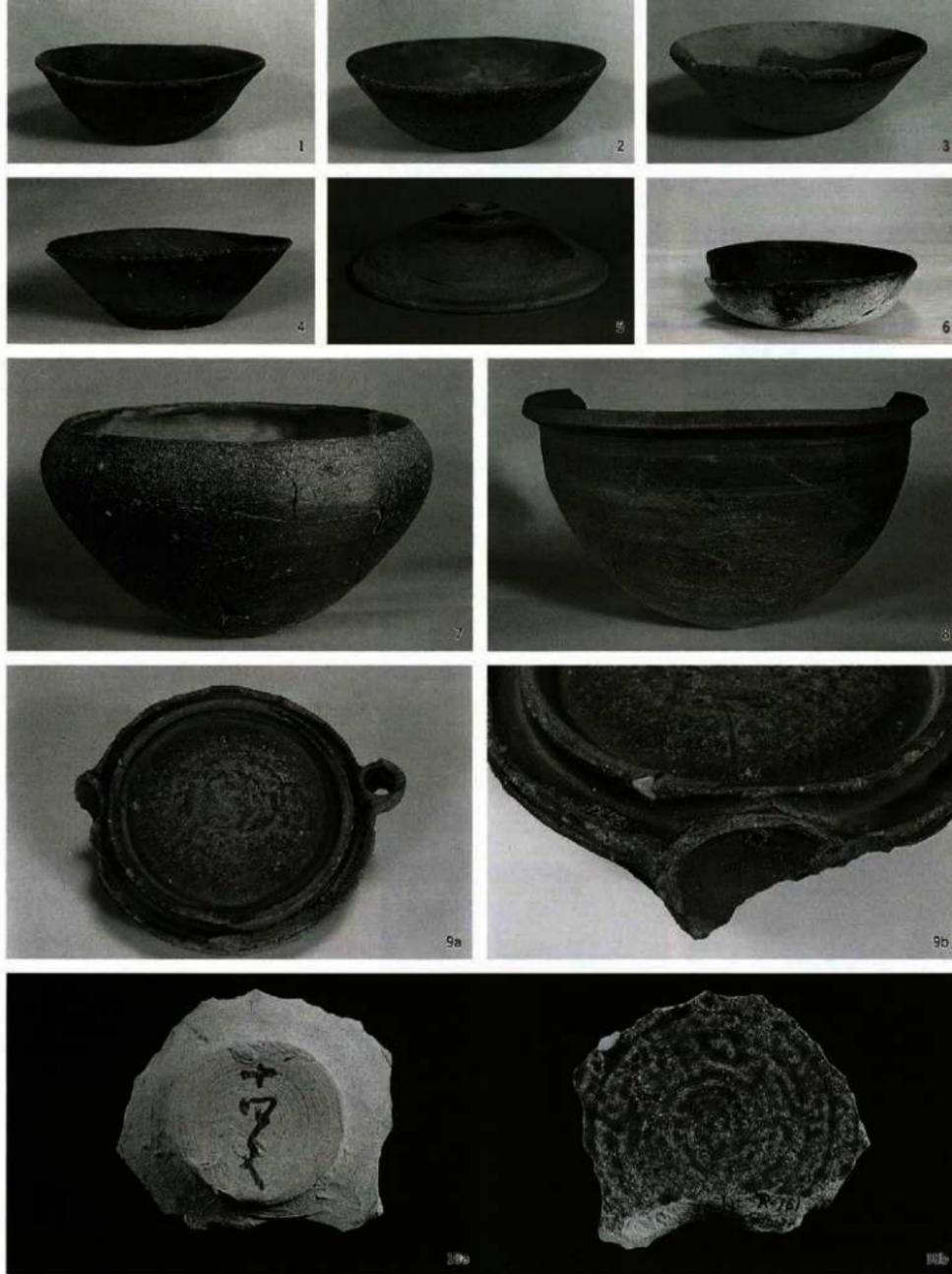
中：S X 1140

中：S E 1115 (南より)

下左：同上 カゴ出土状況

下右：同上





- 1 須恵器杯 SD1130 R(12)-5
 2 同上 SD1150 R(12)-9
 3 同上 S11113 R(12)-10
 4 同上同上 R(12)-3

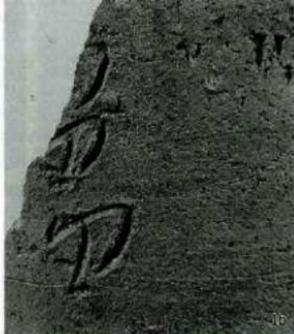
- 5 須恵器蓋 SD1130 R(12)-2
 6 土師器杯 SD1130 R(12)-4
 7 須恵器鉢 SD1130 R(12)-7
 8 須恵器壺 SD1150 R(12)-6

- 9 円面碗 SD1146 R(12)-1
 10 施釉陶器皿 第1層 R(12)-161

図版15 高崎遺跡 出土遺物 1



1a



1b



2a



2b



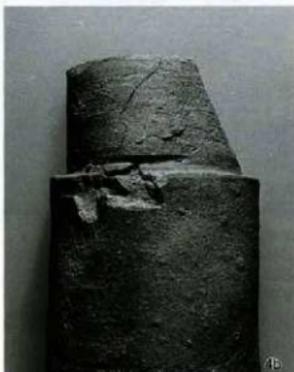
3a



3b



4a



4b

図版16 高崎遺跡 出土遺物 2

- 1 丸瓦 S 11114 R (12)-8
- 2 平瓦 S 11365 R (21)-27
- 3 丸瓦 S 11365 R (21)-10
- 4 同上

報告書抄録

ふりがな	おざわはらいせき・たかさきいせき							
書名	小沢原遺跡・高崎遺跡							
副書名	史跡連絡線関連遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第54集							
編著者名	千葉孝弥・武田健市							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL. 022-368-0134							
発行年月日	1999年3月							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小沢原遺跡	宮城県 多賀城市 湊島	042099	18008	38度 18分 1秒	141度 0分 21秒	第1次 19930601 ～19930716	460㎡	道路建設
						第2次 19940817 ～19941028	470㎡	
						第3次 19971118 ～19971125	280㎡	
高崎遺跡	宮城県 多賀城市 高崎	042099	18008	38度 17分 51秒	141度 0分 23秒	確認調査 19930719 ～19930806	1,630㎡	道路建設
						第12次 19940613 ～19941014	990㎡	
						第21次 19961210 ～19970131	110㎡	
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
小沢原遺跡	集落跡	奈良・平安時代		掘立柱建物 竪穴住居 溝 土壇				多賀城南東の丘陵部において桁行5間以上の掘立柱建物を発見
		近世		溝		陶器		
高崎遺跡	集落跡	奈良・平安時代		掘立柱建物 竪穴住居 溝 土壇		瓦		瓦転用の暗渠をもつ竪穴住居を発見
		中世		掘立柱建物 井戸		かわらけ		

多賀城市文化財調査報告書第54集

小沢原遺跡・高崎遺跡

—史跡連絡線関連遺跡発掘調査報告書—

平成11年3月26日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会
多賀城市建設部道路課
多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368-1141

印刷 富士印刷株式会社
多賀城市笠神五丁目15-28
電話 (022) 367-1157
